

文学部附置人文科学研究
所論叢

第7号

青山学院大学

2025

目次

シンポジウムの記録

2024 年度シンポジウム報告「はじめての講談 これからの古典」	
	福田美雪 …… 1

論文

王室賛美と出版検閲の狭間	
—— 政治・宗教・出版史とパラテキストから読むジョージ・サンズの『雅歌の意訳』——	
	笹川 渉 …… 9
モーリス・ドラージュ作品目録再編纂に向けて	
—— 5つの目録における作品名・出版・初演の再検証 ——	秋道 瑠香 …… 25
16 世紀アントワープにおける饗宴と絵画展示	
—— ピーテル・ブリューゲル 1 世の寓意画 ——	堀内 秀平 …… 53

2024 年度研究プロジェクト報告

AGU Digital Access Project: Digital Humanities Collaboration and Outreach: 2024 Report	
	DABBS, Thomas W.
	笹川 渉 …… 79
AGU 環境人文学フォーラムの発展	結城 正美 …… 83
伝統芸能における古典のよみがえり —— 継承と創造の可能性を探る ——	
	福田美雪 …… 91
	佐藤 かつら
「山吉文庫」の基礎的研究	岩田 みゆき …… 97
「データベースを用いた日本現代史研究Ⅱ」について	小宮 京 …… 107

彙報	117
----	-----

☆ ☆ ☆

研究ノート

洛中・六角堂本尊考 —— 親鸞夢告にあらわれた白衣の聖僧をめぐって ——	
	津田 徹英 …… 1
越後の漢方医・森田甫三宛書状について —— 渋川道達書状を中心に ——	
	堀内 誠司 …… 17

Contents

Record of the Symposium

- Symposium Report : Invitation to Kôdan
—— Rethinking the Classics —— FUKUDA, Miyuki ····· 1

Article

- Between Royal Panegyric and Censorship: Politics, Religion, Print
Culture, and Paratexts in George Sandys's *Paraphrase upon the Song
of Solomon* SASAKAWA, Wataru ····· 9
- Towards a Recompilation of Maurice Delage's Catalogue of Works:
Verification and Correction of Titles, Publication, and Première in
Existing Catalogues AKIMICHI, Ruka ····· 25
- Convivium and the Decoration of Paintings in the 16th Century Antwerp:
The Allegorical Paintings of Pieter Bruegel the Elder
HORIUCHI, Shuhei ····· 53

2024 Fiscal Year Research Project Report

- AGU Digital Access Project: Digital Humanities Collaboration and
Outreach: 2024 Report DABBS, Thomas W.
SASAKAWA, Wataru ····· 79
- Developing the AGU Environmental Humanities Forum
YUKI, Masami ····· 83
- The Revival of Classics in Traditional Arts
—— Research on Succession and Creation —— FUKUDA, Miyuki
SATO, Katsura ····· 91
- A Basic Research on “Yamayoshi Bunko” IWATA, Miyuki ····· 97
- The Usage of Digital Archives for Doing Historical Research on
Contemporary Japan II KOMIYA, Hitoshi ····· 107
- Bulletin** ····· 117

☆ ☆ ☆

Research Note

- Considering the Principal Image in Rokkakudô Temple, Kyoto :
the Image of the Holy Monk with the White Robe in Shinran's
Dream TSUDA, Tetsuei ····· 1
- The Research Note about New Letters to Morita Hosan Centering
on from Dôtatsu Shibukawa HORIUCHI, Seiji ····· 17

2024 年度シンポジウム報告

「はじめての講談 これからの古典」

Symposium Report : Invitation to Kôdan —— Rethinking the Classics ——

福田美雪
FUKUDA, Miyuki

はじめに

2024 年度の文学部附置人文科学研究所においては、フランス文学科の福田美雪（研究代表者）と比較芸術学科の佐藤かつらとの共同プロジェクト「伝統芸能における古典のよみがえり——継承と創造の可能性を探る」を新規採択していただいた。プロジェクト初年度の試みとして、2024 年 12 月 4 日（水）に、新進気鋭の講談師である神田伊織さんをゲストにお迎えして、講談シンポジウム「はじめての講談 これからの古典」を開催した。附置研究所に後援していただき、学生・院生の快い協力を得ることもできて、当日は学内外の来場者約 50 名からたいへんな好評を受けた。本稿では、「講談シンポジウム」という初めての試みを着想・準備した経緯、当日の盛り上がりやその後の展開について、概要をご報告したい。

1. シンポジウムの着想

本シンポジウムは、福田と佐藤が共通して抱えている最近の問題意識から出発した。現代の若年層に「普遍的な古典作品」を味わってもらうため、専門家としてどんなアプローチが可能なのか、というすぐには答えの出ない問いである。今日の歌舞伎にせよフランス文学にせよ、下支えしているのは長年の愛好者であって、けっしてデジタルコンテンツに慣れ親しんだ若い世代ではない。コロナ禍を挟んで多種多様なエンターテインメント作品が世に氾濫し、すさまじい速度で消費されていくなかで、古典芸能をじっくり味わう学生、フランス語の原典を講読する学生は、年々減少していくばかりという危機感を共有していた。

福田は、19 世紀半ばのフランスで流行したが、その後急速に衰退した「オペレッタ」を題材に、現代における活発な蘇演の状況について研究し始めたばかりである。いっぽう佐藤は、河竹黙阿弥作品の上演の継承に関する研究の蓄積があり、現代に至るまでの歌舞伎にお

ける黙阿弥作品の再演の状況を調査していた。両者が協同してひとつの企画を立てるにあたり、「古典」の演目自体にフォーカスするのではなく、その継承のあり方に着目することで、演者と研究者、そして新たな鑑賞者となりうる学生、この三者を繋ぎ、「古典のよみがえり」をめぐるさまざまな可能性についてともに議論したいという意見で一致した。

シンポジウムのゲストとして白羽の矢を立てたのは、フランス文学の専門家という異色の経歴を持つ新進気鋭の講談師、神田伊織さんである。過去には福田と同じ大学院に所属し、ともに自然主義文学者のエミール・ゾラを研究していた。しかし伊織さんの講談師への転身を知ったのはまったくの偶然である。すでに本学相模原キャンパスで、留学生を対象にシャルル・ペローの「赤ずきんちゃん」を披露し、好評を博したという。東京大学農学部では、環境をテーマにしたシンポジウムで宮沢賢治の「グスコブドリの伝記」を新作講談として披露、豊島区の鈴木信太郎記念館では「和室で楽しむフランス文学」と題して、複数年にまたがるユゴーの『レ・ミゼラブル』の連続読みに挑戦しているという。「古典のよみがえり」をテーマにしたプロジェクトにうってつけのゲストであることから、是非にと登壇を打診し、ご快諾いただいた。

そもそも講談とは、おもに武将や偉人の物語などの歴史にちなんだ話を、座ってひとりで「読み聞かせる」古典芸能である。その歴史は落語よりも古く、一般に知られる「講談」の始まりは、「太平記読み」とされている。江戸後期からは、歴史を学ぶというより話芸を楽しむものへと変化していき、世相風俗を描く演目も出てきた。昭和後期以降は、男性をしのぐ勢いで女性講談師が増えているそうだ。今日では、観客の好みにあわせてさまざまな演目に加わり、外国の物語はもとより、現代を舞台とした新たな演目も生みだされている。これらの特徴から、歌舞伎やフランス文学の「よみがえり」のヒントが得られるのではと考えた。

2. シンポジウムの企画

本シンポジウムを企画するにあたり、いくつかの新しい挑戦を試みた。まず、予習が不要で、手ぶらで気軽に参加できるシンポジウムを目指すということだ。そのため、「はじめての講談 これからの古典」というキャッチコピーを掲げた。一般的なシンポジウムのように、専門家による学術的な講演から始めるのではなく、まっさらな状態でまず「講談」を聴くことで、古典ならではの魅力や底力をストレートに味わってほしいと考えた。幸運にも施設課から高座や緋毛氈を借用することができ、「空間」「高座」「演者」「聴衆」さえ揃えば、特別な準備のいらぬ話芸であるを知った。

次に、文学部の5学科すべての学生・教員が、興味をもって参加できるようなプログラムを考えた。ゲストの経歴は、フランス文学科と比較芸術学科に深く関わるが、講談というジャンルそのものは日本文学や日本史にもゆかりが深い。また伊織さん自身は、「ハリー・ワー

ディーニ」や「キング牧師」など、アメリカの著名人を題材にした新作講談を創っている。伊織さんとも相談を重ね、「これからの古典」というテーマにふさわしく、軍記物の花形ともいべき「扇的」、そしてご本人のライフワークであり、映画やミュージカルで学生にもなじみの深い『レ・ミゼラブル』シリーズの第1話、この2本立てに演目を決定した。

3つ目の挑戦は、後半の対談セッションを、プロジェクトの当事者である教員2名ではなく、学生・院生にお任せするということだ。これは、多くの学生に素直に講談を楽しんでほしい、そして「はじめての講談」をどんな風に聞いたか率直に感想を伝える時間をできるだけ設けてほしいという、伊織さんからの要望に応えるためでもあった。奇しくも比較芸術学科には、国語塾経営者だった伊織さんの教え子であり、いまでも講談の助手として活躍する井上雄登さんが在籍している。さらにフランス文学科からは、福田ゼミ所属で『レ・ミゼラブル』を愛読する三宅杏汰さん、そしてより専門的な議論ができる院生として、歌舞伎を研究している比較芸術学科の鈴木麻由さん、この3名に登壇を快諾していただいた。福田と佐藤の両名は、文字通り「黒衣（くろご）」に徹して当日を迎えることとなった。

3. シンポジウムの展開

シンポジウム当日は、4限目にあたる第1部を講談セッション、5限目にあたる第2部を学生との対談、質疑応答のセッションに大別した。第1部の冒頭では、司会の福田が伊織さんのプロフィールを手短に紹介したのち、ゲストご自身に「講談レクチャー」をお願いした。「無駄に広い教室ですね」（会場は17409教室、300人収容）という導入で笑いが起こり、一気に会場の雰囲気はうち解けた和やかなものになった。そもそも「講談」になじみがなく、「落語」との区別もあいまいな聴衆がほとんどである。まず紹介されたのは、講談は張り扇ひとつのみであらゆる表現を行うこと、古典の演目はいろいろあるが他の伝統芸能ほど決まった「型」があるわけではなく、講談師オリジナルの表現や解釈が許容され、どんな新作を作ってもよいことなど、きわめて自由度の高い独特の魅力である。また落語とは異なり、あくまでも「物語を読む」話芸であるため、必ず「これにて読み終わりいたします」という言葉で締めくくることが、短い時間で講談というジャンルの要点を明快に解説していただいた。「講談社」の社名も、文字通り「講談」に由来しているという話には、会場の学生たちも驚いたようだ。

3-1) 『源平盛衰記』より「扇的」

先述のとおり、講談のルーツは「太平記読み」にあると言われる。軍記物、とくに『源平盛衰記』は講談師修業の出発点であり、古典演目の復活に力を注ぐ伊織さんの原点ともなる作品だ。「扇的」は1185年2月、屋島の合戦のできごととされる。弓の名手、那須与

一が沖の平氏、陸の源氏、敵味方双方を感嘆させる名場面は有名で、古典のなかでもとくに愛されてきた演目だ。この逸話ならば文学部、とりわけ日本文学科や比較芸術学科の学生ならば聞き覚えがあるだろうという判断から、最初に披露していただくことにした。

伊織さんの「扇的」では、平宗盛率いる平家方の陣営と、九朗判官義経が率いる源氏方の陣営の軍議の場面が、ユーモアを交えつつ臨場感たっぷりに語られた。平家方は、船縁に日輪を描いた扇を立てて源氏を挑発することで、射落としても射損ねても朝敵討伐の大義名分が立つという戦略を練る。扇的を立てるのは、美貌の誉れ高い女官の「玉虫御前」である。いっぽうの義経は、平家方の思惑を見抜いたうえで、「日輪の扇」の要（かなめ）を射抜く名手あれば、朝敵とならず士気も大いに高揚する好機と見る。ところが、畠山重忠、佐々木高綱、那須十郎左衛門など、源氏方の名だたる武将は、あまりの難題にしり込みし、適当な言い訳で辞退して義経の不興を買う。このくだりは可笑しみたっぷりに語られて、現代社会における上司と部下のやり取りも彷彿とさせ、会場全体の笑いを誘った。そしてついに、十郎左衛門の子息、弱冠 17 歳の那須与一が射手として名指される。

後半の「屋島の合戦」では、一転して緊張感あふれる「修羅場読み」が始まり、場の空気をがらっと変える朗々としたリズムカルな口調で、源氏方の威風堂々たる出陣が描写された。武将や軍馬の勇壮な出で立ちが畳みかけるように語られる長広舌は、「扇的」の聞かせどころであり、ほとんど息もつかせぬ勢いで繰り返された。「語彙が難しくて内容があまり理解できなかった」という学生のコメントもあったが、軍記物特有の「修羅場読み」の醍醐味は、頭で内容を「理解しよう」とするのではなく、テンポのよい音のリズムそのものを楽しむことにあるようだ。

北風が吹き荒れる波打ち際の岩場に、那須与一が馬の手綱を巧みに操って駆け上り、八百万の神に渾身の祈りを捧げる場面、そして波が静まった一瞬にひょうと矢が放たれ、見事に扇の要を射抜いて敵味方がやんやの喝采を送る名場面では、聴衆もまるでその場に居合わせているかのように、固唾を飲んで聴き入っていた。全体を通して老若男女の声が入り乱れる多声的な物語であるが、伊織さんはそれを見事に演じ分け、17号館の教室を平安末期の合戦場へと変えてみせた。屋島の戦いで退却を余儀なくされた平家方は、「扇的」からわずか2か月後、最後の決戦である壇ノ浦の戦いに臨むこととなる。「祇園精舎の鐘の声諸行無常の響あり」という有名な一節を想起させる読み終わりであり、古典講談の普遍的な魅力が存分に示された半時間だった。

3-2 『レ・ミゼラブル』より「ジャン・ヴァルジャン」

『レ・ミゼラブル』（1862）は、言わずと知れたヴィクトル・ユゴーの代表作である。パン1斤を盗んだ罪で19年もトゥーロン監獄に送られたジャン・ヴァルジャンの運命を軸に、皇帝ナポレオン没落直後の1815年から七月王政期の1833年までを叙事詩的なスケールで

描いた長編作品だ。日本でも黒岩涙香の翻案『あゝ無情』（1902）に始まり、100年以上にわたって広く親しまれてきた。フランスでは、1925年以來幾度となく映像化され、ジャン・ギャバンやジェラルド・ドパルデューなど名だたる俳優たちがジャン・ヴァルジャンを演じてきた。フランスのみならず世界中で『レ・ミゼラブル』のミュージカルは愛され、2012年のハリウッド映画でその人気は不動のものとなった。

伊織さんは、原作の第1巻『ファンチヌ』より、「転落」と題された章——かつては国語の教科書に掲載され、おそらく日本人読者にとりわけなじみ深いエピソード——を再構成した、新作講談「ジャン・ヴァルジャン」を披露された。19世紀初頭のある街に、みすばらしい旅装の男が現れる。行く先々で食事と宿を求め、街の人々は彼の旅券を見るなり、怖気を振るって追い払う。飢えとみじめさで疲れはてた男は、ついに街で唯一誰にでも開かれたミリエル司教の館にたどり着く。じつはこの旅人こそが、「囚人24601号」と呼ばれた元徒刑囚、ジャン・ヴァルジャンその人であった……という導入だ。

ユゴーは『レ・ミゼラブル』を通して、社会の光と影、正義と悪徳など複数の対立項を示した。ヴァルジャンとミリエル司教の出会い、その後の長い物語の核となる「罪とその赦し」を描いた挿話だ。貧しい人々（レ・ミゼラブル）にあふれる慈悲を注ぎ、私欲のないミリエル司教は、唯一の贅沢品である銀食器を出して客人を温かくもてなす。しかし夜中に目覚めたヴァルジャンは、陰鬱な葛藤の末にそれを奪い去る。翌朝、憲兵が盗んだ銀食器ごとヴァルジャンをひっ捕らえて司教館を訪ねるが、ミリエル司教は「友に贈ったものです」と穏やかに諭し、さらに大切な銀の燭台さえも「お忘れですよ」と手渡す。しかしその時司教はヴァルジャンに、「私はこれであなたの魂を買って神に与えた、これからは罪の中に生きず正直者に生まれ変わると約束してほしい」と静かに語りかける。この厳かな言葉は、主人公がのちにマドレーヌ市長と名を変え、工場経営や慈善事業で貧しい人々を救い、女工ファンチヌやその娘コゼットと出会うまで、彼の全人格・全人生にかかわる約束となる。

原作における「銀の燭台」のエピソードは、わずか一章とはいえ複雑な構成で、閉鎖的な街の描写、ジャン・ヴァルジャンの過去、司教館での一夜や翌朝の逮捕劇など、「扇的」よりもシリアスな展開が続く。しかし伊織さんは、心身ともに疲労困憊した旅人、自暴自棄になった元徒刑囚、はじめて慈悲に触れ改悔した男と、ジャン・ヴァルジャンの心の変化を大胆かつ繊細に演じ分けた。また、街の人々や憲兵と、ミリエル司教や女中のマグロワールばあさんを対比させるなど、ユーモアや緩急を交えた話芸が見事だった。筆者は伊織さんの「ジャン・ヴァルジャン」を通算3回聴いているが、200年以上前のフランスを舞台にした原作であるにもかかわらず、聴衆や場の雰囲気に応じて瞬時に細部をアレンジし、誰にでもわかりやすく物語を紡いでいることが実感された。

とくに印象深いのは、ミリエル司教から銀の燭台を贈られて改心したはずのジャン・ヴァルジャンが、羊飼いの少年プチ・ジェルヴェから1枚の銀貨を盗むラストシーンだ。ヴァ

ルジャンは子どもが偶然落とした銀貨を反射的に踏みつけ、どんなに懇願されても頑として足をどけず、プチ・ジェルヴェは泣きながら立ち去る。はっと我に返ったヴァルジャンは必死に少年を探すが、荒野には人影ひとりなく、自らの罪業の深さに改めて嗚咽する。この短い挿話は、ジャン・ヴァルジャンを含む登場人物たちに後々大きな影響を及ぼす重要な事件となる。感動的な銀の燭台の場面で物語を閉じず、夕闇のなかヴァルジャンが悲嘆に暮れるシーンまでを語りきる見事な構成だった。次話「ファンチーフ」へと繋がる、主人公を待ち受ける波乱万丈な運命が示唆されて読み終わりとなり、会場からは大きな拍手が送られた。

3-3) 学生とのフリートーク「伊織さんと話そう！」

第一部の熱気も冷めやらぬなか、第二部は伊織さんを囲む井上雄登さん、三宅杏汰さん、鈴木麻由さんとのフリートークで幕を開けた。第一部の感想を含めた学生との対話や質疑応答にできるだけ時間をとりたい、とは伊織さんのかねてからの要望でもあった。教員側は学生たちの適応力を信頼して、トークの進行自体も彼らにほとんど委ねるかたちとなった。学内外の聴衆が講談の余韻に浸っている状況のなか、3名は気負わず瑞々しい姿勢で、第二部のリラックスした雰囲気を見事に作り出してくれた。

登壇者のなかで唯一伊織さんと長年の親交がある井上さんは、国語塾時代から現在に至るまでの演劇への関心を語り、数ある芸能のなかでの講談特有の魅力や難しさについて補足をしてくれた。三宅さんは、愛してやまない『レ・ミゼラブル』の講談バージョンから受けた感動を率直に語った。また、塾講師としての自らの経験にひきつけて、自国の古典文学を守り、教えるためにどうしたらよいか、という質問もしてくれた。これに対して伊織さんからは、教えるべき古典作品がある、ないしは生徒をこう育てたい、と思ったことはなく、むしろ色々なものにひそむ面白さを探す、好奇心ゆえの回り道にこそ学びの本質があるのではないか、という応答があった。続いて鈴木さんからは、それまでの議論の流れを踏まえたうえで、自身の専門とする歌舞伎と講談に相通じる部分や、はじめて聞いた講談と歌舞伎の違いについてのコメントがなされた。タイプの異なる3人の登壇者は、互いに初対面とは思えないほど、またゲストとの対談が初めてとは思えないほど、臨機応変に言葉を選びながら伊織さんとのトークを繋いでくれて、前半に劣らぬ充実した内容となった。

対談のあとは会場にマイクを渡して質疑応答の時間となった。じつは、伊織さんのユニークな経歴から、「なぜ就職を選ばなかったのか」、「どうして講談師になったのか」といった、進路にまつわる質問を予測していた。しかし会場からは、第一部のインパクトを表すかのように、講談そのものに対する積極的な質問が相次いだ。たとえば外国文学を含む原作を講談にアレンジするときの工夫や、どんなジャンルの作品が講談化に向くと考えるか、などの問いである。とくに核心を突いていたのは、最後に比較芸術学科の院生から出た、「原作の古典を読んでいる聴衆が減っており、演じる側と受容する側の共通理解が成立しなくなりつつ

ある中で、講談を含む古典芸能はこれからどのような未来に向かっていくとお考えですか」という質問だった。これは、本シンポジウムの、遡れば本プロジェクトの出発点となった問題意識にも通じる問いかけである。これに対し伊織さんは、時代の変化の波に洗われても残り続ける古典には、ジャンルを問わない普遍性が確実に存在すること、物語を面白いと思う心が聴衆から失われることはない、という力強いメッセージで締めくくられた。

4. シンポジウムの総括と今後の展望

本シンポジウムには予想をはるかに上回る好意的な反響をいただき、企画者一同たいへん励みになった。事後に学内外の参加者からアンケートを35枚回収したが、とくに学生たちからは、「はじめて聞く講談がこんなに面白いとは思わなかった」という新鮮な感動が綴られていた。参加してくださった先生方からも、「この作品を講談にしてほしい」という要望が複数寄せられた。前半が講談、後半が学生との対談という構成も好評で、「ぜひ次回を」という多くのリクエストに応じて、2025年度も講談シンポジウムを開催する運びとなった。伊織さんはその後も、精力的に古典作品の掘り起こしや新作講談に取り組み、『レ・ミゼラブル』シリーズは第3話「シャンマチュー事件」まで完成している。原作はまだ続き、フランスでとくに人気のコゼットやガヴローシュが登場するまで、だいぶ先がある。『レ・ミゼラブル』を通して「フランス文学講談」が確立される日を楽しみに待ちたい。

いっぽう、企画側としてはいくつかの反省も残った。今回は、幅広い聴衆をひきつける「講談」という切り口から、「古典のよみがえり」を探る試みが奏功したが、5学科を横断する企画を立ち上げ、学内外に周知することはかんたんではない。実際の反響が大きかっただけに、教室の広さと聴衆の数がアンバランスだったことには悔いが残り、もっと多くの学部生に足を運んでもらう工夫ができていれば、というのが率直な感想である。附置研究所のHP掲載に加え、伊織さんのSNSでも告知していただき、約1,300枚のチラシを学内外に配布したが、結局集客につながるのは「関係者の口コミ」だった。とりあえず今回は種蒔きの時と捉え、継続的な改善を重ねつつ、ゲストに依存しない形で粘り強くプロジェクトを育てていきたい。

最後に、「講談と文学はいかにして協同し、未来に向けて発展していけるのか」という大きな宿題が残された。プロジェクト本体の問題に当てはめれば、「古典芸能と外国文学」が協同するさまざまな可能性について、専門家がいまできることを考える余地は大いにある。そして、「いつでも」「どこでも」味わえる講談というジャンルには、文学部のどの学科にも学びのヒントが隠されているように思われる。「扇の的」と「レ・ミゼラブル」、いずれも「読み終わり」のときには、たしかに「話芸を聴く」というよりも「物語を読んだ」という圧倒的な充実感に浸された。それは、人物同士の軽妙な会話を「聴かせる」落語と、さまざまな

レトリックを駆使して情景を叙述し、物語を「読ませる」講談との決定的な違いであるとともに、真に面白い物語を「読む」ことから引き出される、ある種本能的な歓喜の強力を思い知らされた瞬間でもあった。

本企画の準備にあたって、2022年度の附置研究所主催シンポジウム『人文学の挑戦：近現代のマイノリティ文化をめぐって～5つの視点から読み解く世界の陰影～』での経験に、幾度も助けられた。5学科を横断するテーマを立てるという発想は、附置研究所を設立された伊達直之先生、当時所長を務められた水野千依先生の力強い後押しによるものである。また、プロジェクトの発足から企画の遂行に至るまで、とりわけ附置研究所所長の中村光宏先生、助手の吉岡亮祐先生、そして教務・事務の方々にはひとかたならずお世話になった。末筆ながら記して厚く感謝申し上げる。



王室賛美と出版検閲の狭間
 —— 政治・宗教・出版史とパラテキストから読む
 ジョージ・サンズの『雅歌の意識』 ——

**Between Royal Panegyric and Censorship: Politics, Religion, Print Culture,
 and Paratexts in George Sandys's *Paraphrase upon the Song of Solomon***

笹川 渉
 SASAKAWA, Wataru

1. 初期近代イングランドにおける「雅歌」

1641年に出版されたジョージ・サンズ (George Sandys, 1578–1644) の『雅歌の意識』 (*A Paraphrase upon the Song of Solomon*) は、旧約聖書「雅歌」全8章を8歌の韻文訳にしたものである。初版の出版時には次のような国王への献呈文が冒頭に掲げられた。

国王陛下へ

陛下、

私はこの神聖な結婚式へあなたをお招きする所存です。冠をいただいたミューズが歌う祝婚歌 (Epithalamium) へと。これほどまでに神々しい美を備え、これほどまでに調和した愛情で結ばれた2人はかつて存在しませんでした。花婿は無限に彼女の愛に値し、きわめて高価な代償で贖われ、計り知れぬほどの貴重な持参金で豊かにされたのです。

陛下、陛下のお名前を印刷することで、私の不完全な作品を長きにわたり流通させることを何とぞお許しください。陛下の吉祥の星位に導かれ、私は多くの岩礁の間を無事に航行することができました。そして今、終の港に到り着き、老朽した私の船を解体いたします。

陛下の最も謙虚なる僕、ジョージ・サンズ (Sandys, *Poetical* 2: 337)

ここには『雅歌の意識』に関する2つの問題が提起されている。第一は、献辞冒頭で語られる「神聖な結婚式」と「祝婚歌」という枠組みによる愛の表象である。サンズは「雅歌」

本稿は2023年9月20日、国際文化会館で開催されたオペロン会での口頭発表、「『雅歌』の「解釈」をめぐって——ミルトンの『失楽園』とサンズの『雅歌の意識』」の発表原稿に、大幅に加筆修正を加えたものである。本稿の執筆に際してはJSPS 科研費 22K00382 の助成を受けた。

を祝婚歌の伝統に位置付けているが (Lewalski 64; Murphy 60; Schonfield 29–34)、同時代の「雅歌」の翻案に見られる、花婿をキリスト、花嫁をキリスト教会または信者の魂とみなす伝統的な寓意的解釈を明示せず、国王への献辞を記すにとどまっている。この構成は、テキストをキリストと教会の寓意に閉じるのではなく、花婿と花嫁を国王と王妃に重ねる予型論的な読みを成立させよう。だが同時に、そのような読解は、プロテスタント国家イングランドにおいてカトリックの王妃ヘンリエッタ・マリア (Henrietta Maria, 1609–1669) をどう位置づけるかという緊張を同時に露呈させる。

もうひとつの問題は、第2段落で述べられるサンズが望む「作品を流通させること」、すなわち出版に関わるものである。『雅歌の意識』は当初、「詩編」(その一部にはヘンリー・ロウズ (Henry Lawes, 1595–1662) 作曲の楽譜も併せて印刷された)に加え、「ヨブ記」、「伝道の書」、「エレミア書」、および旧約・新約聖書から抜粋した意識を取めた、1638年刊行の『聖なる詩集の意識』(*A Paraphrase upon the Divine Poems*)に組み込まれる予定であったと考えられる。しかし、おそらく『雅歌の意識』の官能的性格ゆえに、印刷段階で『雅歌の意識』のみが削除されたと見られる。そしてその出版可否には、カンタベリー大主教ウィリアム・ロード (William Laud, 1573–1645) の判断が何らかの形で関わっていた可能性が考えられる。

17世紀イングランドにおいて「雅歌」の翻案の出版が問題となったのは、「詩編」とならんで「雅歌」は政治性を帯びた聖典であったためである。Elizabeth Clarke は、ピューリタンのフランシス・ラウス (Francis Rous, 1579–1659) らが「雅歌」を用いながらカルヴァン主義的な「神秘的結婚」(mystical marriage)を論じ、反カトリックかつ反アルミニウス主義の主張を展開したことを指摘する (Chapter 2)。その論によれば、1630年代の「雅歌」関連の出版物には、花嫁に対する脅威が、イングランドを象徴する「閉じられた庭」の外部に確かに存在するとはもはや言い切れないという認識が表れている (52)。言い換えれば、ピューリタンの解釈は、王妃や、アルミニウス主義のロード体制のもとでカトリック化したイングランド国教会が、キリストの「敵」となりうる可能性への懸念を示したのである。こうした状況を踏まえると、当該の出版物は、検閲制度を統括したロードにより検閲対象になったと考えられる。一方で王党派は反カトリック的な「神秘的結婚」に対抗し、チャールズ1世 (Charles I, 1600–1649) とヘンリエッタ・マリアの結婚に象徴的意味を見出し、花嫁をカトリック教会とする立場を打ち出した (Clarke 76–77)。

そのような政治的・宗教的状况において、サンズの『雅歌の意識』はどのように位置付けられるべきであろうか。彼の政治的立場からすれば王党派の主張として理解されうるが、Clarke は本作には触れていない。その理由として、サンズが「新古典主義の時代への道を準備するやり方で、エリザベス朝作家の湧き立つ想像力を保持していた…学者詩人」と評されるように (Davis 253)、本作もまたルネサンス人文主義の系譜に連なる、一見政治性と

は無縁の抒情的作品と受け取られた可能性が考えられる。一方 James Ellison は、サンズの作品に国王への訓戒的側面やロード批判を見出しつつも、『雅歌の意識』については検閲の問題を指摘するにとどめている (210–11)。そこで本論では、国王と王妃の結婚を主題とする本作を、献呈詩や扉ページといったパラテキストと併読することで、「雅歌」の翻案に対する検閲のもとで『雅歌の意識』がいかに出版へ至ったのか、その経緯とそれに伴う切迫した出版状況を論じる。

2. 王妃への献呈としての受容

サンズは国王に宛てた『雅歌の意識』の序文で「最も神聖な結婚式に国王を招待する」と記す。ここで彼は、花婿と花嫁を登場人物とし、愛に象徴される理想的な為政者の姿を、結婚式の参列者に想定した国王と王妃に提示している。サンズと同時代では、フランシス・クォールズ (Francis Quarles, 1592–1644) が『ヨナ、エステル、ヨブ、サムソンの物語を含む聖なる詩、シオンのソネット、エレジー』 (*Divine Poems: Containing the History of Jonah, Ester, Job, Samson: Sions Sonets, Elegies*, 1638) に収めた「シオンのソネット」において、読者に向けて次のように書いている——「ここに読者諸氏にご紹介しよう——著者はソロモン王、王の中で最も賢明な方。題材は神秘的にして最も神聖なる主題。語り手たちはキリストすなわち花婿、教会すなわち花嫁。目的は皆さまをこの婚礼にお招きすること。」

サンズが描く結婚式は、聖書では 3 章 11 節にあたる第 3 歌に描かれる。「合唱」が「砂漠からやってくる美しい人は誰か?」と歌った後に、花嫁が結婚式で心を奪われた花婿の喜びを回想する場面である。¹

来たれ、聖なるおとめたちよ、さあやって来て、
この価値ある光景をご覧なさい！
見よ、あの王なるソロモンを、
父の玉座に高々と座し、
母が彼の艶のある額にのせた
宝石で飾られた王冠を
いただいた王の姿を、
その時厳かに祝われた婚礼の宴で、
歓喜が王の魂を恍惚へとさらったのです。

¹ なお聖書協会共同訳では、おとめたちによる合唱としている。R. E. Murphy は解答を提示できないとしつつ、文脈から花嫁と解釈している (149, note 6)。

Come, holy virgins, O come forth,
Behold a spectacle of worth!
Behold the Royal Solomon,
High mounted on his father's throne;
Crown'd with the crown his mother plac'd
On his smooth brows, with gems enchac'd,
At that solemniz'd nuptial feast,
When joy his ravish'd soul possess'd. (Sandys, *Poetical* 2: 345)

オリゲネス以来、「雅歌」に演劇的性格が認められてきたが (Lewalski 65–66; Schonfield 23–28)、花嫁が聖なるおとめたち (『欽定訳聖書』では「シオンの娘たち」) に目を向けるようにうながす言葉「光景」(“spectacle”) もまた、ジェームズ1世 (James I, 1566–1625) やチャールズ1世の宮廷で上演された仮面劇の壮麗な演出を思わせる用語である (“Spectacle, N.(1),” I.1.a)。その舞台には、「王たるソロモン」(“Royal Solomon”) が、父すなわちダビデ王の後継者として「高く玉座についた」姿が描かれる。聖書本文には花婿の母への言及はあるが父への言及はないため、この加筆はサンズが仕えていたジェームズ1世への賛美をも示唆している。さらにこの婚礼の宴を「厳かに祝われた」と述べる表現も、国王のための式典にふさわしい響きを備えている。こうした聖書原文にはない表現を加えることによって、チャールズ1世は、父王の後を継ぎ王妃との婚礼を行った自らの姿を容易に重ねることができたであろう。

為政者である花婿と花嫁の愛を描くにあたり、サンズが強調するのは2人の結びつきである。花嫁は「わたしたちの魂は相互に結びついている」(“mutually our Souls combine!”, Canto 2) と歌う。花婿もまた「恋人よ、お互いの誓いによって確かな人」(“My Love, by mutuall vows assur'd”, Canto 4) と呼びかけ、「私たちの相互の愛の炎はあらゆる炎を凌ぐのだ」(“Our mutuall flame all flames exceeds”, Canto 6) と述べる。いずれの箇所も英訳聖書には、「相互の」という語はないため、宮廷で称賛された新プラトン主義的な愛を通じて、理想的な政治形態の体現を描こうとするサンズの意図が読み取れる。同時代には、ローマの神々をして王と王妃が理想の生と言わしめたトマス・カルー (Thomas Carew, 1595–1640) の『ブリテンの天界』(*Coelum Britannicum*, 1634) や、王妃に捧げられ「貞節な愛」を讃えるウィリアム・ダヴェナント (William Davenant, 1606–1668) の仮面劇『愛の社』(*The Temple of Love*, 1635)、あるいは同じくダヴェナントによる、内乱前に上演された最後の仮面劇『サルマキダ・スポリア』(*Salmacida Spolia*, 1640) などがあり、いずれも統一と調和に収斂するチャールズ1世とヘンリエッタ・マリアの新プラトン主義的結婚を主題としていた。2人の愛は、「魂のプラトンの結合であり、強制的な統治ではなく自己統

制へと人々を導くがゆえに、理想的な統治形態と考えられていた」のである (Sharpe 262)。

サンズの『雅歌の意識』の場合、「魂のプラトンの結合」の中心には花嫁にたとえられた女王がいる。『雅歌の意識』が1676年版の『聖なる詩集の意識』の一部に収められた時には、初版・第2版には見られなかった王妃に捧げる献呈詩が、本論冒頭で引用した国王への献呈文とともに加えられた。この献呈詩では、新プラトン主義的な表現による王妃の美徳の賛美に加え、彼女の出自であるフランスと平和が示唆されており、『雅歌の意識』に込められた、国王と王妃による統治への期待を映し出している。

貞節なニンフよ、戦争の素早い雷鳴から
引き出された者よ。
あなたの無垢と温和さは
鷲が鳩を産むことができることを示している
あなたはこの澄んだ鏡に見つけるだろう、
自らの美しい心の似姿を。
その美しい心は魅了する卓越さで
より洗練された感覚を楽しませる。
天から啓示を受け、冠をいただいた詩神は
聖なる花嫁をこのような美で
飾った。というのも、太陽の下に存在する何ものが
これを超える完全さを現し得ようか？

CHASTE nymph, you who extracted are
From that swift thunderbolt of war;
Whose innocence and meekness prove
An eagle may beget dove;
In this clear mirror you may find
The image of your own fair mind;
With each attractive excellence,
Which feasts the more refined sense;
The crownéd muse from heav'n inspir'd
With such rich beauties hath attir'd
The Sacred Spouse; for what below
The sun could more perfection show? (Sandys, *Poetical* 2: 338)

「戦争の素早い雷鳴から／引き出された」「鳩」が王妃を表象するのに対し、「鷲」は、ユグノー戦争を戦った父アンリ4世(Henry IV, 1589-1610)を指す比喩と考えられる。鷲と国王の結びつきは、国王付彫刻家(Sculpteur Ordinaire du Roi)のマチュー・ジャケ(Mathieu Jacquet, 1545-1611)が制作した『ユピテルに扮したフランス王アンリ4世の像』(*Portrait of Henri IV, King of France, as Jupiter*)に見ることができる。また、ユグノー戦争でアンリ4世と対峙したパルマ公アレッサンドロ・ファルネーゼ(Alessandro Farnese, 1635-1689)は、敵ながらその勇敢さを称え、次のように評した——「この王子は、捕らえようとしたときに雲の中まで舞い上がり、遠くにいると見せかけて、突然彼らに襲いかかった戦いの鷲だった」(Matthieu 31-32)。ユグノー戦争終結のためカトリックに改宗したアンリ4世が平和をもたらした史実を考慮すると、鳩にたとえられた娘ヘンリエッタ・マリアにもまた、平和をもたらす存在としての期待が託されていたと考えられる。

しかし、プロテスタント国家イングランドにおいて、カトリックの王妃が不人気であった事実は否めない。「敵」がイングランド国内に侵入していることへの批判に応答したジョン・ダン(John Donne, 1572-1631)は、1627年4月1日、チャールズ1世の面前でおこなった説教で、カトリックである王妃を擁護し、彼が考える真の教会にはカトリックも含まれることを示唆した。

教会はキリストの花嫁である。夫たちは、自分の妻への中傷を簡単には認めない。非常に敬虔な王たちでさえ、他の教会から幼少期に吸収した何らかの誤りの痕跡や影響を保った妻を持っていたかもしれないが、だからといって、その妻たちが公然と異端者として中傷されたり、熱烈に偶像崇拜者として非難されたりすることを望むことはないだろう。ある教会が完全無欠さにおいて何かを欠いているかもしれないが、それでもなお、その教会を反キリストの支持者、獣の一部、あるいはバビロンの杯を渴望する者と呼ぶべきではない。(409)

このようなダンの説教と同様に、王妃は自らに献上された『雅歌の意識』を、寓意的に真の教会を表す花嫁が描かれる作品として喜んだ可能性が高い。彼女はサンズの「澄んだ鏡」となる作品を通して、宮廷人の備える「より洗練された感覚」が認める「美しい心の似姿」を花嫁に見出すことができたのである。

『雅歌の意識』を王妃を中心に据えた作品とする認識は、内乱期以前から読者の間で共有されていたと考えられる。というのも、1642年に出版された『雅歌の意識』の第2版では、初版に収められていた国王への献上文が消え、扉頁に「王妃陛下に捧ぐ」(“And Dedicated to the Queenes Majesty”)と明記されているからである。さらに当時の手稿資料に目を向けると、この王妃への献上詩は1641年前後にはサンズの周囲ではすでに知られており、こ

うした事実は当初から『雅歌の意識』は王妃に捧げられた作品として受容されていたことを示している。²「サンズの全ての作品はチャールズ1世に捧げられた」ことは確かであるが(Davis “Sandys” 331–32)『雅歌の意識』が王妃を念頭に置いて書かれた作品であるという点も看過してはならない。サンズは王党派の立場から宗教的一体性を志向し、花婿と花嫁をチャールズ1世と王妃の理想像に仮託することで、両者の結合に国家統合の希望を託したのである。

3. 官能表現と検閲

しかし、『聖なる詩集の意識』とともに出版される予定であった『雅歌の意識』は、国王と王妃による政治と宗教が統一されたイングランドを賛美した作品と理解できるにも関わらず、執筆後ただちに刊行されることはなかった。『雅歌の意識』がすでに1638年頃に完成していたことは、『聖なる詩集の意識』に収められたシドニー・ゴドルフィン(Sidney Godolphin, 1610–1643)による献呈詩が伝えている。ゴドルフィンは、サンズが執筆した聖書の意識を順に言及し、「ヨブは驚嘆を呼び起こし、ダビデは我々の涙を誘う。／その王たる息子[ソロモン]は、悲しみの衣をまとい、／敬虔なる恐れへと人々を導く」と、「ヨブ記」「詩編」「伝道の書」の意識を称賛する(Sandys, *Poetical* 1: xcvi)。注目すべきは、続いて「雅歌」について言及されている点である。サンズが「聖なる花嫁に求婚し、彼女の貞節な愛を求める」若者を描いたと述べつつ、その詩行の横の余白には「『雅歌』は印刷されていない”(“Canticles not Printed”)と明記されている。

『聖なる詩集の意識』に『雅歌の意識』が収められなかった理由について、献呈詩の中でゴドルフィンはその原因を作品の官能性に求めている。

この作品 [『雅歌の意識』] は、私たちの目に相応しいものとなっただろう、
もしあなたが抑制を効かせて執筆し、
あなたの作者 [ソロモン王] の力と輝きを保持していなかったならば。

だが、あなたはあまりに強くその香りを絞り出し、あの豊かな芳香を
迎りに放ち、その香りをあまりにも濃密にしまい、
ああ、私たちの感覚をあまりに強く喜ばせるものを作ったのだ。

² 1630年代後半から1640年代前半にかけて筆記されたとされる「ランズダウン手稿489」(Lansdowne MS 489)には、『雅歌の意識』が全文筆記されており、作品の前にこの献呈詩が筆記されている(f. 121r.)。この手稿の筆記者がいつ献呈詩の存在を知り『雅歌の意識』とともに筆記したのかは不明であるが、Davisは、この女王への献呈詩が失われた出版地不明の1641年版『雅歌の意識』に印刷されていたと推測している(*George* 251, note 94)。

This work had been proportion'd to our sight.
 Had you but known with some allay to write.
 And not preserv'd your author's strength and light.

But you so crush those odours, so dispense
 Those rich perfumes, you make them too intense.
 And such, alas! as too much please our sense. (Sandys, *Poetical* 1: xcvi)

ゴドルフィンがサンズの『雅歌の意識』の官能性を問題としたが、そもそも「雅歌」は聖書解釈の歴史においてその官能的表現がしばしば議論されてきた聖典であった。その点が問題視されないためにであろうか、17世紀前半に出版された「雅歌」の翻案の序文や注釈は、サンズの意識を除いていずれも寓意的意味を明示している。クォールズは前述したとおり、「雅歌」がキリストと教会の関係を描くものとして明示した。ヘンリー・エインズワース (Henry Ainsworth, 1571–1622) の『ソロモンの雅歌：英語韻文による翻訳と注釈、理解を助けるための聖書参照付き』 (*Solomon's Song of Songs in English Metre: With Annotations and References to Other Scriptures, for the Easier Understanding of It.*, 1623) は、「雅歌」を「キリストと彼の教会の神秘、両者の間の交わり」 (“the mysteries of Christ and his Church, and the communion between them”) と位置付け、ジョージ・ウィザー (George Wither, 1588–1677) の『二部からなる教会讃美歌と聖歌』 (*The Hymnes and Songs of the Church Divided into Two Parts*, 1623) もまた、「キリストの教会の間の相互の愛情が神秘的に表現された」聖典とした。スコットランドの聖職者ザカリー・ボイド (Zacharie Boyd, 1588–1635) の『韻文による旧約・新約聖書の歌』 (*The Songs of the Old and New Testament in Meter*, 1648) は、そのタイトルで「キリストと教会を称賛するために作られた」と告げている。これに対しサンズだけが寓意的な説明を省き、祝婚歌としての側面を強調した国王への献呈文のみを掲げている点で、細部においてはあながち、特異なテキストと言える。

ゴドルフィンは、具体的にサンズによるどの箇所が「感覚をあまりに強く喜ばせる」のかを指摘していないが、例えば冒頭に描かれる口づけの描写や、愛が嗅覚に訴える表現はその一例と考えられる。

あなたの命を与える唇をわたしの唇に重ねて。
 あなたの愛はワインの喜びに勝る。
 あなたの香りはなんと芳しい！
 その喜ばしい芳香でわたしを魅了して。
 あなたの名前から甘く流れるその香りは

わたしたちのおとめたちを憧れで燃え上がらせる。

JOIN Thy life-breathing lips to mine;
 Thy love excels the joy of wine:
 Thy odors, O how redolent!
 Attract me with their pleasing scent:
 These, sweetly flowing from Thy Name,
 Our virgins with desire inflame. (Sandys, *Poetical* 2: 339)

この冒頭の花嫁からの語りかけについて、エインズワース、ウィザー、クォールズ、ボイドらの意識を参照すると、いずれも聖書の動詞“kiss”を踏襲しているのに対し、サンズが“join”を用いた点は独特である。³ さらに3行目では、嗅覚に訴える語“odors”と“redolent”が並び、情熱的な響きが二重母音の繰り返しによって強調されている。加えて「魅了して」(“Attract”)や、その後が続く「あなたの恋焦がれる花嫁を、偉大な王よ、あなたの準備したお部屋に連れて行ってください」(“Thy longing spouse at length, Great King, / Into Thy royal chamber bring:”)は、命令文としていない聖書より情熱をひときわ露わにしている。

肉体的愛にとどまらず精神的愛も称揚し、王党派の立場からステュアート朝賛美を目的とした作品にもかかわらず検閲の対象となったのであれば、それは「このテキストに残るエロティシズムこそが…初期近代の宗教と政治において、『雅歌』を重要なものにしてている」(Clarke 38)ことを示す一例と言える。新プラトン主義的な愛の言説がしばしば肉体的性を排除しきらずにそれを併存させるように、サンズの描く愛もまた、明示的な寓意化を抑え、官能的な語彙と身体的イメージを前面に押し出しつつ、神への欲望という宗教的言説と交差するかたちで描かれている。

4. 検閲官ロードと出版請願

1630年代後半、『雅歌の意識』が出版認可されなかったこと背景には、カンタベリー大主教ウィリアム・ロードの関与があった可能性が高い。1637年に公布された印刷に関する星室庁令を見ると、第3項では、マーシャル伯(the Earl of Marshall)が閲覧する特定の刊行物を除き、「カンタベリー大主教またはロンドン主教によって、あるいは彼らの任命によって、または当該地域のいずれかの大学の学長または副学長によって認可を受けなければ

³ 他に、“Kiss”を用いない意識の例として、ジャーヴェス・マーカム(Gervase Markham, 1568–1637)による“Imprint upon my lips pure livorie / The hony pleasure of thy mouthe derre kisse” (B1r)をあげることができる。

ならない」と定められている (*Decree B3v.*)。さらに、第4項は、原本と印刷本の同一性を確認する義務を規定し、カンタベリー大主教ら検閲官が、「キリスト教信仰、イングランド国教会の教義と規律に反するもの、国家や政府に反するもの、善良な生活や風俗に反するもの」が当該書物に含まれていないことを示すために、「自らの署名をもって証明する」ことを求めている (*Decree C1r.*)。Clarke は 1630 年代に「雅歌」に関する書籍がほとんど出版されなかった事実を指摘し、宗教的反対派が「雅歌」を反体制的主張の根拠として援用してきた経緯から、ロード体制下の検閲が「雅歌」関連書籍に対して特に敏感に反応した可能性を論じている (76)。

自著の出版をめぐり、サンズがロードの意向を意識していたことは、彼に捧げられた献呈詩からもうかがえる。⁴ ロードへの献呈詩「カンタベリー大主教に捧ぐ」(“To his Grace of Canterbury”) は、イングランドの国教会の統一への願いと出版許可の請願を表明したものと考えられる。この献呈詩は出版されなかったが、同じく未刊行で、チャールズ1世の姉、ボヘミア王妃エリザベス・ステュアートに捧げた献呈詩 (“To the Queene of Bohemia”)、さらにサンズのイニシャルが書き込まれた『雅歌の意識』とともに、1638年版『聖なる詩集の意識』の印刷本に綴じ込まれ、第14代アランデル伯爵トマス・ハワード (Thomas Howard, 1585–1646) に献呈された (Davis, “Two” 217)。⁵ 未刊とはいえ、意識執筆時のサンズの思想を伝える重要な資料であり、先行研究で十分に検討されてこなかったことも踏まえ、『雅歌の意識』との関連を考察する必要がある。

献呈詩「カンタベリー大主教に捧ぐ」は、ロードを教会の舵取りおよび学問刷新の担い手として描き、イングランド国教会の宗教的統一に寄せるサンズの希望を表現する作品である。詩の冒頭で、「偉大なる大主教よ」と呼びかけられるロードは、「人々を導く真実を知っており」、イングランド国教会を表す「聖なる小舟」が難所を通過しても適切に導くだけでなく、航海で傷ついた船の装備を修理し、新たに整える者——すなわちイングランド国教会を刷新する改革的指導者としても表象される。ロードが清める「学識」は、彼がセント・ジョーンズ・カレッジの学長兼総長として教育改革を成したことを示唆すると同時に (Davis,

⁴ ロードとサンズの両者とも国王を「君主は宗教的な存在であり、地上における神の代理人であり、神のかたちに似せて創られた者である」という点で一致していたものの、サンズにとって「『神的王権』とは、絶対君主に白紙委任を与えることと同義ではない」という点で、国王の捉え方は異なっていたといえる (Ellison 185, 187)。また、サンズの『聖なる詩集の意識』に献呈詩を寄せている第2代フォークランド子爵ルーシャス・ケアリー (Lucius Cary, 2nd Viscount Falkland) は「グレート・テュー・サークル」(the Great Tew Circle) の中心人物であるが、ロードの政治的・宗教的立場に全面的に同調していたとは言いがたい。

⁵ Davis は、フィラデルフィア図書館会社に所蔵されているこのコピーを「詩人が未発表の詩を刊行済みの作品と綴じ合わせた、イングランド・ルネサンス期における唯一の例」とであると指摘し、「興味深い、少なくとも注目すべき事柄」と評している (“Sandys” 341)。この事実はロードへの献呈詩が出版許可を求める内容を含んでいること、さらに『雅歌の意識』が刊行されなかった事実と併せて考慮に入れる必要がある。Ellison は余白の「『雅歌』は印刷されていない」の文言に、ゴドルフィン検閲への抗議が示されているとしている (120)。なお、サンズはボヘミア王妃に捧げた別の詩も執筆している (Davis, “George” 106–08)。

“Two” 222)、献呈詩の前半が宗教的テーマを中心に据えている点から、キリスト教的学問そのもの、そしてその教えがイングランド国内に漸次行き渡っていく過程を描いていると解されよう。『雅歌の意識』が花婿と花嫁の相互に調和した愛を通じて国内統治を賛美する一方、この献呈詩はイングランド国教会を中心とした宗教的統一への期待を明確に表明している。

献呈詩後半は、ロードが掌握していた検閲と出版認可に直接言及しており、『雅歌の意識』の出版問題とも深く結びついていると考えられる。

あなたは我らの韻文のうちに冠をいただく預言者を丹念に読む。
 そしてもしもあなたの判断が我らの詩神を正しいと認め
 あなたがこの韻文を頭に掲げる手となるなら、
 たとえ、詩神が金の代わりに、鉛で十分に支払うとしても
 閣下の肖像が刻印されるならば
 それは金であるとの証明ができなくとも、流通するだろう。

[You] This crown'd Prophet in our Verse perufe:
 And if yo Judgement shall confirm our Mufe,
 Be you the Hand to raife it to the Head:
 Then, though for Gold, she render full en [in?] Lead;
 If by the Effigies of his Grace imprest,
 Twill Current grow, if not indure the Test. (Davis, “Two” 221–22)

Ellison は、この箇所サンズが自作の『詩編の意識』がイングランド国教会で使用されることを望んでいた意図が表明されていると指摘する。つまり、「サンズは、ロードが『手』となって、彼の詩編を『頭』、すなわちイングランド国教会の首長であるチャールズ 1 世に献呈することを願っている。つまり、チャールズ 1 世の慈悲ある影響力により彼の詩集 [『詩編の意識』] が流通する」というのである (211)。『詩編の意識』が教会で正式に受容される願いを述べていると理解する余地はあるものの、“his Grace” を「国王」と解することについて、なお検討を要する。確かに、本詩は 2 人称でロードに語りかけているため、“his Grace” がロードとは別の人物を指す可能性も想定される。また、本論冒頭に引用した『雅歌の意識』の国王への献呈文では、「国王の名前を印刷することで拙い作品を流通させた」 (“my alloy current by the impression of your name”) ことへの感謝が述べられていることから、ここでの “his Grace” を国王とする解釈には一定の妥当性が認められる。

しかし、この詩のタイトルが「カンタベリー大主教に捧ぐ」であること、さらにヘンリー

8世の時代までは国王に対して“Grace”が用いられていたものの、17世紀においては大主教や侯爵に対して用いるのが一般的で、国王を指すことは稀であったという事実(“Grace, N.,” I.8.a., b.)を踏まえれば、“his Grace”をロードと解する可能性も十分にありえよう。ロードがこの「冠をいただく預言者」を「丹念に読み」(peruse)、「我らの詩神を正しいと認め」る(confirm our Muse)という表現は、彼が具体的な検閲行為を担っていることを示唆する。さらに、「あなたがこの韻文を頭に掲げる手となる」という句は、1637年星室庁令第4項にある、「キリスト教信仰、イングランド国教会の教義と規律に反するもの、国家や政府に反するもの、善良な生活や風俗に反する書籍」が含まれないよう、カンタベリー大主教ら検閲官が「自らの署名をもって証明する」(“testify vnder his or their hand or hands”)義務を想起させる。つまり、サンズは、チャールズ1世の肖像が刻印された貨幣が流通するように、「肖像」という大主教の認可を得て、自身の意識が世に広まることを望んだのである。Ellisonは、「冠をいただく預言者」という表現が『詩編の意識』にも現れることを踏まえ、この「預言者」をダビデと理解できるとし、前述のとおり、サンズが国教会において自らの「詩編」が公認されることを望んでいたことが表明されていると指摘していた(211)。⁶しかし同時に、ハワード宛の手稿に目を向けると、この献呈詩が『雅歌の意識』とともに筆記されている事実は、この詩が『雅歌の意識』の出版を求めたパラテキストとしても機能していたことを示しているのである。

Davisは、サンズの父がロード体制下でヨーク大聖堂の主教を務めていたことから、サンズ自身も厳格に国教会を指導するロードに共感していたと指摘しているが(Davis “Two” 221)、ロードが『雅歌の意識』の出版を認可しなかったとするならば、その理由は官能性に加え、『ジュネーブ聖書』(1560)に近い語彙や表現の影響も考えられる。例えば、第1歌ではおとめが自身の肌の黒さを表現する際、「イシュマエルの天幕のよう」(“Tents of Ismael”)と歌う。『大聖書』(The Byble in Englysh、通称 The Great Bible, 1539)、『主教訳聖書』(The Holie Bible、通称 The Bishop’s Bible, 1568)、『ドゥエー・リームズ聖書』(The Douay-Rheims Bible, 1582, 1610)、『欽定訳聖書』(1611)などの英訳聖書が一様に“tents of Kedar / Cedar”とする一方、『ジュネーブ聖書』の注は「ケダルはイシュマエルの子で、天幕に住むアラビア人」と説明している。サンズの語の選択はこの注解に依拠した可能性が高い。

さらに、第6歌の表現には『ジュネーブ聖書』との顕著な共通点が見られる。ここでは、花婿が庭園に花嫁の姿を認め歓喜に浸ることを告白し、国民もその喜びを共有する様子が描

⁶ Davisは“This crown’d Prophet”を「詩編」または「伝道の書」と解釈している(Davis “Two” 220)。前者の場合、その著者はダビデ王、後者はソロモン王とされる。Prophetとして一般に理解されやすいのはダビデであろうが、prophetを「靈感を受けた人物」とすることも可能である。

かれる。⁷

わが歡喜に満ちた魂は
疾風の如き素早い戦車に高く掲げられたかのよう、
その戦車はわが民の自発的な心によって引かれるのだ。

Methought My ravished soul was rais'd
Up to a chariot, swift as winds,
Drawn by My people's willing minds. (Sandys, *Poetical* 2: 351)

主要な英訳聖書はいずれもサンズの意識とは細部で異なるが、⁸『ジュネーブ聖書』では“my soul set me as the chariots of my noble people” (6章11節)に付された注に、“set me on the chariots of my willing people”とあり、サンズの記述ときわめて近い。サンズが1種類の英訳聖書だけに依拠していたわけではないにせよ、このような類似はきわめて重要である。これにより、国王を支持しカトリック国の女王を受け入れるという点では一致していたサンズとロードが、英訳聖書に対しては異なる見解を持っていた可能性が窺える。このことは、当時の聖書および「雅歌」の解釈と利用がいかに微妙で困難な課題であったことを示している。結果として、『雅歌の意訳』が出版されることになったのは、ロードが失脚し検閲制度が事実上終焉を迎えようとした時期にあたる。

5. 出版認可と王政復古後の受容

認可の証明として、1641年版『雅歌の意訳』の扉ページには、勅許によって出版が認められた書籍に付される、「国王の認可による」(“Cum Privilegio Regiae Majestatis”)の文言が確認できる。さらに国王への献呈文が印刷された裏面には、左側に1641年3月31日の日付、右側に検閲官トマス・ワイクス(Thomas Wykes)の名前とともに「出版認可」

⁷ 「雅歌」の原典は話者が明示されていないため、この箇所はその語り手を決定できないことで知られる箇所である(Murphy 178)。

⁸ 主な英訳聖書での記述は以下のとおり。『大聖書』および『主教訳聖書』：“I knewe not that my soule had made me the charyote of the people that be vnder tribute”；『リームズ・ドゥエー聖書』：“I knew not: my soul troubled me for the chariots of Aminadab”；『欽定訳聖書』：“my soul made me like the chariots of Amminadib.” Davisは、サンズが参照した可能性がある聖書として、フランスの神学者・翻訳者セバスティアン・カステリヨン(Sébastien Castellion, 1515–1563)によるラテン語訳聖書(Biblia interprete Sebastiano Castalione)を挙げているが(George 240–41)、カステリヨンによるこの箇所は「わたしの心は気づかぬうちに、わたしをアミナダブの戦車のように駆り立てた」(“Insicentem me reddidit animus meus Aminadabi quadrigarum similem” 159)となっており、サンズの意識とは異なっている。

（“Imprimatur”）の語が小さく印刷されている。1637年の星室庁令以前から、カンタベリー大主教であったロードは、認可を与えた書籍にチャブレンによる出版認可の文字を入れるよう書籍商に求めていたが、これはピューリタンが活発化することにともない、「カルヴァンの、あるいは反カトリック的書物」が自らの宗教改革に与える影響を憂慮した政策であった（Clegg 204, 207）。

その後、1676年版『聖なる詩集の意訳』の一部として『雅歌の意訳』が出版された際には、タイトルページの裏一面に同日付（1641年3月31日）とワイクスの名を掲げた「出版認可」の文字が大きく印刷され、内乱以前に認可された正当な書物であること堂々と示している。王政復古期には、「出版認可」の文字とともに、チャールズ1世とヘンリエッタ・マリアに捧げられた献呈文・献呈詩をパラテキストとする本書は、他の多くの王党派のテキスト同様、殉教した国王と亡命した王妃の結婚を追憶する作品として受容されたであろう。

しかし、サンズの政治的・宗教的立場と本書の出版に至る経緯を顧みれば、この作品は「雅歌」を通じて国王を賛美する一方、正式な「出版認可」を得るまでに時間を要したテキストであった。サンズが願ったチャールズ1世とヘンリエッタ・マリアによる平和な統治と宗教的調和はついに実現せず、イングランドは内乱へと突き進み、サンズの死後には、ロードも、そして国王も断頭台の露と消えることになった。

引用文献

- Ainsworth, Henry. *Solomon's Song of Songs in English Metre: With Annotations and References to Other Scriptures, for the Easier Understanding of It*. London, 1623. Early English Books Online, <http://re0.nii.ac.jp.agulin.idm.oclc.org/hss/4000000000585731/fulltext>.
- The Bible*. Authorized King James Version, Oxford UP, 1998.
- The Bible*. Biblia interprete Sebastiano Castalione. Vna cum eiusdem annotationibus. Totum opus recognouit ipse, et adiecit ex Flauio Iosepho historiae supplementum ab Esdrae temporibus usque ad Machabaeos, itemque a Machabaeis usque ad Christum. 1554. *Google Books*, books.google.com.
- The Bible*. The Bishop's Bible. 1568. *Early English Books Online*, <http://re0.nii.ac.jp.agulin.idm.oclc.org/hss/4000000000583681/fulltext>.
- The Bible*. Douay-Rheims American ed., 1899. *Bible Gateway*, <http://www.biblegateway.com>. Accessed 25 Sept. 2025.
- The Bible*. The Geneva Bible: A Facsimile of the 1560 Edition. Hendrickson, 2007.
- The Bible*. The Great Bible. 1539. *Early English Books Online*, <http://re0.nii.ac.jp.agulin.idm.oclc.org/hss/4000000000580761/fulltext>.
- Boyd, Zacharie. *The Songs of the Old and New Testament in Meeter*. Glasgow, 1648. *Early English Books Online*, <http://re0.nii.ac.jp.agulin.idm.oclc.org/hss/4000000000544238/fulltext>.
- Clarke, Elizabeth. *Politics, Religion and the Song of Songs in Seventeenth-Century England*. Palgrave Macmillan, 2011.
- Clegg, Cyndia Susan. *Press Censorship in Caroline England*. Cambridge UP, 2008.

- Davis, Richard Beale. "George Sandys and Two 'Uncollected' Poems." *Huntington Library Quarterly*, vol. 12, no. 1, 1948, pp. 105–11. *JSTOR*, <https://www.jstor.org/stable/3815877>.
- . *George Sandys, Poet-Adventurer: A Study in Anglo-American Culture in the 17th Century*. The Bodley Head, 1955.
- . "Sandys' 'Song of Solomon': Its Manuscript Versions and Their Circulation." *The Papers of the Bibliographical Society of America*, vol. 50, no. 4, 1956, pp. 328–41. *JSTOR*, <https://www.jstor.org/stable/24299558>.
- . "Two New Manuscript Items for a George Sandys Bibliography." *The Papers of the Bibliographical Society of America*, vol. 37, no. 3, 1943, pp. 215–22. *JSTOR*, <https://www.jstor.org/stable/24293539>.
- A Decree of Starre-Chamber, Concerning Printing Made the Eleuenth Day of July Last Past*. London, 1637. *Early English Books Online*, <http://re0.nii.ac.jp.agulin.idm.oclc.org/hss/4000000000533909/fulltext>
- Donne, John. *The Sermons of John Donne*. Edited by Evelyn M. Simpson and Geroge R. Potter. U of California P, 1954.
- "Grace, N." *Oxford English Dictionary*, Oxford UP, September 2025, <https://doi.org/10.1093/OED/1931579263>.
- Jacquet, Mathieu. *Portrait of Henri IV, King of France, as Jupiter*. ca. 1605, The Walters Art Museum, Baltimore. Marble sculpture, <https://art.thewalters.org/object/54.667/>. Accessed 28 Sept. 2025.
- Lewalski, Barbara Kiefer. *Protestant Poetics and the Seventeenth-Century Religious Lyric*. Princeton UP, 1979.
- Markham, Gervase. *The Poem of Poems. Or, Sions Muse Contayning the Divine Song of King Salomon, Devided into Eight Eclogues*. London, 1596. *EEBO*, <http://re0.nii.ac.jp.agulin.idm.oclc.org/hss/4000000000543250/fulltext>
- Matthieu, Pierre. "A Panegyre: Containing the Life and Heroyck Deeds of the Most Christian King Henry the Fourth." *The Heroyk Life and Deplorable Death of the Most Christian King Henry the Fourth. Addressed to His Immortall Memory*, translated by Josuah Sylvester, London, 1610. *Early English Books Online*, <http://re0.nii.ac.jp.agulin.idm.oclc.org/hss/4000000000548584/fulltext>.
- Murphy R. E. *The Song of Songs: A Commentary on the Book of Canticles or the Song of Songs*. Fortress Press, 1990.
- Quarles, Francis. *Diuine Poems: Containing the History of Jonah, Ester, Job, Samson: Sions Sonets, Elegies*. London, 1638. *Early English Books Online*, <http://re0.nii.ac.jp.agulin.idm.oclc.org/hss/4000000000585007/fulltext>.
- Sandys, George. *A Paraphrase upon the Divine Poems*. London, 1638. *Early English Books Online*, <http://re0.nii.ac.jp/hss/4000000000638747/fulltext>.
- . *A Paraphrase upon the Divine Poems*. London, 1676. *Early English Books Online*, <http://re0.nii.ac.jp/hss/4000000000593494/fulltext>.
- . *A Paraphrase upon the Song of Solomon*. London, 1641. *Early English Books Online*, <http://re0.nii.ac.jp/hss/4000000000579285/fulltext>.
- . *A Paraphrase upon the Song of Solomon*. London, 1642. *Early English Books Online*, <http://re0.nii.ac.jp/hss/4000000000662766/fulltext>.
- . *A Paraphrase upon the Song of Solomon*. *British Library*, London, Lansdowne MS 489, 121r–27v.
- . *The Poetical Works of George Sandys*. Edited by Richard Hooper, 2 vols., John Russel Smith, 1872.
- Schonfield, Hugh J. *The Song of Songs*. Elek Books, 1960.
- Sharpe, Kevin. *Image Wars: Promoting Kings and Commonwealths in England, 1603–1660*. Yale UP, 2010.

“Spectacle, N.(1).” *Oxford English Dictionary*, Oxford UP, September 2025, <https://doi.org/10.1093/OED/9340380305>.

Wither, George. *The Hymnes and Songs of the Church Diuided into Two Parts. The First Part Comprehends the Canonickall Hymnes, and Such Parcels of Holy Scripture, as May Properly be Sung, with Some Other Ancient Songs and Creeds. The Second Part Consists of Spirituall Songs, Appropriated to the Seuerall Times and Occasions, Obseruable in the Church of England.* London, 1623. *Early English Books Online*, <http://reo.nii.ac.jp/hss/4000000000608368/fulltext>.

『聖書』 聖書協会共同訳 日本聖書協会、2018年。

モーリス・ドラージュ作品目録再編纂に向けて ——5つの目録における作品名・出版・初演の再検証——

Towards a Recompilation of Maurice Delage's Catalogue of Works: Verification and Correction of Titles, Publication, and Première in Existing Catalogues

秋道瑠香
AKIMICHI, Ruka

はじめに

本稿では、モーリス・ドラージュ Maurice Delage (1879–1961) の作品目録を検討し、筆者の調査にもとづく再構成の途中経過を報告する。

ドラージュの作品目録は、これまで Gordon (1991, 2009)、Thomas (1995)、Rodriguez (2001) の3名によって編纂されてきた。従来の目録は、それぞれ独自の情報や視点を含む一方で、記載内容にばらつきがあり、情報の不一致や欠落のために全体像の正確な把握が難しい側面があった。そのような状況のなか、ドラージュ自身が1955年に作成した目録の存在が判明した。本稿では、その目録を新たにくわえ、計5点の目録を用いて再検討を行う。

作品目録の編纂には多角的な検討が求められるが、ここでは出発点として「作品名」「初演情報(時期・場所)」「出版情報(時期・出版社)」の3要素に絞って再検証を行う。本研究は、将来的な作品目録の再編成を目指すだけでなく、近代フランス音楽史におけるモーリス・ドラージュの位置づけを再考する試みでもある。

本研究の構成は、まず5点の目録を比較し、次に目録間で確認された齟齬や情報不足を補うための追加調査を行い、最終的に作品名・初演情報・出版情報の3点を整理し直す、という手順から成る。

1. ドラージュの作品目録について

以下では、ドラージュ作品の記載を確認した5点の目録の概要を示す。

表1：本稿で扱う5つの目録

目録1	目録2	目録3	目録4	目録5
Gordon(1991)	Thomas(1995)	Rodriguez(2001)	Gordon(2009)	Delage(1955)

先行研究における作品目録1：Gordon¹（1991）

Gordon（1991）は、関係者への聞き取りを基に一次資料を収集した先駆的研究であり、ドラージュ作品の再評価に重要な役割を果たした。この論文は、博士論文であり、ドラージュを中心に論じた初期の研究として位置づけられる。論文の末尾には編成別の作品目録が付されており、「フランス国立図書館所蔵（Bibliothèque nationale de France、以下 BnF）の原本を翻訳・訂正・加筆したもの²」と説明されるが、その「原本」が具体的に何を指すのかは明示されていない。また、当該目録には詳細不明の作品名も複数含まれている。

先行研究における作品目録2：Thomas³（1995）

Gordon（1991）と同様に博士論文として執筆されたものであるが、Thomas（1995）は D.M.A.（音楽芸術博士）取得のための論文である。その末尾には、編成別に整理された作品目録が付されている。先行目録を参照していないため、他の目録とのあいだに多くの相違が認められる。一方で、Thomas（1995）の目録は、作曲場所や音楽雑誌における記録など、他の目録にはみられない情報を併載している点に特徴がある。

先行研究における作品目録3：Rodriguez⁴（2001）

ドラージュの孫甥による評伝に付録として収録された作品目録である。本文には、個人所蔵とみられる書簡や写真、さらにはドラージュ本人への直接の聞き取りに基づく証言など、貴重な情報が含まれる。一方で、出典の明示が不十分な箇所も少なくない。作品については本文中に多岐にわたる言及がみられるが、付録の作品目録は記載が簡略であり、5つの目録のなかで情報量が最も少ない。その目録作成の基準に関する記述はなく、選定方針は明らか

¹ Gordon, Barbara. "Maurice Delage: A stylistic analysis of selected vocal works." PhD Thesis, New York University, 1991. ProQuest (303932341), pp. 207–213.

² Gordon, 1991, 207.

³ Thomas, Cinda Lou. "Three representative works of Maurice Delage: A study of style and exotic influence." DMA diss., University of Georgia, 1995. ProQuest (304200714), pp. 128–133.

⁴ Rodriguez, 147–153.

でない。

先行研究における作品目録4：Gordon⁵（2009）

Gordon（1991）の博士論文の一部を抜粋した雑誌掲載記事であり、収録作品のジャンルは声楽作品に特化している。内容はおおむね Gordon（1991）における記述と一致するが、一部に修正および追加が加えられている⁶。したがって、本研究では、この目録を声楽分野における Gordon（1991）の補遺的資料として位置づける。

新たに参照した目録：Delage⁷（1955）

1955年に作成された「*Catalogue des œuvres de Maurice Delage ...*（モーリス・ドラージュの作品目録）」と題する資料が、BnFに所蔵されている。このタイトルに含まれる“de”は英語の“of”に相当し、「～の作品目録」を意味する。したがって、文法上は「モーリス・ドラージュに関する目録」を示すにとどまり、作曲者本人が編纂したものかどうかはタイトルからは明確でない。実際、この資料には署名がなく、寄贈経路をBnFに照会したところ、コレクターのロベール・ル・マスル Robert Le Masle（1901–1970）によること以外の詳細は確認できなかった。

はじめは、この目録がドラージュ自身によるものかどうかは不確かであったが、この点を裏づける重要な手がかりとなったのがロドリゲス（2001）の著作である。同書の章末余白には、本文とは直接の関連を持たない形で、1955年4月26日付のジャン・ガロワ Jean Gallois（1929–2022）宛の書簡の画像が掲載されている⁸。その中でドラージュは、「おおよそ完全な形の作品リストを作成し、同封した」と記している。書簡の記述内容と作成時期がBnF所蔵資料の特徴と一致することから、筆者は両資料を結びつけ、BnF所蔵の目録を作曲者本人による一次史料と判断した。

実物はタイプ打ちで作成され、数箇所到手書きの加筆も認められる。さらに、内容やそれらの配置は、先に紹介した Gordon（1991）の記述と類似しており、ゴードンが言及する「フランス国立図書館所蔵の原本」とは、この資料を指すものと推測できる。

⁵ Gordon, Barbara. “Discovering Maurice Delage.” *Journal of singing; Jacksonville*, 65 no. 3, Jan/Feb 2009: 311

⁶ 《古池や *Le vieil étang*》および《眠れ、ブルターニュの子よ *Kousk, Breiz-Izel*》が追加されている一方、管弦楽伴奏版が欠落している作品もいくつか確認される。

⁷ Delage, Maurice. *Catalogue des œuvres de Maurice Delage*. Paris: Delage, Maurice, 1955.

⁸ Rodriguez, 102.

図1: Delage (1955) の目録

Durée	Titre des œuvres Langues parlées.	Date Gordon.	Première audition		ÉDITEUR
			Lieu	Date	
JEAN et CHAÏE					
1'50	Améthystes (Théo. de BAVILLE).	1909	S.M.I.	1910	DURAND
2'	Intermezzo (Henri HEINE)	1909	S.M.I.	1910	do
1'40	Livre de Monelle (Marcel SCHWOB)	1909	S.M.I.	1910	do
8'	Quatre Poèmes Hindous	1913	S.M.I.	1914	do
3'	Ragamalika	1914	S. des Agricult.	1915	do
2'	Roses d'Octobre (Jéay de COURMONT)	1921	Opéra	1922	do
1'15	L'Alouette (du BARTAS)	1921	Opéra	1922	do
2'30	Ballade (François VILCON)	1921	Opéra	1922	do
8'	Sept Melodies (Lyrique Japonaise)	1923	S. Ployel	1923	J. JOBERT
2'	Domesticelles d'Avignon (R. CHAMPEL)	1924	S. Grand	1925	do
1'40	Robert les Cloes (Jean COSTEAU)	1924	S. Grand	1925	do
1'30	Chanson de ma Vie (Th. de BAVILLE)	1924	S. Grand	1925	do
1'30	Maquette Allégorique ... (P.J. DUBOIS)	1924	S. du Lycée	1925	do
2'	Romance à sa Muse	1924	Revue musicale	1925	do
2'	Vocalises (pour le Prof. HERTZOG)	1925	Conservatoire	1926	LEBO
6'	Trois chants de la Jungle	1924	Radio Nationale	1925	SALABERT
2'	Les coloubes (A. BÉGIN)	1925	S. Grand	1925	J. JOBERT
2'15	Romance à Rousseau (R. CHAMPEL)	1925	Revue musicale	1925	R. MUSIC.
2'30	Deux Fables de Jean de La Fontaine	1921	Radio-Genève	1948	DURAND
2'20	L'Enfant (L.P. FERRIER)	1927	Radio Nationale	1947	do
7'	In Noron à un Samurai (Pierre Mares)	1950	Radio Nationale	1951	
1'50"	"Hitobagui" (en langue japonaise)	1946			

図2: Gordon (1991) の目録

Title	Length	Date of Composition	First Performance		Editor
			Place	Date	
Voice and Piano					
Trois Mélodies					
Du Livre de Monelle	1'40"	1908	S.M.I. ²	1910	Durand
Intermezzo	2'	1910	S.M.I.	1910	Durand
Améthystes	1'50"	1910	S.M.I.	1910	Durand
Quatre poèmes hindous	8'	1912	S.M.I.	1914	Durand
Ragamalika	3'	1914	Salle aux Agriculteurs	1915	Durand
Trois Poèmes					
Roses d'Octobre	2'	1921	Opéra	1922	Durand
L'Alouette	1'15"	1921	Opéra	1922	Durand
Ballade	2'30"	1921	Opéra	1922	Durand

5つの作品目録の性質と相互関係

ここでは、確認してきた5つの目録を、その性質と相互関係の観点から整理する。

参照する5つの目録は性格上、二分できる。Gordon (1991, 2009) および Thomas (1995) は、研究者による学術的意図にもとづく編纂であり、作品を体系的に整理することを目的としている。一方、Delage (1955) および Rodriguez (2001) は、作曲者本人、またはその

近親者によって作成された目録に属する。とくに Delage (1955) は、後続研究の再検討に際して基準となる重要な史料である。

相互関係に着目すると、Gordon (1991, 2009) はいずれも Delage (1955) を基盤としていることが明らかになった。ただし、Gordon (1991) には多くの点で修正や改変が加えられていることが註記されている。これに対し、Thomas (1995) は先行する Delage (1955) と Gordon (1991) を参照せず、独自に目録を作成している。さらに、Rodriguez (2001) は参考文献に Gordon (1991) を挙げるとともに、ドラージュとガロワの書簡を引用した人物でもあるが、その成果が直接反映されるのは本文の叙述にとどまる。

以上のように、各目録は互いの参照関係を十分に持たないまま独立して並立しており、その結果、記載内容に多数の不一致が生じ、統一的な作品目録はいまだ確立していない。

2. 各目録の記載内容について

続いて、各目録の記載内容を比較し、相違点や特徴を確認する。

表 2：各目録の情報の比較⁹

比較項目	Delage(1955)	Gordon(1991)	Thomas(1995)	Rodriguez(2001)	Gordon(2009)
ジャンル	全ジャンル	全ジャンル	全ジャンル	全ジャンル	声楽作品
編纂方法	ジャンル別	ジャンル別	ジャンル別	作曲年順	作曲年順
対象期間	全期間(約50年間)	全期間	全期間	全期間	全期間
編曲作品	×	×	○	×	×
未発表作品	○ (注記あり)	○ (注記あり)	○ (注記あり)	○ (注記なし)	○ (注記あり)
作曲年の記載	○	○	○	○	○
出版年の記載	×	×	○	×	×
出版社の記載	○	○	○	○	○
初演についての情報	○	○	○	×	×
作品番号の記載	×	×	×	○ (op.)	×
備考	作品名と曲名の書き分けなし	Delage (1955) と視覚的に類似	編曲作品も記載	特になし	Gordon(1991)からわずかに変更点あり

⁹ 本項において、「作品名」は曲集全体を示す包括的な名称であり、「曲名」はその内部に含まれる各楽曲を個別に示す名称として使い分ける。

まず編纂方法に注目すると、Delage (1955)、Gordon (1991)、Thomas (1995) の3点はジャンル別に作品を分類しているのに対し、Rodriguez (2001) および Gordon (2009) は作曲年順に配列している。対象ジャンルについては、Delage (1955)、Gordon (1991)、Thomas (1995)、Rodriguez (2001) の各目録が全ジャンルを扱っている一方、Gordon (2009) は声楽作品に限定している。

これらの目録はいずれもドラージュの創作期全体を対象としているが、収録作品や記載情報の範囲には目録ごとに明確な差異が認められる。

次に各目録の基本情報を比較すると、作曲年および出版社はすべての目録に共通して記載されているが、出版年まで明記しているのは Thomas (1995) のみである。また、初演に関する情報は Delage (1955)、Gordon (1991)、Thomas (1995) の3点の目録において確認できる。さらに、いずれの目録にも未出版作品が含まれており、そのような作品には Rodriguez (2001) を除き、何らかの注意書きが付されている。

特徴的な点として、Rodriguez (2001) の目録には作品番号 (Op.) が付されている。しかし、他の目録には同様の記載が存在しないことから、この番号は作曲家本人によるものではなく、ロドリゲスによって新たに付された可能性が高い。このような番号付けは、作品全体の構成と個々の作品の関係を示すうえで有効であるが、その適用は資料整理がさらに進み、体系が整った段階で行うのが適切である。

また、Gordon (2009) の目録には「インタビューによって得られた情報に基づく」と記されている箇所が散見される。具体的には、1996年3月15日にロドリゲス本人から直接聴取したものであると明記されている。詳細な内容が判明しなかったのは、その聴取内容が限られていたためと推察される。

それぞれの特徴を把握したうえで、以下では各目録の記載を、「作品名」「初演情報 (時期・場所)」「出版情報 (時期・出版社)」の順に確認する。

2.1. 作品 (または曲) 名の確認

ここでは、各目録に掲載された作品名をすべて表3に書き出した。作品名は左寄せ、曲名は中央揃えで示した。作品名の綴りは各目録の記載に従い、そのまま転記した。作品の配列は、基本的には Delage (1955) の記載に準拠している。ただし、Delage (1955) に含まれていない作品については、作曲年や演奏実績の時期等を参照し、推定のうえで配置した。

表3：各目録に記載された作品名

Denage (1955)	Gordon(1991)	Thomas(1995) 歌曲作品 (ピアノ伴奏)	Rodriguez(2001)	Gordon(2009)
	Trois Mélodies	Trois mélodies	Trois Mélodies	Trois Mélodies
Améthystes				
Intermezzo	Du Livre de Monelle Intermezzo	Intermezzo		Intermezzo
Livre de Monelle	Améthystes	Du livre de Monelle		Améthystes
Quatre Poèmes Hindous	Quatre Poèmes Hindous	Quatre poèmes hindous	Quatre Poèmes Hindous	Quatre Poèmes Hindous
		Médias: Une belle... Lahore: Un sapin isère... Bonaires: Naissance de Bourdha...		
	Ragamalika	Ragamalika		Ragamalika
Roses d'Octobre	Trois Poèmes	Trois poèmes	Trois Poèmes	Trois Poèmes
L'Alouette	Roses d'Octobre L'Alouette	Roses d'Octobre L'Alouette		Roses d'Octobre L'Alouette
Ballade	Ballade	Ballade		Ballade
Sept Hât-Kois	Sept Hât-Kois	Sept hat-kois	Sept Hât-Kois	Sept Hât-Kois
		Prière du Kôkîshiou Les herbes de l'oubli...		
		Le coq...		
		La petite torche...		
		La lune d'automne...		
		Alps...		
		L'été...		
Demoiselles d'Avignon	Demoiselles d'Avignon	Les demoiselles d'Avignon	Les Demoiselles d'Avignon	Les Demoiselles d'Avignon
Sobre las Olas	Sobre las Olas	Sobre las Olas	Sobre las Olas	Sobre las Olas
Chanson de ma Mère	La Chanson de ma Mère	La Chanson de ma Mère	Chanson de ma mère	Chanson de ma Mère
Toute Allégresse	Toute Allégresse	Toute allégresse	Toute allégresse	Toute Allégresse
Ronsard à sa Muse	Ronsard à sa Muse	Ronsard à sa Muse	Ronsard à sa muse	Ronsard à sa Muse
Vocalise	Vocalise	Vocalise	Vocalise	Vocalise
Trois chants de la Jungle	Trois chants de la Jungle	Trois chants de la jungle	Trois chants de la Jungle	Trois Chants de la Jungle
		Chili: Le Youtour Makati: Berceuse phoque Thémungui: Chant et Danse du Tigre		
Les Colombes	Les Colombes	Les Colombes	Les Colombes	Les Colombes
Hommage à Roussel	Hommage à Roussel	Hommage à Albert Roussel	Hommage à Roussel	Hommage à Roussel
Deux Fables de Jean de La Fontaine	Deux fables de Jean de La Fontaine	Deux fables de Jean de La Fontaine	Deux Fables de la Fontaine	Deux Fables de Jean de la Fontaine
		Le Corbeau et le Renard Le Cigale et la Fourmi		
L'Enfant	L'Enfant	L'Enfant	L'Enfant	L'Enfant
In morte di un Samurai	In morte di un Samurai	In morte di un Samurai		In Morte di un Samurai
		Trois poèmes désenchantés		Trois poèmes désenchantés
		Guitare		Guitare
		Trapeses...		Trapeses...
		Si ton esprit...		Si ton esprit...
Papillons	Papillons	Papillons	Papillons	Papillons
Berceuse Bretonne	Berceuse Bretonne	Berceuse Bretonne	Berceuse Bretonne	Berceuse Bretonne
"Mitsougui"	Mitsougui	Mitsougui	Mitsougui	Mitsougui
	Baïcho	Baïcho		Le vieil étang
	Mississippi	Mississippi	Mississippi	Mississippi
	Kousk, Breiz Izel	Kousk, Breiz Izel	Kousk, Breiz Izel	Kousk, Breiz Izel

表3：各目録に記載された作品名（続き）

Quatre Poèmes Hindous (2)	歌謡作品（管弦楽伴奏）	Quatre Poèmes Hindous	Quatre Poèmes Hindous
		Madras: Une belle...	
		Labore: Un saïn isore...	
		Bénavas: Naissance de Bouddha...	
		Ajpur: Si vous pensez...	
Ragamelika (1)		Ragamelika	Ragamelika
Roses d'Octobre (1)		Roses d'Octobre	Roses d'Octobre
L'Alouette (1)		L'Alouette	L'Alouette
Ballade de Villon (1)		Ballade	Ballade
Sept Hâï-Kaïs (2)		Sept Hâï-Kaïs	Sept Hâï-Kaïs
		Preface du Kokinshtou	
		Les herbes de l'oubli...	
		Le coc...	
		La petite tortue...	
		La lune d'automne...	
		Alors...	
		L'Yâb...	
Trois chants de la jungle (2)		Trois chants de la jungle	Trois Chants de la jungle
		Chir, Le Vautour	
		Makéhi: Boreuse époque	
Deux Fables de Jean de La Fontaine (2)		Thémangé: Chant et Danse du Tigre	
		Le Carbeau et le Renard	
		Le Cigale et la Fourmi	
Hommage à A. Roussel (1)		In morte di un Samurai	Hommage à Roussel
× In morte di un Samurai × (1)		Trois poèmes désenchantés	
		Guitare	
		Tu passais...	
		Si ton esprit...	
		ピアノ/独奏	
"Schumann"		Sonatine	
Contraires(1, 2, 3.)		Schumann...	Schumann...
		Contraires	Contraires
		Nuit de Noël	
		Rives	
		Danse	
		オーケストラ作品	
		Conté par la mer	Conté par la mer
"BA TEAU IVRE"		Ouverture pour le ballet de l'avenir	Ballet de l'avenir
Ouverture "Les Bâtisseurs de ponts"		Le Beau livre	Beau livre
CONTRAIRES		Ode de l'Alsine	Les Bâtisseurs de Ponts
		Contraires	
		Chanson de Noël	
		Hommage à D. Manuel de Falla	
		Danse	
		Cinq danses symphoniques	Cinq danses symphoniques
Quator à cordes en ré mineur		Quator à cordes en ré mineur	Quator à cordes en ré mineur
L'Alouette		L'Alouette	
		その他（編曲作品）	
		Chants populaires by Maurice Ravel	Suite pour Quator d'archets

表3に示す作品数は、Delage (1955) が33作品、Gordon (1991) が41作品、Thomas (1995) が40作品、Rodriguez (2001) が31作品、Gordon (2009) が31作品である。

続いて、それぞれの特徴を整理する。Delage (1955) の目録は、収録数が比較的小さいこと、また作品名の一部に「×」印が付されていること（《サムライの死に寄せて *In morte di un Samurai*》（管弦楽伴奏）の両端）などから、作曲家本人の意向が反映されている可能性が示唆される。また、作品名と曲名の区別が明確でない箇所も散見される。具体的には、他の目録では《3つのメロディ *Trois Mélodies*》という歌曲集の題目のもとに3曲がまとめられているのに対し、Delage (1955) では3曲がそれぞれ独立して並べられ、曲集全体を示す《3つのメロディ》の名称が欠けている。このように、曲集の名称（作品名）と、その中に含まれる個々の楽曲の名称（曲名）との区別が十分でない箇所は、《3つの詩 *Trois Poèmes*》においても確認できる。

さらに、Delage (1955) には独自の註記がみられる。歌曲作品（管弦楽伴奏）では、作品名の左に赤色と黒色の丸印が付され、その下に「赤＝小規模な管弦楽（二管編成）」「黒＝小規模な管弦楽（弦楽四重奏＋6～7人の独奏者）」と説明が添えられている。他の目録では伴奏の分類は「ピアノ伴奏」か「管弦楽伴奏」にとどまっておらず、このような編成の細分化はDelage (1955) に特有の情報である。

Gordon (1991) の目録は、「BnF所蔵の原本を翻訳し、訂正と補足を加えたもの」と記しており、Delage (1955) を基盤としつつ独自の修正を加えている。

Thomas (1995) は、収録作品数が最も多い。また編曲作品も取り上げている点は、唯一の特徴である。ただし、1作品のみが記載されているに過ぎず、すべてを網羅しているわけではない。

Rodriguez (2001) は、本文中に詳細な分析や背景説明を含み、未完成作品にも言及している。目録は簡潔であるため、ドラージュの作品に関する詳細な情報を得るには本文も参照する必要がある。

Gordon (2009) は、声楽作品に限定して編纂されており、既存の目録に新たに数点を加えている。そこには未出版で存在が確不確かな作品が追加されている。

総じて、各目録の間で収録作品に大きな欠落は認められないものの、課題として大きく3つの課題が明らかになった。

第一に、作品数や作品名・曲順の不一致である。第二に、Delage (1955) の目録には記載されていないが、他の目録には含まれる作品の確認である。第三に、13作品もの不明な作品が存在することから、いずれの目録にも記載されていない未発見作品の存在が示唆される点である。これらについては、目録間の比較のみでは解決できないため、後述するように追加の調査を実施した。

2.2. 初演に関する情報（時期・場所）の確認

ドラージュ作品の初演に関する情報を記載しているのは、Delage (1955)、Gordon (1991)、および Thomas (1995) の3つの目録である。これら各目録に掲載された初演情報を表4に示す。

Delage (1955) の目録には、各作品について「初演年」と「初演場所」が記載されている。ただし、初演場所の欄には「S.M.I. (独立音楽協会)」「Durand (デュラン社)」「Revue Musicale (ルヴュ・ミュージカル)」などと記されている例がある。これらは協会名・出版社名・掲載誌名にあたる情報であって、実際の演奏会場を示すものではない。

Gordon (1991) の目録は、Delage (1955) を基盤としつつ訂正や補足を加えているため、多くの点で両者は一致するが、一部には相違も認められる。たとえば《シューマン *Schumann*》に注目すると、Delage (1955) が「1918年、サル・ガヴォーでの演奏」と記すのに対し、Gordon (1991) は「1919年、ラジオ・ジュネーヴでの放送」としている。また、演奏年の記載にもいくつかの不一致がみられる。これらの相違には、Gordon (1991) が Delage (1955) の誤記を訂正している場合と、特に注記を加えずに異なる情報を示している場合とがある。

なお、Delage (1955) および Gordon (1991) の目録には、後期作品の初演場所として「Radio Nationale (ラジオ・ナショナル)」と記された箇所が散見される。Rodriguez (2001) によれば、《ラ・フォンテーヌの2つの寓話 *Deux fables de Jean de La Fontaine*》は1949年3月16日にサル・エラルで初演され、その演奏が国営ラジオによって放送されたとされている¹⁰。この事例からも明らかなように、「Radio Nationale」とのみ記されている場合には、放送記録や演奏会情報を照合し、より具体的な内容を特定する作業が不可欠である。

Thomas (1995) の目録における初演情報は、Delage (1955) および Gordon (1991) と比較して限定的である。初期作品については、両者と一致する箇所もみられるが、それ以外の作品では相違が多い。たとえば《コントルリム *Contrerimes*》については、Delage (1955) および Gordon (1991) が「1931年」とするのに対し、Thomas (1995) は「1933年」と記しており、目録間で年代の不一致が生じている。

以上のように、Delage (1955)、Gordon (1991)、および Thomas (1995) の3つの目録は、それぞれ独自の調査に基づいてドラージュ作品の初演情報を提示しているものの、いずれも記載内容には曖昧さが認められる。

¹⁰ Rodriguez, 94.

表 4：各目録に記載された初演年と場所

作品名	ジャンル	Delage(1955)		Gordon(1991)		Thomas(1995)
		1910	S. M. I.	1908	S. M. I.	
<i>Conté par la mer</i>	交響曲				S. M. I.	
<i>Améthystes</i>						
<i>Intempezzo</i>	歌曲 (ピアノ伴奏)	1910	S. M. I.	1910	S. M. I.	1910
<i>Du Livre de Morelle</i>						
<i>Quatre poèmes hindous</i>	歌曲 (ピアノ伴奏)	1914	S. M. I.	1914	S. M. I.	1914
<i>Quatre poèmes hindous</i>	歌曲 (オーケストラ伴奏)	1914	Erard	1914	Salle Erard	
<i>Ragamalika</i>	歌曲 (ピアノ伴奏)	1915	S. des Agricult.	1915	Salle aux Agriculteurs	
<i>Ragamalika</i>	歌曲 (オーケストラ伴奏)	1922	Durand	1922	Durand	
<i>Schumann...</i>	ピアノ	1918	Gaveau	1919	Radio-Genève	S. M. I.
<i>Roses d'octobre</i>	歌曲 (ピアノ伴奏)	1922	Opéra	1922	Opéra	
<i>L'Alouette</i>						
<i>Ballade</i>						
<i>Roses d'octobre</i>	歌曲 (オーケストラ伴奏)	1922	Opéra	1922	Opéra	
<i>L'Alouette</i>	歌曲 (オーケストラ伴奏)	1922	Opéra	1922	Opéra	
<i>Ballade de Willes</i>	歌曲 (オーケストラ伴奏)	1922	Opéra	1922	Opéra	
<i>Ouverture "Bâtisseurs de pont"</i>	付随音楽?	1923	Opéra	1923	Opéra	
<i>Ballet de Phénix</i>	付随音楽					1923
<i>Sept Haï-kais</i>	歌曲 (ピアノ伴奏)	1923	Salle Pleyel	1923	Salle Pleyel	Concerts - Koussevitzky
<i>Sept Haï-kais</i>	歌曲 (オーケストラ伴奏)	1923	Salle Pleyel	1923	Salle Pleyel	S. M. I.
<i>Ode de l'Usine</i>	不明	1924		1924	Opéra	
<i>Les Démoniaques d'Avignon</i>	歌曲 (ピアノ伴奏)	1925	S. Erard	1925	Salle Erard	
<i>Sorbe les Ollas</i>	歌曲 (ピアノ伴奏)	1925	S. Erard	1925	Salle Erard	
<i>Chanson de ma Mère</i>	歌曲 (ピアノ伴奏)	1925	S. Erard	1925	Salle Erard	
<i>Tout le Millénaire</i>	歌曲 (ピアノ伴奏)	1925	S. du Divan	1925	Salle du Divan	
<i>Ronsard à sa muse</i>	歌曲 (ピアノ伴奏)	1925	Revue musicale	1924	Revue musicale	
<i>Vocalise</i>	歌曲 (ピアノ伴奏)	1926	Conservatoire	1929	Conservatoire	
<i>Les Colombes</i>	歌曲 (ピアノ伴奏)	1925	Salle Erard	1925	Salle Erard	
<i>Hommage à Roussel</i>	歌曲 (ピアノ伴奏)	1925	Radio Nationale	1929	Conservatoire	
<i>Contrerimes</i>	ピアノ					
<i>Deux Fables de La Fontaine</i>	歌曲 (ピアノ伴奏)	1948	Radio-Genève	1948	Radio-Genève	
<i>Contrerimes</i>	交響曲	1931	Ch. Elysees	1931	Théâtre Champs Elysees	1933
<i>Trois chants de la Jungle</i>	歌曲 (ピアノ伴奏)	1935	Radio Nationale	1935	Revue musicale	Concerts Stranam Triton
<i>Trois chants de la Jungle</i>	歌曲 (オーケストラ伴奏)	1935		1935	Radio Nationale	
<i>Mitsougué</i>	歌曲 (ピアノ伴奏)					
<i>L'Enfant</i>	歌曲 (ピアノ伴奏)	1947	Radio Nationale	1948	Radio Nationale	
<i>Deux Fables de La Fontaine</i>	歌曲 (オーケストラ伴奏)	1949	Radio Nationale	1949	Radio Nationale	
<i>Quatre à cordes en Re Mineur</i>	弦楽四重奏曲	1948	Société Nationale	1949	Sté. Nationale	
<i>Hommage à H. Roussel</i>	歌曲 (オーケストラ伴奏)	1949	Radio Nationale	1949	Radio Nationale	
<i>In morte di un Samurai</i>	歌曲 (ピアノ伴奏)	1951	Radio Nationale	1951	Radio Nationale	
<i>In morte di un Samurai</i>	歌曲 (オーケストラ伴奏)	1951	Radio Nationale	1951	Radio Nationale	
<i>BATEAU IVRE</i>	交響曲	1955	Radio Nationale	1955	Radio Nationale	Orchestre Nationale

2.3. 出版に関する情報（時期・出版社）の確認

3点目として、出版年を精査し、その結果を示した。5つの目録には、いずれも出版年の記載が確認される。また、これまでに確認した作品名や初演に関する情報（時期・場所）と比較すると、出版年に関する目録間の差異は相対的に小さい。なお、Thomas (1995) には出版社名だけでなく出版年も明記されていたため、表5ではその情報も反映した。

表5：各目録に記載された出版年と出版社

作品名	ジャンル	Delage (1955)	Gordon (1991)	Thomas (1995)	Rodriguez (2001)	Gordon (2009)
<i>Sonatine</i>	ピアノ			Unpublished		
<i>Conté par la mer</i>	交響曲			Unfinished		
<i>Amsthystes</i>			Durand			
<i>Intermezzo</i>	歌曲 (ピアノ伴奏)	Durand	Durand	1914	Durand	Durand
<i>Du Livre de Monelle</i>			Durand			
<i>Quatre poèmes hindous</i>	歌曲 (ピアノ伴奏)	Durand	Durand	1914	Durand	Durand
<i>Quatre poèmes hindous</i>	歌曲 (オーケストラ伴奏)	Durand	Durand	1914		Durand
<i>Ragamalika</i>	歌曲 (ピアノ伴奏)	Durand	Durand	1915	Durand	Durand
<i>Ragamalika</i>	歌曲 (オーケストラ伴奏)	Durand	Durand	1915		Durand
<i>Schumann...</i>	ピアノ	Durand	Durand	1921	Durand	Durand
<i>Roses d'octobre</i>			Durand			
<i>L'Alouette</i>	歌曲 (ピアノ伴奏)	Durand	Durand	1923	Durand	Durand
<i>Ballade</i>			Durand			
<i>Roses d'octobre</i>		Durand	Durand			Durand
<i>L'Alouette</i>	歌曲 (オーケストラ伴奏)	Durand	Durand		Unpublished	Durand
<i>Ballade de Villon</i>		Durand	Durand			Durand
<i>Ouverture "Batiseurs de pont"</i>	付随音楽?	Inédit			Unfinished	Inédit
<i>Sept Hai-kais</i>	歌曲 (ピアノ伴奏)	Durand	J. Jobert	1924	Jobert	J. Jobert
<i>Sept Hai-kais</i>	歌曲 (オーケストラ伴奏)	J. Jobert	J. Jobert	1924	Jobert	J. Jobert
<i>Les Demoiselles d'Avignon</i>	歌曲 (ピアノ伴奏)	J. Jobert	J. Jobert	1927	Jobert	J. Jobert
<i>Sobre las Olas</i>	歌曲 (ピアノ伴奏)	J. Jobert	J. Jobert	1927	Jobert	J. Jobert
<i>Chanson de ma Mère</i>	歌曲 (ピアノ伴奏)	J. Jobert	J. Jobert	1925	Jobert	J. Jobert
<i>Toute Allégresse</i>	歌曲 (ピアノ伴奏)	J. Jobert	J. Jobert	1927	Jobert	J. Jobert
<i>Ronsard à sa muse</i>	歌曲 (ピアノ伴奏)	J. Jobert	J. Jobert	1924	Jobert	J. Jobert
<i>Vocalise</i>	歌曲 (ピアノ伴奏)	Alphonse Leduc	Leduc	1925	Unpublished	Alphonse Leduc
<i>Les Colombes</i>	歌曲 (ピアノ伴奏)	J. Jobert	J. Jobert	1925	Jobert	J. Jobert
<i>Hommage à Roussel</i>	歌曲 (ピアノ伴奏)	Revue Musicale	Revue Musicale	1929	La Revue Musicale	Revue Musicale
<i>Contrerimes</i>	ピアノ			1933	Durand (1, 3番)	Durand
<i>Deux Fables de La Fontaine</i>	歌曲 (ピアノ伴奏)	Durand	Durand	1948	Durand	Durand
<i>Contrerimes</i>	交響曲	Durand	Durand		Unpublished	
<i>Trois chants de la Jungle</i>	歌曲 (ピアノ伴奏)	Revue Musicale	Sénart-Salabert	1935	Maurice Senar	Sénart-Salabert
<i>Trois chants de la Jungle</i>	歌曲 (オーケストラ伴奏)	Salabert	Sénart-Salabert		Unpublished	Salabert
<i>Hitsougul</i>	歌曲 (ピアノ伴奏)		Unpublished		Unpublished	Inédit
<i>L'Enfant</i>	歌曲 (ピアノ伴奏)	Durand	Durand	1948	Durand	Durand
<i>Deux Fables de La Fontaine</i>	歌曲 (オーケストラ伴奏)	Durand	Durand	1950	Durand	Sénart-Salabert
<i>Quatuor à cordes en Ré Mineur</i>	弦楽四重奏曲	Durand	Durand	1951	Durand	
<i>Hommage à A. Roussel</i>	歌曲 (オーケストラ伴奏)					Inédit
<i>In morte di un Samurai</i>	歌曲 (ピアノ伴奏)	Durand	Eschig	1952	Max Eschig	Eschig
<i>In morte di un Samurai</i>	歌曲 (オーケストラ伴奏)			1952	Max Eschig	
<i>BATEAU IVRE</i>	交響曲	Durand	Durand	1954	Durand	Durand
<i>Cinq danses symphoniques</i>	交響曲					Billaudot
<i>Trois poèmes de senchantés</i>	歌曲 (ピアノ伴奏)		Durand	1957		Durand
<i>Trois poèmes de senchantés</i>	歌曲 (オーケストラ伴奏)			1957		Durand

まず、初めて出版された《3つのメロディ》以降、およそ10年間に作曲された作品はいずれもデュラン社から出版されている。途中、一部の作品ではジョベール社への移行が確認されるものの、その後は再びデュラン社が出版の中心を担っている。「未出版 (Unpublished / inédit)」ではないにもかかわらず、そのように記載されている例もみられる。また、出版社名の記載が異なる例も存在する。《3つのジャングルの歌 *Trois chants de la jungle*》は、Delage (1955) では「Revue Musicale (雑誌名)」、Gordon (1991, 2009) では「Sénart-Salabert (出版社名)」と異なる情報が示されている。さらに、《サムライの死に寄せて》や《ルーセルへのオマージュ *Hommage à A. Roussel*》のように、同一作品にピアノ伴奏版と管弦楽伴奏版が併存する場合、両版がともに出版されている場合と、一方のみが出版されたとされる

場合とがある。しかし、このような版態の扱いについては、いずれの目録においてもなお曖昧さが残されている。

3. 追加調査

作品名・初演・出版に関する各目録の記載事項を比較した結果、各目録の情報のみでは、正確な判断を下すことができない点が残された。そこで筆者は、BnF所蔵資料の実見確認に加え、新聞・雑誌データベース「RetroNews」を用いた同時代記事の検索、さらに先行研究の参照を通じて、補足的な調査を実施した。その成果を現時点で整理したものを、以下に述べるとともに、本稿末の表10に掲げる。

3.1. 作品名の追加調査

先述のとおり、作品名について5つの目録を比較した結果、課題として大きく3点が明らかになった。

第一に、作品数・作品名・曲順に関する不一致が認められること、第二に、Delage (1955)に未収録の作品が存在すること、第三に、未発見作品の所在調査が今後の課題として残されていることである。

(1) 作品数や作品名・曲順の不一致

5つの目録を比較した結果、作品名および曲名には多様な差異が確認された。

まず、「作品数の不一致」については、完成・未完成、出版・未出版の別を問わず、現時点でドラージュの作品として確認可能なものをすべて集計することにより、一定の整理が可能となった。

次に、「作品名の不一致」である。筆者はこの問題を4つの型に分類し、それぞれにおける整合点を検討した。

一点目に、大文字・小文字の表記差である。《酔いどれ船 *BATEAU IVRE / Le Bateau ivre*》や《弦楽四重奏 ニ短調 *Quatuor à cordes en re mineur / Quatuor à cordes en Re Mineur*》などがその例である。

二点目に、人名を含む作品名における表記の揺れである。《ラ・フォンテーヌの2つの寓話 *Deux Fables de La Fontaine / Deux fables de Jean de La Fontaine*》、《ルーセルへのオマージュ *Hommage à Roussel / Hommage à A. Roussel*》などが確認された。これら2点は重大な問題ではなく、再編にあたっては初版譜の表記を採用した。

三点目に、全く異なる作品名が用いられている場合である。特に未出版作品に多く、《古池や *Le vieil étang*》と《芭蕉 *Basho*》がその例である。この作品は薩摩治郎八に宛てて書

かれたもので、船山による調査を契機にその存在が明らかとなった¹¹。自筆譜は現存しないが、写真資料が残されており、実際に作曲されたことは確実である。その写真には題名が記されていないため、松尾芭蕉の俳句「古池や」に基づく本作は、従来《古池や》または《芭蕉》のいずれかの仮称で言及されてきた。今回の調査において筆者は、SACEM（フランス著作権協会）に「Le vieil étang」の題名で登録があることを確認したため、本稿末尾の表では作品名を《古池や *Le vieil étang*》として採用する。

四点目に、明らかな誤記の問題である。《棺 *Hitsougui*》は、しばしば“Mitsougai”または“Mitsougai”と誤って転記されてきた。この作品は未出版ではあるものの、薩摩治郎八（1901–1976）の小説『白銀の騎士』の一篇「棺」に基づいて作曲された作品であり、生前に演奏・出版されることはなかったが、小林によってその存在が報告されている¹²。この点については、Delage（1955）の記載を優先し、《棺 *Hitsougui*》を原表記とみなした。

さらに、《3つのメロディ》を構成する3曲——《間奏曲 *Intermezzo*》、《アメジスト *Améthystes*》、《モネルの書から *Du Livre de Monelle*》——は曲名自体こそ一致するものの、配列順が目録によって異なっていた。したがって本研究では、初版譜¹³における順序を基準とした。

(2) Delage（1955）未収録作品の調査

Delage（1955）の目録には記載されていないが、他の目録にのみ収録されている作品は、計13点確認された。これらの中には、実際に作曲の存在が確認されるものもあれば、存在が不確かで資料的裏づけに乏しいものも含まれている。そこで表5では、Delage（1955）に未収録の13作品について、その「存在の確実性」を基準に分類を行った。すなわち、「◎＝確認済み（一次資料等により存在が確認されたもの）」、「○＝一定の裏づけあり（資料上に言及はあるが未確認のもの）」、「△＝不明点が多く、今後の検証を要するもの」と定義した。また、各作品がどの目録に記載されているかも併せて示している。

以下では、これら3つの区分に含まれる作品群について順に概観する¹⁴。

¹¹ 船山隆「ストラヴィンスキー⑥—《三つの日本の抒情詩》とジャポニズム」『音楽芸術』第40巻第10号（1982年10月）：71頁。

¹² 小林茂『ミネルヴァ日本評伝選 薩摩治郎八——パリ日本館こそわがいのち』ミネルヴァ書房、2010年：351頁。

¹³ Delage, Maurice. *Trois melodies*. Voice and Piano. Paris: Durand, 1914.

¹⁴ 《古池や》と《棺》については、すでに「(1) 作品数や作品名・曲順の不一致」で扱ったため、ここでは言及を省く。

表 6 : Delage (1955) 未収録作品¹⁵

区分	区分の基準	作品名	目録への収録の有無			
			①	②	③	④
◎	楽譜の確認ができた	《ソナチネ <i>Sonatine</i> 》		○		
		《古池や <i>Le vieil étang</i> 》 (または <i>Basho</i>)		○	○	○
		《眠れ、ブルターニュの子よ <i>Kousk, Breiz Izel</i> 》			○	○
		《3つ幻滅した詩 <i>Trois poëms désenchantés</i> 》		○	○	
		《5つの交響的舞曲 <i>Cinq danses symphonique</i> 》	○		○	
○	一定の裏付けあり (ただし、現存せず限界あり)	《海の物語 <i>Conté par la mer</i> 》	○	○	○	
		《未来のパレエ <i>Ballet de l'Avenir</i> 》		○	○	
		《棺 <i>Hitsougui</i> 》	○	○	○	○
△	不明点が多く、今後の課題	《ミシシッピ <i>Mississippi</i> 》			○	
		《工場への頌歌 <i>Ode à l'Usine</i> 》	○			
		《蝶々 <i>Papillons</i> 》	○			○
		《ブルターニュの子守唄 <i>Berceuse Bretonne</i> 》	○			○
		《弦楽四重奏のための組曲 <i>Suite pour Quatuor d'archets</i> 》			○	

まず、「◎(確認済み)」に分類される作品としては、《ソナチネ *Sonatine*》が挙げられる。《ソナチネ》は、モーリス・ラヴェル Maurice Ravel (1875–1937) による書き込みを伴う自筆譜が BnF に所蔵されており、筆者が現地にて現物を確認したものである。

《眠れ、ブルターニュの子よ *Kousk, Breiz-Izel*》は、Gordon (2009) において作品名のみが挙げられているが、詳細は不明のままであった。ところが、BnF のカタログを精査した結果、「印刷楽譜：子守歌／歌とピアノのための編曲：モーリス・ドラージュ」という説明を伴う楽譜の存在を確認することができた。作品名に含まれる“Breiz-Izel”はブルトン語で「低地ブルターニュ」、すなわちフランス西部のブルターニュ地方を指す語である。くわえて調査の過程で、本作がフランス語では“*Dors, Bretagne*”の題で知られていることが明らかとなった。したがって、本稿では訳題を《眠れ、ブルターニュの子よ》とした。さらに、同名の民謡が実在しており、ドラージュはその旋律をもとに、歌とピアノのために和声付けを行ったものと推察される¹⁶。

譜例 1 : ブルターニュ民謡《眠れ、ブルターニュの子よ》の冒頭 (mm. 1–6)

Anheola zo ku zet, se-tu echu an de Meglev arc'hloc'hotin - talan A ve

¹⁵ 表 6 に示した作曲年および編成は、各目録に記載された内容に準拠している。各目録載せ立年と作者はスペース上、以下に置き換えて示す。① Gordon (1991)、② Thomas (1995)、③ Rodriguez (2001)、④ Gordon (2009)

¹⁶ 著作権の関係で現物の確認はまだできていない。

また、表6「Delage (1955) 未収録作品の追加調査結果」を改めて見ると、そこには《ブルターニュの子守唄 *Berceuse Bretonne*》が挙げられている。このことから、《眠れ、ブルターニュの子よ》と《ブルターニュの子守唄》は同一作品を指している可能性が高いと考えられる。

《3つの幻滅した詩 *Trois poèmes désenchantés*》および《5つの交響的舞曲 *Cinq danses symphoniques*》については、Delage (1955) の目録作成以後の1957年および1958年に作曲されたため、同目録には収録されていない。前者はピアノ伴奏版・管弦楽伴奏版ともに1957年にデュラン社から出版されており、『ル・モンド』(*Le Monde*) 紙1959年7月30日号に演奏記録が確認される。後者はエクトル・ベルリオーズ資料館(Médiathèque Hector Berlioz)にその自筆資料が所蔵されており、そこには「1958年作曲」との記載がみられる。したがって、これらはいずれも実在が確認された作品として「◎(確認済み)」に分類した。

次に、「○(一定の裏づけあり:資料上存在が言及されるが未確認)」に分類される作品として、《海の物語 *Conté par la mer*》と《未来のバレエ *Ballet de l'Avenir*》が挙げられる。両作品とも自筆譜は失われているが、同時代の批評記事から実際に演奏されたことが確認できる。

《海の物語》は、1910年6月9日にサル・ガヴォーで開催された独立音楽協会の演奏会において初演された。この演奏会は、同協会設立後最初のシーズンの掉尾を飾るものであり、その文脈からもドラージュが新進気鋭の作曲家として注目されていたことがうかがえる。6月15日付の『ラ・パトリ (*La Patrie*)』の批評では、本作が「非常に興味深い交響的習作」として言及されている¹⁷。さらに、8月1日付の『メルキュール・ド・フランス (*Mercure de France*)』は、《3つのメロディ》とともに《海の物語》を取り上げ、ドビュッシーの影響を受けつつも、自身の音楽言語を確立しつつある点を高く評価している¹⁸。同記事はまた、《海の物語》が前年、国民音楽協会の審査で落選していた事実にも触れ、その判断に疑問を呈している。さらに、この作品が国民音楽協会での演奏を拒否されたことが、独立音楽協会設立の契機のひとつとなったことは、近代フランス音楽史においても重要な事実である。

《未来のバレエ》は、バレエ・リュスのために構想されたパントマイム作品であることが明らかになっている。同時代の記事には、「工場の音を模したような音楽」であったと記されている。初演は1923年11月8日、オペラ・ガルニエにおいて、クーセヴィツキーの指

¹⁷ Schmitt, Henri. "La vie Théâtrale." *La Patrie*, juin 15, 1910: 3. https://www.retronews.fr/journal/la-patrie/15-juin-1910/3/66f84978-fbc0-4b0e-a6d2-a1a7bf74bffa?search_text=Maurice+Delage (2025年7月29日閲覧) 原文の書き起こしは以下の通り。"une étude symphonique très intéressante, de M. Maurice Delage, Conté par la mer"

¹⁸ Marnold, Jean. "Musique." *Mercure de France*, août 1, 1910: 541. https://www.retronews.fr/journal/mercure-de-france/01-aout-1910/157/a60205c1-62b1-4e23-aa5b-e4bfa48623c?search_text=Maurice+Delage (2025年7月29日閲覧)

揮により行われたことが確認されている¹⁹。台本はルイ・ラロワ（Louis Laloy, 1874–1944）によるものとされている。ラロワの著作には、《未来の音楽 *La Musique de l'avenir*》（1913年）や《近代のバレエ *Le Ballet moderne*》（1920年）など、類似のタイトルをもつテキストが複数存在する。現時点では、本作の正確な台本との対応関係は確定していないが、今後の資料調査によってその同定が進む可能性がある。

最後に、「△（不明点が多く、今後の課題）」に分類される作品について述べる。《ミシシッピ *Mississippi*》は、複数の目録や文献に記載があるものの、その存在を裏づける具体的な資料は確認されていない。Rodriguez（2001）はこの作品を1945年の作とし、ジュネーブでの上演計画についても言及している。そこでは、ドラージュがジョージ・ガーシュウィン Gershwin George（1898–1937）の《ラプソディ・イン・ブルー *Rhapsody in Blue*》（1924）を素材とした、約22分のバレエ作品を構想していたが、フランス労働組合（C.G.T.）やオペラ座舞台関係者によるストライキの影響で実現に至らなかったとされている。ただし、出発直前に舞台装置係から「翌春、ジュネーブで《ミシシッピ》という題で上演される予定」と伝えられたことが書簡に残されており²⁰、一定の計画が存在していたことがうかがえる。

《工場への頌歌》は、5つの作品目録のうち Gordon（1991）にのみ記載が確認される。同論文では「1950年以前には言及がみられないことから、この作品は作曲者の晩年に創作されたものであることが示唆される」と記されている。しかし、筆者の調査によれば、『ル・モンド』紙1956年3月14日号に掲載された、評論家ルネ・デュメニル René Dumesnil（1879–1967）による《酔いどれ船》のレビューの中に、《工場への頌歌》への言及が確認できる。デュメニルの言によれば、この作品は1926～27年に作曲されたアレクサンドル・モソロフ Alexander Mosolov（1900–1973）の《鉄工場 *Les Fonderies d'acier*》よりも早い時期に書かれたと考えられる。なお、先述のとおり《未来のバレエ》も「工場の音を模した」と評された作品であり、その内容および上演時期を踏まえると、《工場への頌歌》との関連も想定される。しかし、唯一確認される当時の上演プログラムには《未来のバレエのための序曲 *Ouverture pour le "Ballet de l'Avenir"*》と明記されており、実際に公開されたのは序曲のみであった。また、現時点で楽譜は未確認であるため、詳細の把握は困難である。したがって、《工場への頌歌》が《未来のバレエ》の一部を成していた可能性については、今後も慎重な検討を要する。

《蝶々 *Papillons*》は、Gordon（1991）において演奏時間がわずか50秒と記録されているものの、それ以外の目録には情報が確認されていない。しかし、本文を詳しく読むと、

¹⁹ Casadesus, Jules. "Les Grands Concerts." *La Presse*, novembre 12, 1923: 2. https://www.retronews.fr/journal/la-presse/12-novembre-1923/2/d5ea5df0-e923-4d6c-941a-79c19be973d4?search_text=Maurice+Delage（2025年7月30日閲覧）

²⁰ Rodriguez, 123.（個人所蔵の書簡の画像が付されている）

Rodriguez (2001) および Gordon (2009) には《ブルターニュの子守唄》とともに言及されており、いずれもゴードンがラジオ・フランスで音源資料を聴取した旨が記されている²¹。

《弦楽四重奏のための組曲 *Suite pour Quatuor d'archets*》は、筆者の調査の範囲では所在を確認することができなかった。しかし、《5つの交響的舞曲》と同一作品である可能性が高い。その根拠として、ベルリオーズ資料館に登録された資料ページ²²では、“*Suite de // Cinq danses symphoniques // pour quatuor d'archets... // Maurice Delage*”と表記されていることが挙げられる。これは、「弦楽四重奏のための組曲 (*Suite pour Quatuor d'archets*)」という語が、《5つの交響的舞曲 *Cinq danses symphoniques*》に付された副題であり、同作の別編成版または改作版を示しているのではないだろうか。Rodriguez (2001) は、この記載を独立した作品名と誤認し、目録中で単一の未確認作品として扱ったものとみられる。

以上の検討を通じて、このように表を埋めることができた。

表7: Delage (1955) 未収録作品一覧と補足情報

分類	作品名	作曲年	編成
◎	《ソナチネ <i>Sonatine</i> 》	1905年	ピアノ
○	《海の物語 <i>Conté par la mer</i> 》	1908年	オーケストラ
△	《工場への頌歌 <i>Ode à l'Usine</i> 》	1920年代?	オーケストラ?
○	《未来のパレエ <i>Ballet de l'Avenir</i> 》	1923年	オーケストラ
◎	《古池や <i>Le vieil étang</i> 》	1924年	歌、ピアノ
△	《ミシシッピ <i>Mississippi</i> 》	1945年?	オーケストラ
○	《棺 <i>Hitsougui</i> 》	1946年	歌、ピアノ
◎	《眠れ、ブルターニュの子よ <i>Kousk, Breiz Izel</i> 》	1951年	歌、ピアノ
◎	《3つ幻滅した詩 <i>Trois poèmes désenchantés</i> 》	1957年	歌、ピアノ / 歌、オーケストラ
◎	《5つの交響的舞曲 <i>Cinq danses symphonique</i> 》	1958年	オーケストラ
△	《弦楽四重奏のための組曲 <i>Suite pour Quatuor d'archets</i> 》	—	弦楽四重奏
△	《蝶々 <i>Papillons</i> 》	—	—
△	《ブルターニュの子守唄 <i>Berceuse Bretonne</i> 》	—	—

(3) 未発見作品の調査 (BnF 所蔵資料を中心に)

目録の記載に依存しない形でドラージュ作品の全体像を把握するため、BnF 所蔵資料の調査を行った。その結果、合計 93 件の資料を確認した。これらには、出版譜や自筆譜のほか、CD、レコード、編曲作品の楽譜、他の作曲家からの献呈譜、さらにはドラージュの生前の所持品で、没後に BnF に収蔵された資料など、多様な形態が含まれている。これらの資料を、形態および内容別に分類・整理した結果を、表 8 に示す。

²¹ Gordon, 1991, 34.

²² *Suite de // Cinq danses symphoniques // pour quatuor d'archets... // Maurice Delage* [Musique manuscrite], Médiathèque Hector Berlioz (Réserve), (Msc 253).

表 8：BnF に所蔵されているドラージュに関する音楽資料

楽譜(出版譜)	楽譜(校正刷)	手稿譜(完成)	手稿譜(未完成)	楽譜(分類不明)
54	4	5	6	3
CD	レコード	献上された楽譜	所有していた楽譜	編曲作品
9	5	2	2	3

CD およびレコードを除くすべての資料を確認した結果、既存の目録には含まれていなかった、ドラージュによる楽譜の草稿や作曲課題、未発表作品、さらには彼自身が編曲した作品の存在が明らかとなった。

表 9：ドラージュによる楽譜の草稿や作曲課題

BnF資料番号	資料名
VM BOB-6230, MS-17519	M. ドラージュによるピアノのためのソナチネ
VM BOB-16942, MS-17642	モーリス・ドラージュの初期作品、ピアノのためのスケッチ [手稿譜]
VM BOB-6256, MS-17641	M. ドラージュの作品、モーリス・ラヴェルによる校訂 (ピアノのためのスケッチ?)
VM BOB-6257, MS-17643	モーリス・ドラージュによるピアノのための作曲課題
VM BOB-6263, MS-17651	弦楽四重奏曲、13小節のスケッチ
VM BOB-6262, MS-17650	メヌエット 嬰ハ短調 (ラヴェル)

『M. ドラージュによるピアノのためのソナチネ²³』は、すでに先行研究において、1905年に作曲された作品であると指摘されている。全体は鉛筆で記譜されており、8ページにわたる。楽譜には、ラヴェル自身による青鉛筆での加筆がみられるが、その内容は、強弱記号の補足や音の配置をオクターヴ上下させる程度にとどまっている。

拍子は 4/4 拍子、形式はソナタ形式である。調号にはシャープが4つ付されており、Eの音が中心的に扱われているものの、両手にわたって半音階的な下行進行が頻出しており、調性感は明確ではない。

冒頭の旋律では、右手が同型のモチーフを反復しながら音域を次第に上昇させていく構造を取っている。

²³ "Sonatine" pour piano. Par M. Delage [Musique manuscrite], Bibliothèque nationale de France, département Musique, (ark:/12148/cb42942288d).

譜例 2: 『M. ドラージュによるピアノのためのソナチネ²⁴』(mm.1-4)

第14小節以降、旋律は模倣を伴うようになり、対位的な性格を帯びてくる。第31小節では一時的に調性感が確立されるものの、その直後には調性の不明瞭な和音の密集部へと移行する。

譜例 3: 『M. ドラージュによるピアノのためのソナチネ』(mm. 14-17)



その後、左手は冒頭と同様の半音階的下行を繰り返し、第72小節で再現部に入る。しかし、曲は第82小節で途切れている。すなわち、再現部以降が完全には書き進められず、未完のまま残されたことが確認できる。

『モーリス・ドラージュの初期作品、ピアノのためのスケッチ²⁵』と題された史料は、全3ページから成る。その第1ページは3/4拍子で、調号にはフラットが4つ付されており、7小節と不完全な1小節が記されたスケッチである。旋律には、『M. ドラージュによるピアノのためのソナチネ』と同様に半音階的進行が多用され、明確な調性は感じられない。両手ともに和音を四分音符で刻む中に、三連符が挿入されている点が特徴的である。

譜例 4: 『モーリス・ドラージュの初期作品、ピアノのためのスケッチ』(mm. 1-4)



²⁴ 楽譜は、筆者が原史料に基づいて書き起こしたものである。

²⁵ *Composition de jeunesse de Maurice Delage. Esquisse pour piano* [Musique manuscrite], Bibliothèque nationale de France, département Musique, (ark:/12148/cb429422694).

第2ページには、和声課題が2行（バス課題として、ハ長調とト長調が各1行ずつ）記されており、その下に3小節分の旋律が書き加えられている。また、欄外には筆算とみられる書き込みも確認される。第3ページは一見白紙であるが、別のスケッチが記されている。拍子は第1ページと同様に3/4拍子、調号もフラット4つで一致しているが、音楽的内容はまったく異なる。ピアノ伴奏は16小節にわたって記されている一方で、独奏楽器の旋律はわずか4小節分しかなく、全体像の把握は困難である。伴奏部分は他のスケッチと同様に半音階進行を主体とし、調性感は希薄であるが、Es音を中心とする傾向がみられる。

『M. ドラージュの作品、モーリス・ラヴェルによる校訂。ピアノのための習作（スケッチ）？²⁶』については、BnFの該当ページに以下の説明が添えられている。「タイトルはR. ル・マスルが作成した表紙に基づいて復元されたものであり、ラヴェルによる鉛筆での訂正は別紙に記され、添付されている」とある。表紙の前には、「モーリス・ドラージュの作品―モーリス・ラヴェルによる校訂」とタイプライターで記された紙片が挟まれている。楽譜にはドラージュの筆跡による記譜がみられ、ラヴェルの加筆としては主題の書き直しや左手部分の音の追加が確認できる。楽譜は変ホ長調で記されており、三段譜で構成されている。最上段と下の二段に分かれており、最上段は独奏楽器を想定したものとみられる。なお、最上段の旋律は単旋律ではなく和音を伴っている。全体として記譜は断片的であり、消去の跡やへ音記号の試し書きも確認されることから、本史料は構想段階の初期にあたるスケッチと判断される²⁷。

『モーリス・ドラージュによるピアノのための作曲課題』と記された史料には、以下の説明が付されている。「タイトルは、R. ル・マスルによって表紙から復元されたもの。鉛筆書き。モーリス・ラヴェル自身による鉛筆での訂正あり。M. ドラージュ自身の手によるスケッチが1ページ添付されている」。最初のページには「Sonatine (ソナチネ)」と記されており、音楽的内容を確認したところ、「"Sonatine" pour piano. Par M. Delage (M. ドラージュによるピアノのための《ソナチネ》)」と一致していた。

『弦楽四重奏曲、13小節のスケッチ²⁸』は、ル・マスルによって付与された題名であり、鉛筆で記された史料である。その裏面には、モーリス・ドラージュ自身の筆跡による、弦楽四重奏曲第4楽章の冒頭部分が確認される。

²⁶ *Composition de M. Delage, corrigée par Maurice Ravel. Esquisse pour piano?* [Musique manuscrite], Bibliothèque nationale de France, département Musique, (ark:/12148/cb42942268s).

²⁷ *Devoir de composition de M. Delage. Pour piano* [Musique manuscrite], Bibliothèque nationale de France, département Musique, (ark:/12148/cb42942267f).

²⁸ *Quatuor à cordes, 13 mesures d'esquisse, par Maurice Ravel* [Musique manuscrite], Bibliothèque nationale de France, département Musique, (ark:/12148/cb43224261c).

また、『メヌエット 嬰ハ短調（ラヴェル）²⁹』は、モーリス・ラヴェル自身によって記された自筆譜であり、著者名と題名はいずれも表紙に記されたル・マスの指示に基づき復元されたものである。このメヌエットは1ページに収められているが、その裏面には、ドラージュによるピアノのためのスケッチが記されている。

これらの史料は、ドラージュが初期作品に着手する以前の時期に位置づけられる、極めて貴重な一次史料である。筆者の確認によれば、『M. ドラージュによるピアノのためのソナチネ』を除くすべての作品は、いずれも走り書きに近い性格を有しており、構想段階の断片にとどまっている。そのため、研究対象としての位置づけは補助的なものに限られる。

なお、これらに加えて、ドラージュによる編曲作品が4点確認されている。

表 10：ドラージュによる編曲作品（BnF 所蔵）

BnF資料番号	出版年	作品名
FOL-VM12 A-154, VMA-3157 (1)	1910年	《弦楽四重奏曲 へ長調 <i>Quatuors Cordes Fa majeur</i> 》（ラヴェル）
VMG-7326, G-11344	1957年	《ヘブライの歌 <i>Chanson hébraïque</i> 》（ラヴェル）

表 11：ドラージュによる編曲作品（BnF 所蔵以外）

作品名	情報元
《ビリティスの歌 <i>Chansons de Bilitis</i> 》（ドビュッシー）	アンリ・ルモワヌ社 ウェブサイト
《クレマン・マロの2つのエピグラム <i>Épigrammes de Clément Marot</i> 》（ラヴェル）	CNSMDP

このうちラヴェル作曲《弦楽四重奏曲 へ長調 *Quatuor à cordes en fa majeur*》および《民謡集 *Chants populaires*》第4曲〈ヘブライの歌 *Chanson hébraïque*〉の2作は、いずれもデュラン社から出版された。

なお、筆者が確認した編曲作品のうち、次の2点は例外的に他機関のデータベースによるものである。ドビュッシー作曲《ビリティスの歌 *Chansons de Bilitis*》については、作曲家自身の管弦楽版とは別に、ドラージュによる管弦楽編曲（1926年頃）が確認されている。出版の正確な時期は確認できないものの、楽譜出版社アンリ・ルモワヌ社のウェブサイトには、対応 ISMN が登録されている。しかし、現況は絶版とされる³⁰。また、ラヴェ

²⁹ *Maurice Ravel... Quatuor pour 2 violons, alto et violoncelle. Nouvelle édition, revue par l'auteur* [Musique imprimée], Bibliothèque nationale de France, département Musique, (ark:/12148/cb445102835).

³⁰ 同サイトの情報によれば、ジョベール社から出版されている（ただし出版年の記載はない）。

ル作曲《クレマン・マロの2つのエピグラム *Deux épigrammes de Clément Marot*》については、パリ国立高等音楽・舞踊学校（CNSMDP）のデータベースに「モーリス・ドラージュによるオーケストラ伴奏版の存在」が記載されているが、現時点で楽譜の所在は未確認である。

3.1.2. 作品（曲）名の追加調査まとめ

新たに作成した作品名リストには、出版・未出版、完成・未完成の区別なく、今回の調査で確認されたすべての作品を含めた。作品名の表記については、以下の基準を採用した。まず、出版されている作品は、出版譜（初版）に記載された名称を用いる。未出版作品であっても、Delage（1955）の目録に掲載されている場合は、その表記を踏襲した。Delage（1955）に記載のない作品については、他の目録（Gordon、Thomas、Rodriguez）のうち、最も早期に提示された名称を基準とする。ただし、自筆譜、演奏記録、SACEM登録などの一次資料が存在する場合は、これを優先した。

3.2. 初演に関する情報（時期・場所）の追加調査まとめ

初演情報の再調査は、先行研究に加え、「RetroNews」を用いた新聞記事検索や演奏会プログラム、放送記録などの一次資料を参照し、それらを相互に照合する方法で実施した。これにより、ドラージュの作品がどのような場で演奏されてきたかを明確に示すことができた。

初期の演奏機会の多くは独立音楽協会（S.M.I.）によって提供されており、これはパリの芸術家グループ「アパッシュ」との交流や師ラヴェルとの関係が大きく影響していると考えられる。1920年代の作品に関しては状況の変化がみられ、とりわけ1925年および1926年の「現代歌曲演奏会」では、演奏された5曲すべてがジャーン・バトリ（Jane Bathori, 1877-1970）によって歌われている。当時の人気歌手に作品が取り上げられたことは、作曲家としての飛躍を示す重要な事例である。

また、1930年代以降の初演作品に関しては、「Radio National（国営ラジオ）」での演奏が多く記録されている。1930年代は、1920年代初頭から相次いだ放送局の開局を背景にフランスのラジオ文化が隆盛を迎えた時期であり、ドラージュ作品の演奏の場もこの文化的状況を如実に反映している。演奏記録を整理する際には、国営ラジオによる放送であったのか、あるいは当該オーケストラによる実演であったのかを厳密に区別する必要がある。しかし、この点の解明には一次資料の詳細な精査が不可欠であり、本稿執筆時点では十分な確認に至っていない。したがって、本稿では便宜的に他の目録と同様に「国営ラジオによる」と表記し、詳細な区別は今後の研究課題とする。

また、検討の結果、新たな課題も浮上した。当時のフランス歌曲には、オーケストラ伴奏版とピアノ伴奏版の双方が作曲されることがしばしばみられ、この傾向はドラージュの作品

にも認められる。しかし、初演情報の確認にあたっては「どちらの編成で演奏されたのか」を判別することが困難であった。例えば、《4つのヒンドゥーの詩》や《7つの俳諧》については、複数の批評記事に演奏記録がみられるものの、具体的にどちらの版で演奏されたか明示されていない場合が多い。演奏会の内容から推察すると室内楽伴奏による演奏と考えられ、ピアノ伴奏での演奏記録は確認されていない。

また、《子ども *L'Enfant*》および《サムライの死に寄せて *In morte di un Samourai*》(ピアノ伴奏)については、3つの主要な目録すべてに初演年と場所の記載があるものの、互いに一致していない。これらの確認のため「RetroNews」を用いた調査を行ったが、そもそも演奏記録自体を確認できなかった。したがって、これらの作品に関しては、引き続き詳細な資料調査が必要である。

3.3. 出版に関する情報(時期・出版社)の追加調査まとめ

筆者が改めて出版年および出版社を精査し、その成果を整理した結果、従来の目録記録に対していくつかの訂正が加えられた。第一に、従来の先行研究で「未出版」とされていた作品の多くが、実際には何らかの形で出版または雑誌に掲載されていたことが確認された。第二に、出版年や掲載状況についても不正確な記録が存在した。たとえば、《3つのメロディ》は1914年にデュラン社から出版されたとされてきたが、今回の調査により、第3曲〈モネルの書より〉のみがそれ以前に『*Album Musica*』第93号(1910年6月)に先行掲載されていたことが明らかになった。第三に、ピアノ伴奏版とオーケストラ伴奏版が併存する作品について、従来の目録では両者の区別が十分に明記されていないものが多かったため、本研究では両版を明確に区別して記載した。

おわりに

今回対象とした Delage (1955)、Gordon (1991, 2009)、Thomas (1995)、Rodriguez (2001) の5つの目録はいずれもドラージュの創作活動を広く網羅しているが、その編纂方針や収録情報には相違が認められる。Delage (1955) は作曲者本人の意向が反映されていると考えられ、伴奏編成の分類が詳細に行われている点で特に注目される。Gordon (1991) は Delage (1955) を基盤とし、誤記や年代を補正している点で有用な資料である。Thomas (1995) は収録数が最多で、出版年を唯一明記していることから最も充実した目録といえるが、断定的な誤情報も含まれるため利用には注意が必要である。Rodriguez (2001) の目録は信頼性にやや限界があるものの、本文とあわせて用いれば詳細な情報源となる。Gordon (2009) は声楽作品に特化し未出版作品を補足している点で興味深いが、これらの実在性については今後の検証が求められる。

本稿の再検証の結果、作品名は出版譜や一次資料を基準に整理され、今回確認された全作品を網羅した。初演情報に関しては記録の不一致や誤記が修正され、出版情報では従来「未出版」とされた作品の多くが雑誌掲載や別形態で刊行されていたことが判明した。また、伴奏編成の版別も明確に区別した。

以上の検証から、ドラージュ作品研究には複数の目録の相互参照と一次資料による補正が不可欠であることが示された。本稿はその過程に位置づけられる報告であり、今後も目録再編に向けた調査の深化が期待される。こうした作業を通じて、ドラージュの全作品を単一の目録として再編成することが可能となり、それは単なるリスト整備にとどまらず、近代フランス音楽史における彼の位置づけを再定義する試みへと繋げたい。

参考文献一覧

- Delage, Maurice. *Catalogue des œuvres de Maurice Delage*. Paris: Delage, Maurice, 1955.
- Duchesneau, Michel, *Le Rôle de la Société Nationale Et de la Société Musicale Indépendante Dans la Création Musicale À Paris de 1909 À 1935*, 1994
- Gordon, Barbara. "Maurice Delage: A stylistic analysis of selected vocal works." PhD Thesis, New York University, 1991. ProQuest (303932341).
- Gordon, Barbara. "Discovering Maurice Delage." *Journal of singing*; Jacksonville, 65 no. 3, Jan/Feb 2009.
- Rodriguez, Philippe. *Maurice Delage, ou, La solitude de l'artisan*. (Drize-Troinex: Papillon, 2001).
- Thomas, Cinda Lou. "Three representative works of Maurice Delage: A study of style and exotic influence." DMA diss., University of Georgia, 1995. ProQuest (304200714).

閲覧サイト

- Bibliothèque nationale de France - Catalogue général <https://catalogue.bnffr/index.do> (2025年8月27日最終閲覧)
- RetroNews - Le site de presse de Bibliothèque nationale de France <https://www.retronews.fr/> (2025年8月27日最終閲覧)

参考記事 (RetroNews)

参考記事については、文字数の制約上、各記事が掲載されている雑誌のタイトルのみを記載する(括弧内の数字は、当該雑誌から参照した記事数を示す)。なお、以下の一覧はアルファベット順に配列した。

Aux Écoutes (1)、*Comœdia* (12)、*Excelsior* (7)、*Gil Blas* (1)、*Journal des débats politiques et littéraires* (1)、*L'Action* (1)、*L'Art musical* (1)、*L'Aube* (1)、*L'Éclair* (3)、*L'Écho de Paris* (3)、*L'État national* (2)、*L'Ère nouvelle* (2)、*L'Humanité* (2)、*L'Homme libre* (1)、*L'Intransigeant* (1)、*La France* (1)、*La Lanterne* (1)、*La Liberté* (4)、*La Patrie* (2)、*La Phalange* (1)、*La République française* (4)、*La Revue mondiale* (1)、*La Revue musicale* (1)、*Le Courrier musical* (2)、*Le Figaro* (5)、*Le Journal* (1)、*Le Jour* (1)、*Le Ménestrel* (9)、*Le Monde artiste illustré* (1)、*Le Monde musical* (2)、*Le Petit Journal* (1)、*Le Petit Marseillais* (1)、*Le Petit Parisien* (3)、*Le Temps* (5)、*Mercur de France* (3)、*Paris Soir* (2)、*Revue française de musique* (1)、*Revue musicale de Lyon* (1)、*Revue musicale S.I.M.* (1)、*Revista musical de Bilbao* (2)、*Rivarol* (1)

16 世紀アントワープにおける饗宴と絵画展示 —— ピーテル・ブリューゲル 1 世の寓意画 ——

Convivium and the Decoration of Paintings in the 16th Century Antwerp: The Allegorical Paintings of Pieter Bruegel the Elder

堀内秀平

HORIUCHI, Shuhei

はじめに

ネーデルラント美術の巨匠、ピーテル・ブリューゲル 1 世 (Pieter Bruegel the Elder, 1525/30-1569, 以下ブリューゲル) が活躍した 16 世紀のアントワープは、「多様化」のさなかにあった。国際的商業都市としてめざましく発展し、さまざまな人種の人々が行きかう一方で、信仰においてはローマ・カトリック教会による異端審問や弾圧を招き、宗教観の分裂を引き起こし、混沌の時代を生んだ。

そのなかでブリューゲルはネーデルラントの農民、農村、アントワープやブリュッセルの風景といった題材を、鋭い観察眼をもってつぶさに描き出した。そして、その作品の中には作品を鑑賞し得る市民、農民、権力者たちに向けて何らかの寓意性が隠されていることが少なくない。一方で画家は、15 世紀の先人たちのように祭壇画を制作することはなかった¹。加えて、彼は聖書などの主題であっても、その表現や内容をアントワープやブリュッセルの人々に相応しい形に翻案し、先人たちのように伝統的な宗教図像をそのまま描くことは少ない。あらゆる宗教的テーマはブリューゲルの手によって独自の寓意へと変貌するのである。

このような特徴から、先行研究において彼は 16 世紀の神学者デジデリウス・エラスムス (Desiderius Erasmus, 1466 頃 -1536) にしばしば結びつけられてきた。エラスムスはカトリックに忠実でありながらも、教会の道具・像・儀式に依拠して、形式的に行われる信仰実践の在り方を批判した。しかし、あくまで中道を貫き、「異端化」することもなかった²。このような点で、「信仰の道具」たる祭壇画を制作することなく、宗教的テーマをオリジナリティの高いメッセージに置き換えるブリューゲルが、その複合的な宗教観をもつ根源となった可能性が指摘できる。

そして、もうひとりブリューゲルを語るうえで欠かせないのが、彼の最も重要なパトロン

ともいふべき、16世紀アントワープの徴税人で商人のニクラース・ヨンゲリク（Nicolaes Jonghelinck, 1517-1570）である。彼はアントワープ郊外に建てられた自らの別荘に、ブリューゲルの重要な作品を数点展示していた。本稿では、当時のアントワープの、文化・宗教の両面における急激な多様化と、それに伴う信仰実践の変化、そして絵画装飾や鑑賞方法の変化のなかで、このヨンゲリクの別荘に展示されたブリューゲル作品の意味について考える。そして、同時代特有の文化のなかで扱われた、ブリューゲルならではの宗教画や風景画、農民画のメッセージ性と、エラスムスの著作とを結びつけ、その表現や思想によって形作られる精神的なメッセージについて論じる。

1章 16世紀のアントワープ

1-1. 信仰実践と絵画装飾の変容

アントワープの多様化は、宗教的には信仰実践の場所を変化させ、教会に多くの人が集うパブリックなスタイルから、それぞれの家庭内で家族や友人とともに行われるものへと変容していった³。そしてそれは、同時期の「絵画の大衆化」にも結びつく。その証拠に、アントワープ公文書館に残っている16世紀当時の市民たちの家計簿によれば、世紀を通して個人が家庭内装飾として購入する絵画の数が大きく増加している⁴。また、それらが飾られる空間は、かつては上階の私室などのプライベートな空間が主であったが、1階および半地下室の、来客をもてなすための比較的広い部屋に移ったことも分かっている⁵。信仰の多様化に合わせて、特に「異端者」として罰せられる恐れがあったプロテスタントの市民および外国人たちは、家庭内のセミパブリックな空間では伝統的な主題の作品のみを展示し、より秘匿性の強い私室や書斎だけに本当の信仰になぞらえた作品を展示していた形跡もある⁶。このように、絵画の収集とそれをういた信仰実践は15世紀までは貴族独自の文化であったが、より広い社会層へと普及していった。

このような変容に最も影響を受けた層のひとつが、ニクラース・ヨンゲリクのような中産階級である。「絵画の所有」そのものが階級間の差を特徴づけていた時代から、絵画が大衆的なものになったため、所有しているかどうかよりも、より優れたコレクションを持つことがその人物の評価基準となったのである⁷。特に商人は、ビジネス上の話をその顧客と前述のような半地下室などで行うことが多く、その空間における絵画装飾は商人としてのその人物の信頼度を測るものにもなっていた⁸。「磔刑」や「この人を見よ」などの伝統的な図像はその人物が（真にそうであるかはともかく）「異端」ではないことの証明となり、「慈愛」などの擬人像が描かれた作品などは誠実に仕事をするというある種の「所信表明」としても用いられた⁹。また、絵画とはやや性質が異なるが、同時代のアントワープの地図製作者アブラハム・オルテリウス（Abraham Ortelius, 1527-1598）の地図を飾り、商売を手掛ける

範囲の広さをアピールするものとして用いていたと思われる記録もある¹⁰。家庭内に普及した絵画は、ただの贅沢品ではなく、また、ただ祈るためのものでもなく、その作品たちの前で繰り返される行為の内容と深く関連付けられたのである。

1-2. 別荘文化と饗宴

アントワープの中産階級の人物たちの間では、初期ルネサンスの人文主義者、レオン・バッティスタ・アルベルティ (Leon Battista Alberti, 1404-1472) の『建築論』の影響で郊外に別荘をもつことが流行した¹¹。不動産業者で「アントワープで最も裕福な人物」とも言われたギルベルト・ファン・スホーンベケ (Gilbert van Schoonbeke, 1519-1556) はアントワープの南の郊外にマルクフラーフェレイ通りを造り、通りに面した土地を富裕層向けの別荘地として開拓した¹²。この「富裕層」の多くは商人であり、アントワープの伝統的なビジネス街であるグローテ・マルクトの近くこの別荘地が作られたのは、商人にとってのアクセスを考えてのことだろうか。こうした別荘は、単に保養や娯楽のために用いられるものではなく、別荘の周辺に畑をもち、農業を行うことで、農民の生活を体験する目的のほか、他の市民の自宅のように室内に宗教的な美術作品を配置し、都市の喧騒から離れた空間で瞑想を行うためのものであった¹³。

別荘について、当時の人文主義者たちは、食堂を最も重んじ、それを中心に他の部屋が隣接する設計とし、なるべく多くの客室を用意することを理想とした¹⁴。その目的は、古代やルネサンス期の「饗宴 (convivium)」を模倣することにあつたと思われる。16世紀、ネーデルラントの中産・上流階級の間では、自宅や別荘の大きな食堂で行われる饗宴によって仕事相手や友人たち、そして時には政府の要人たちとの交流を生み、絆を深める文化が存在した¹⁵。「饗宴」という言葉は、ルネサンス期においては晩餐会において人文主義者たちが国際的な繋がりを作り、意見交換をすることを指したが、同時代特有の宗教観の多様化、信仰実践の変化、そしてセミパブリックな空間の絵画装飾の普及によって、饗宴は食堂に展示された宗教的イメージをもとに、聖書の理解などについて語らう場となったのである¹⁶。

実際、エラスムスは、著書『対話集』(1526)の中で、架空の登場人物たちが主催者の邸宅に集まり、食堂や庭などで周囲のイメージや花々などに言及しつつ、それをきっかけとして徐々に個人間の宗教観の違いを語らう会へと発展していくさまを表現しているうえに、『敬虔な午餐会』『物語の豊富な食事会』『酒の入らない饗宴』という3つの饗宴に関する対話を収録している¹⁷。一般市民の家庭内における絵画装飾が、その空間で行われる行為と結びつけられたものであるように、富裕層の人物たちもまた、食堂に飾られた絵画の前でその主題から連想されるテーマで語らうの場を持ったのである。

1-3. 徴税人ニクラス・ヨンゲリンク

アントワープの中産階級、特に実業家を語る時にその代表となりえるのが、ニクラス・ヨンゲリンクであるが、ブリューゲルがそうであるように、彼自身に関する資料は極めて乏しい。彼はブラバント地方の造幣局長の息子として、3兄弟の真ん中に生まれ、兄トマスと弟ジャック（彫刻家としても活躍した）は造幣局を継いだが、本人はそうしなかった¹⁸。

1554年、ヨンゲリンクは兄トマスから前述のマルクフラーフェレイ通り沿いの土地に購入した別荘を譲り受けた¹⁹。アントワープの自宅兼事務所からは約3キロ離れており、ヨンゲリンクは休暇の度に別荘に通っていた²⁰。それはやはり、饗宴の開催のためだろうか。別荘内には、当時の流行に沿った大きな食堂と、絵画作品を展示するための「サロン」ともいべき部屋があったことが分かっている²¹。しかし、1585年のアントワープ包囲の際にこの地区一帯は焼き払われ、その際にヨンゲリンクの別荘も破壊されてしまった²²。それでも、彼がどのような作品を別荘内に展示していたかは、一部を記録から確認することができる。ヨンゲリンクが1566年にアントワープ当局に提出した別荘のコレクションのリストには、「16点のブリューゲルの絵、すなわちバベルの塔、十字架を担うキリスト、12ヶ月図、そしてさらにその他すべてのもの」と書かれていた²³。それぞれ《バベルの塔》(1563)【図1】、《十字架を担うキリスト》(1564)【図2】、そして「12ヶ月図」とは連作で5枚が現存する《季節画》(1565)【図8～12】のシリーズのことであろう。しかし、「どこに何が展示されていたか」は依然として不明のままである。そのため、リストの「その他すべてのもの」がどのようなものであったのか、現存するいずれかのブリューゲル作品か否か、ということが判断できない。次章ではまず、ヨンゲリンクの先例ともいべきエラスムスの理想的な饗宴と、アントワープの要人による食堂の絵画装飾を見る。

2章 アントワープにおける饗宴

2-1. エラスムスの理想

「饗宴」の伝統はプラトンの著作にまで遡ることができるが、16世紀アントワープ周辺のそれが、明らかにエラスムスの影響によって形成された新たな文化であることは、ネーデルラントにおける饗宴の発端ともいべきヒエロニムス・ファン・ブスレーデン（Hieronymus van Busleyden, 1470頃-1517）がエラスムスと親密な仲であり、よく彼を自身の邸宅での饗宴に招待していたことから明らかである²⁴。エラスムスは饗宴を、孤独で部屋にこもりがちな学者たちが弁舌を振るい、その語りの技術が衰えないようにするためのものと考えていたようで、豪華な食事や人間関係の構築、知的で精神的な会話といった本来の目的のみならず、語らうという行為自体に重きを置いていた²⁵。いわば言葉で通じ合うことそのものが饗宴の醍醐味であり、高階秀爾氏がエラスムスの伝記において、彼について「論争すら心を

通じ合う手段」と考えていた、と述べていることにも符合する²⁶。同時期に中産階級の人文主義者たちに広く普及した絵画は、古代からの知的な伝統に思いを馳せるものでも確かにあっただろうが、「寓意の黄金期」たる当時のネーデルラントの美術史的背景を鑑みれば、エラスムスの好んだ、時に面白おかしい会話の糸口として存在していたと推測できる。

ヨンゲリンクがどの程度エラスムスに影響を受けていたかは定かではないが、『敬虔な午餐会』において饗宴の架空の主催者であるエウセビウスとその友人ティモテウスが、商人や金融業者などは「すすけた都会」を好むが、田園地帯で暮らすべきである、という会話をしている²⁷ことから、アントワープの郊外に別荘を持ったヨンゲリンクのような中産階級の人々が多少なりともエラスムスの理想を追いかけていたであろうことが想像できる。エウセビウスたちは食堂に展示された「最後の晩餐」など食事を想起させる絵画とともに語らいつつ楽しむさまが描写されている²⁸。エラスムスの饗宴の実体験のなかで感じられた理想的な瞬間が『敬虔な午餐会』のような食事に関わる著作にあらわれているのか、エラスムスの描いた饗宴の姿が理想的な食事の形として人文主義者たちに普及していったのか、因果は不明瞭であるにせよ、エラスムスの影響は当時のアントワープのなかに、通奏低音的に漂っていたものなのではないだろうか。

2-2. ブスレーデンの饗宴

ヨンゲリンク以前、すなわちエラスムスと直接交流を持たなかった最後の世代でもある、ハプスブルク家出身の人文主義者で、ネーデルラントの評議会にて評議員も務めたヒエロニムス・ファン・ブスレーデンの邸宅はアントワープの南方20kmの場所にあり、そこで行われた饗宴は、『敬虔な午餐会』で描かれたものに最も近いものであったと想像される。エウセビウスたちが「最後の晩餐」などをもとに自らの食事を精神的なものとして「同化」させているように、ブスレーデンの食堂にはギリシャ神話においてオリュンポス山の饗宴に招待されたタンタロスの食事の場面や、旧約聖書のエピソード「ベルシャザールの饗宴」といった、食事に関する場面が強調された絵画が最も大きく展示されていた²⁹。ブスレーデンは古代語の研究機関で、現在は大学となっている“Collegium Trilingue”を晩年に創設しており、プラトンやプルタルコスといった古代の饗宴の模倣に対する意欲が高かったと思われる。実際、ブスレーデンが所有する絵画はほとんどが古代からの伝統に根ざしたものであったという³⁰。16世紀アントワープの饗宴を研究しているクラウディア・ゴールドスタインはこのブスレーデンの饗宴を、16世紀半ば以降の中産階級によるその「華麗なる先例」としており、ヨンゲリンクたちはこのスタイルを緩やかながら模倣したと主張している³¹。しかし、このブスレーデンの食堂はヨンゲリンクたちが食事を共にしたような大きなものではなく、より親密な相手だけが入れる小さな部屋にあった³²点や、食事そのものを絵画によって知的で精神的なものへと高めるための装飾、より「古代色」の強い作品収集などは、後述する

16世紀半ばの別の饗宴の例やヨンゲリンクのそれとは特徴を異にするものである。アントワープの多様化に伴い、かつて古代ヤルネサンスの模倣であった饗宴は、徐々にその形を変えていくこととなる。

2-3. ノワロの饗宴

アントワープで造幣局長を務め、ヨンゲリンクと親交も深かったヤン・ノワロ (Jan Noiroot, 生没年不詳) の自宅は造幣局内にあったという³³。ゴールドスタインいわく、その食堂にはブリューゲルの《農民の婚宴》(1568頃)【図3】や《農民の踊り》(1568頃)【図4】といった、画家の最も有名な作品ともいべき絵画が飾られていた³⁴。

絵画のほかにも、ノワロはクリスタル製のグラスや鏡、金で飾られた水差しなど豪華な道具を食事に用いていた³⁵ようで、饗宴においてゲストをもてなす姿勢が見てとれる。自宅が造幣局の中にあるノワロにとって、職場の関係者を招いて食事をする機会は多かっただろう。ノワロの実際の目的がどのようなものであったにせよ、飾られた巨匠の傑作や豪華な食事道具は、造幣局長としての威厳が、その部下たちに遺憾なく発揮される食堂を演出したに違いない。

ただし、この「演出」は、ノワロにとって精一杯の「虚勢」であったことは留意しておかなければならない。ノワロは浪費家で有名であり、彼の妻は常に援助を必要としていたが、ノワロは耳を貸さなかったようで、1572年、ついにノワロは破産を宣言し家族を置いて逃亡した³⁶。その直前、多額の資金を必要としたノワロの妻が高級なテーブルクロスを売却した時でさえ、ブリューゲルの作品は残されていたようである³⁷。ゴールドスタインはこのことについて、ノワロは最後まで体裁を保ち続けたかったがために、ノワロ家が「すべて上手くいっている」ことの幻想を残しておいたのではないかと推測している³⁸。豪華な食器よりも、有名な巨匠の絵画こそが、所有者の立場と信頼を決定づけたのだ。

このノワロの自宅に飾られたブリューゲルの絵画は、言ってしまうと単に農民を描いたものであり、ブスレーデンのような古代の伝統や人文主義的理想に根ざした高度な食事会の実現といった目的は感じられない。《農民の婚宴》の食事の場面は饗宴とリンクするが、単に「賑やかな食事」の演出に寄与するであろうというだけで、寓意を用いているわけでもなさそうである。

ノワロの見栄は、結局のところやはり虚勢にすぎず、大事にとっておいたブリューゲル作品が、皮肉にも、最後まで巨匠の権威に頼ろうとした悲哀を際立てている。富と立場を持つがゆえに傲慢な人間と化し、没落していくさまはブリューゲルも描いた《バベルの塔》の教訓そのものであり、ノワロを近くで見えてきたヨンゲリンクにとってかなり差し迫ったテーマであったと考える。次章ではその《バベルの塔》を含め、ヨンゲリンクの別荘や饗宴とブリューゲル作品の関わりについて論じる。

3章 ヨンゲリンクの別荘とブリューゲル

3-1. 《バベルの塔》(1563)

これまで述べてきた背景を踏まえ、ヨンゲリンクの別荘に飾られたブリューゲル作品、すなわち《バベルの塔》(1563)【図1】、《十字架を担うキリスト》(1564)【図2】、連作《季節画》【図8～12】について、詳しく見ていく。

まず《バベルの塔》は、帆船の行き交う港のある都市の中に、円錐形で約8層の巨大な塔が建設されている様子を描いた作品である。原典、つまり旧約聖書『創世記』の「バベルの塔」物語は、元々共通の言語を使用していた人類が協力して天まで届く高い塔を建てようとした結果、神の怒りに触れて言語をバラバラにされ全地に散らされてしまう、という内容であるが、そのような原初の人類の様子とは異なり、ブリューゲルによって大きく翻案されている。まず、建設に用いられているクレーンは、貿易都市として発展したアントワープの大使館、市庁舎等の建設ラッシュの中で用いられた最新式のもを正確に再現している³⁹。また、塔の周辺に広がる都市風景はアントワープやブリュッセルを思わせ、城壁を越えて奥に広がる風景は「低地」たるネーデルラントを表現しているようにも思われる。この、明らかに同時代的な風景の中で、目を引くのは前景にて跪く労働者に何やら偉そうに命令している様子の人物【図5】である。これは恐らく、古代ローマの著述家フラウィウス・ヨセフス(Flavius Josephus, 37-100頃)の『ユダヤ古代誌I』(94頃)版の「バベルの塔」物語に登場するノアの子孫、ニムロデだろう⁴⁰。ニムロデは「ノアの方舟」物語において大洪水を起こした神への復讐として、挑戦のために「バベルの塔」の建設を命じ、その性格は鉄面皮で傲慢と表現されている⁴¹。『創世記』においても、人類の傲慢と不遜を戒める物語として読まれる「バベルの塔」だが、『ユダヤ古代誌』においてはより直接的に傲慢が表され、その戒めとしての性格が強まっている。

ニムロデという存在は、ドイツの人文主義者セバステリアン・ブランツ(Sebastian Brant, 1458-1521)による風刺文学で、ネーデルラントでも広く読まれたベストセラーの『阿呆船』(1494)や、同時代の宗教的言説の中に「身勝手な権力者」として登場し⁴²、作品の風刺的な寓意・教訓を一手に引き受ける存在としてブリューゲルが登場させたであろうことは容易に推測できる。画中のニムロデは従臣を引き連れ、労働者を跪かせており、権力を振りかざして無理な労働を強いている。そうして辛い労苦の上で塔が建てられているので、塔は一部崩壊し、そもそも、積み上げられていくはずの塔が上層と下層で同時に作業をしているため、その状態はかなり不安定である。さらに、塔の影が、この後の運命を暗示するかのよう、右奥の都市部分を覆っている。小さな建造物が並ぶ都市の中に、あまりに不釣り合いに大きな塔があり、ニムロデが権力の誇示のために造らせたことを想像させる。しかし、鑑賞者は、傲慢なニムロデの姿と崩壊している塔を見て、それがいかに傲慢で、失敗が待つ

のみであるかを、ありありと突き付けられるのである。

繁栄による建設ラッシュに沸くアントワープでこのような作品を制作する目的は、「有名になろう」と宣言し塔を建てたが罰せられるという、『創世記』における人類の傲慢に対する戒めを、同時代の都市の命運を握る重要人物たちに示唆することに他ならないだろう。ヨンゲリンクの仕事相手や友人が列挙されたリストに載っている人物は、つまりこの作品が展示されたヨンゲリンクの別荘に招かれるような人物は、ヨンゲリンク同様アントワープで大きな成功を手にした中産階級・上流階級の人物や、アントワープ市の要人であった⁴³。

客人たちを招く目的は、やはり饗宴が主であっただろう。「バベルの塔」という主題そのものは聖書の物語であるため、宗教画のようにも思えるが、その表現が明らかにアントワープの馴染み深い風景に置き換えられていたり、広くネーデルラントで読まれた文学にも登場するニムロデという寓意的な図像がいたりするように、その内容はある程度物語を重視しつつも世俗化されていて、直接の祈りに用いられるものではなさそうである。加えて、この作品は（後に述べるブリューゲル作品についても同様のことが言えるが）、114 × 155cm とやや大きめである。このことから、一対一で向き合うための私室や、宗教的図像を並べる部屋ではなく、より大勢が集う場所、すなわち饗宴の行われる食堂にあった可能性が提示できる⁴⁴。饗宴において、聖書の話、つまりバベルの塔を入口として、文学や人文主義者の言説の中で広く傲慢の象徴として有名であったニムロデについて、そして画中でそのニムロデが愚かな失敗をするアントワープと思われる都市について……といったように徐々に話題が展開していくことを仮定した時、ブリューゲルの作品はいずれにも対応できる複合的な性質を持っている。

「ニムロデ」は誰か、つまり、ブリューゲルが批判もしくは風刺しようとした愚かで鉄面皮の権力者は誰かという問いについては、かつて異端審問および弾圧と専制的な政治を行ったフェリペ2世やアルバ公など、カトリックの反異端主義者たちが該当すると読まれることが多かった⁴⁵。しかし、ヨンゲリンクの別荘をフェリペが訪れたこと、前述のヨンゲリンクの友人や仕事相手のリストはブリューゲルのそれと共通の名前が多く挙げられていたことは無視できない⁴⁶。特にヨンゲリンクとブリューゲルが共通の人間関係を持っていたことは、ブリューゲルに付随する「農民画家」という呼び名からくる「弱者の味方、ローマ・カトリック教会をはじめとする権力者の敵」というイメージが誤りであることを示すものである。ブリューゲルが農民や農村、また彼らの営みを含む風景を詳細に観察していたこと自体は明らかだが、盲目的にそれを「農民の味方」として読むことは危険を孕む。フェリペと繋がりがあったヨンゲリンクのみならず、ポルトガルからの移民を「新教徒（代々のカトリック家系であるという証明ができないため強引に異端とみなされたキリスト教徒）」として激しく嫌悪したアントワース・ベルノ・ド・グランヴェル（Antoine Perrenot de Granvelle, 1517-1586）枢機卿もブリューゲルの重要なパトロンであった⁴⁷。そのため、ブリューゲルは敬虔なカト

リックであり、あからさまな教会やスペイン王たちの批判はできなかつたと考えるべきである。この場合、ニムロデは誰か、という問いに対して、一義的に解答することはできなくなるが、この性質こそ、ブリューゲルを寓意画家として捉えるときに重要となる。

ブリューゲルは晩年、複数の作品において、何を批判・風刺しているのか、どの立場に立っているのか曖昧だが、明らかに何らかの寓意を込めており、いくつもの意味が重なった「複合的な寓意」を持たせている⁴⁸。ブリューゲルの晩年、1568～69年頃は異端審問とそれによる理不尽な逮捕、処刑が激化し「ネーデルラント脱出」の機運が最も高まった時期と重なる。16世紀の画家で伝記作家のカーレル・ファン・マンデル（Karel van Mander, 1548-1606）が『画家列伝』（1604）の中のブリューゲルの伝記において、彼の作品は風刺が効きすぎていたために、没後にいくつかの作品を妻に焼却させた、と書いている⁴⁹ように、異端審問の目を逃れるために、あえて作品の寓意性を多義的に、曖昧にした可能性がある。ただ一つの明らかな風刺は、画家自身やその家族の身を脅かしかねなかつたのである。

反対に、この《バベルの塔》の時期のブリューゲルは、まだ「率直」な寓意画家であったと捉えることもできる。前景の明らかに尊大で目を引くニムロデと、不自然に巨大な塔の崩壊は、権力者の失敗を風刺しているようである。同時代のアントワープの都市の中に、突如として古代の王ニムロデが半ば強引に引用されている目的は、そのような寓意性を持たせるためであると思われる。しかし、そのニムロデが表すのがフェリペやアルバ公でないのならば誰か、という部分だけは依然として曖昧なのである。

「バベルの塔」の物語、特に「統一されていた言語の混乱が神による傲慢さへの罰である」という内容は、人文主義者や神学者たちが度々引用する、関心の高いテーマであった⁵⁰。当時のアントワープにとって、言語が皆異なることはもはや罰ではない。言語の違う人々が全地に散ったからこそ、アントワープの貿易が生まれ、交流が生まれ、繁栄へと繋がったからである。ブリューゲルやヨンゲリンクの親しい友人で、ヨンゲリンクの別荘にも頻繁に訪れたであろうアブラハム・オルテリウスは地図製作者だが、彼が世界地図の販売によって財を成すことができたのも、ヨンゲリンクの貿易品徴税がそうであるように「多様化」の恩恵を受けたからである。集まる人間の言語や国籍が違うほど、アントワープは商業や文化の観点では発展していくことができた。一方で、その多様化で財を成す起業家たちは、さらに欲をかってニムロデと化す危険性を孕んでいる。

ブラントの『阿呆船』において、ニムロデは15章「阿呆な計画のこと」に、「治水のためにニムロデは 難事難業考えず、バベルの町に空高く 塔の建設企てた。」という内容で登場する⁵¹。この『阿呆船』の表記だけを見れば、「阿呆な計画」というタイトルからも分かるように、本人の傲慢さそのものというよりも、無計画さの方が強調されている。このことは、尊大に指示を出しながらも背景の塔は明らかに失敗を予感させているブリューゲルの《バベルの塔》の滑稽さに、非常によく通じている。

また、無計画が故にその身を滅ぼす愚か者、という点で言えば、第2章で述べたヤン・ノワロの「没落」を想起させる。前述のように、ノワロのような造幣局関係者がその立場にあぐらをかいたことによる失態、見栄を張るために家計が苦しくなろうとも巨匠の絵画作品を最後まで手放さない虚栄心などは、造幣局長の息子で、家族ぐるみでノワロと付き合いがあったヨンゲリンクにとってはかなり差し迫ったものであっただろう。滑稽な王ニムロデを用いたブリューゲルによる風刺は、かつて考えられていたスペイン王や教会の要人のような大いなる存在への挑戦ではなく(それこそバベル的であるともいえる)、ヨンゲリンクにごく近い、より内省的で、同時期のアントワープの中産階級の人物たちにとって無視できないテーマとして描かれたのではないかと、私は考える。

この作品を、ヨンゲリンクの別荘の恐らく食堂で鑑賞したであろう人物たちは、みな等しくアントワープで何らかの分野で成功し、都市の内外に土地を持ち、ひいては都市の景観や在り方の行く末をある程度左右できた。彼らは皆、同時代のニムロデとなるか、あるいはノワロのように没落していくだけの資質を持ってしまっていた。ブリューゲルは、もしくは発注者であるヨンゲリンクは、彼らにこの作品を通じて「自分こそが次にニムロデとなるかもしれない」という危機感を芽生えさせる。そして、饗宴の中で、その結末を避けるにはどのように歩むべきかを語らせるための糸口としたのかもしれない。実際、エラスムスは性格や好み異なる人間の間で起こる混乱のたとえとして「バベルの塔」を引用した⁵²。その解決策は、こちらもエラスムスが説いたように、対話によって、意見交換によって、立場は違えど互いを理解することである。この作品に微かに残る曖昧さは、饗宴における議論の喚起という目的において重要な役割を果たすのである。

この、曖昧さによって、ひとつの作品から全員が異なる形で自分に当てはめ、個人的な経験を思い起こさせる仕掛けは、晩年のそれと意図は異なるものの、ブリューゲルが饗宴のために、この時点ですでに「複合的な寓意」を込めたことを示唆するものである。いくつにも重なった、さまざまな解釈を許す複合性が、多くの人の価値観が交錯する饗宴に強く合致していると、私は考える。ニムロデはこの作品においてただ傲慢な王なのではなく、多様化の功罪を象徴する存在ともいえるだろう。

3-2. 《十字架を担うキリスト》(1564)

この作品も、《バベルの塔》同様、伝統的な主題を同時代向けに翻案した性格が顕著である。左奥の低地から、弧を描いて右奥に向けて徐々に上っていく坂道を、キリストが十字架を担いで進んでいく。行き着くであろう先には群衆が円形に並んでいて、その中央では、十字架を埋める穴が掘られている様子が確認できる。この主題は15世紀からネーデルラントで流行したものであったが、広大なパノラマの中を群衆で埋め尽くし、主役のキリストを中央奥に埋没させてしまう表現は、同時期のマニエリスムの表現としてある程度は流行したも

の⁵³、これほど極端で風景的なものは特殊である。

さらに、キリストの発見を困難にしているのは、前景で一際目を引く「嘆きの聖母」と聖ヨハネ、マグダラのマリアたちである。画中のキリストや群衆にはみな、同時代風の服装が取り入れられているが、前景の聖母たちは15世紀ネーデルラントの宗教画らしい、つまり前時代的な服装と、祈念画のような、より強い聖性を踏襲したものとなっている。明らかに周囲の人物たちとかけ離れた姿の聖母たちは、その後ろに広がる群衆のさまざまな出来事と完全に切り離されているようにも見えるが、すぐ背後で聖母を見てともに悲しみに暮れる女性とその家族の姿などもあり、辛うじてこの空間に同調している。

ともすれば宗教画であることにすら気付かなくさせる、群衆たちを使ったキリストの「隠蔽」は、当時の宗教的関心の在り方を体現したものである。はじめにも述べたように、エラスムスはカトリック教徒でありながら、教会での形式的な儀式をはじめとする信仰実践を表面上だけのものであると批判した。ブリューゲルは共通の考えを持っていたのか、もし、キリストの磔刑が当時のネーデルラントで起こったらどうなるかを、物語性をもって示している。キリストが人間の罪のために長い道のりを歩むにもかかわらず、多くの人は気にも留めない。左下の方では十字架を担がせるために兵士に捕らえられた「キレネのシモン」がいて、彼の妻はそれを止めさせようとしている【図6】。彼女はロザリオを身につけているにもかかわらず、シモンの運命を恐らく変えることはできない。さらに、キリストの右側には盗賊が捕らえられ、荷馬車で連行されている様子が確認できる【図7】が、彼はすぐ後ろのキリストに気づかず、正反対の方向、連行を監督しているであろう黒いヴェールで覆われた人物に向けて、十字架を握り、許しを請うてしまっている。これらの図像は、ロザリオや十字架といった「形式だけの道具」や本来の意味を考えない祈りの愚かさを、まさしくエラスムス的に風刺として表したものである⁵⁴。キリストに気づかないにもかかわらず、形式化された行為のみを実践して、救いがあると信じることの滑稽さを、画家の得意とするユニークな人物表現によって寓意的に描いたのである。

この「本質を見失う愚かしさ」は、画中の群衆のみならず、鑑賞者にも突き付けられることとなる。この作品を観る時、まず前景の、明らかに目を引く、宗教色の強い聖母たちに目を奪われ、あまつさえその図像によってようやくこの作品を宗教画と断定してからキリストを探し始めているようでは、画中の群衆と同様、「真の信仰」を見失っている者とされてしまうのである。この作品は124×170cmというブリューゲル最大の作品であり、《バベルの塔》同様、食堂での饗宴の際、複数の人物が同時に鑑賞した可能性が浮かぶ。

ニムロデがそうであるように、前景の一際目を引く聖母たちは、語らいのきっかけを生み、その背後で起きている出来事へと視線が移行するのに合わせて、話題が連鎖していくことを意図したものだろうか。様々な出来事が同時発生しているこの作品は、それぞれの関心をそれぞれ別のところに引き付ける。《バベルの塔》が多様化の功罪をひとつの塔のもとに複

合的に表し、集った者たちがアントワープの政治・経済的な動きに関して議論を生むものであったとするなら、こちらは、それぞれ「見たいように見て、信じたいように信じる」という宗教の多様化による新しい宗教観を、それぞれの興味のままに許す世界を体現したものともいえようか。しかし、どのような思想をもつにせよ、ただ一つの真実、キリストを見失ってはならないのである。

3-3. 《季節画》(1565)

これまでの2作品はどちらも宗教的テーマであったが、農民の季節ごとの労働を描いたこの連作は異なる。ヨンゲリンクのコレクションのリストには「12ヶ月図」と表記があったために、12点からなる連作であると主張する研究者も多くいるが、現存する作品においてブリューゲルは厳格に一つの月と内容を対応させているわけではないため、6点という説が有力である(1点は失われてしまった)⁵⁵。薪を集めたり謝肉祭から帰っていたりする農民の様子を描いた《暗い日》【図8】、初夏の干草作りを描いた《干草の収穫》【図9】、真夏の、麦を刈り果物などを収穫する農民の様子を描いた《穀物の収穫》【図10】、晩秋に放牧を終えた牛たちを畜舎へ帰す「牛追い」を描いた《牛群の帰り》【図11】、そして、真冬の雪の中、帰還する狩人たちを描いた《雪中の狩人》【図12】が現存している⁵⁶。

季節ごとの行事を描くということ自体は、写本などで伝統的に行われてきており、他にも、当時の時祷書、聖務日課書、月暦画では貴族の一年の行事や、ブリューゲルが描いたような農民の仕事が描かれるようになり、ブリューゲルはこれらの伝統を参考にしたと思われる。ただし、彼の月暦画たる《季節画》が革新的であったのは、その構図である。ブリューゲルは、手前に農民たちの人間味溢れる姿をクローズアップしつつも、その背景は広く、奥行きがあり、農民画とは思えないほど視界が開けている。

この連作はすべて《バベルの塔》とそう変わらないサイズであり、これまで同様食堂に展示された可能性が高い。これらの連作が《バベルの塔》、《十字架を担うキリスト》と最も大きく異なる点は、明らかな寓意性が無いことである。宗教画ではないとはいえ、ブリューゲルのユーモラスで時に大げさなほど滑稽な人物表現や、明らかに風刺的な表現、《バベルの塔》における塔の杜撰な建設のような要素は、この連作の中ではほとんど見られない。そのため、饗宴に照らしてどのような話題を喚起するものだったか、当時の情勢の中どのような戒めを行うものか、という内容を推測して逆説的に寓意を考察するといった方法は意味をなさない。これらの「農民風景画」は、同時代の農民と風景とを支配するという欲望に関連付けられることもある⁵⁷。しかし、その欲望は他ならぬ「ニムロデ的傲慢」の体現であって、《バベルの塔》の戒めと根本的に意味を違えてしまうのである⁵⁸。

ヤン・ノワロが(虚勢であることは抜きに)ブリューゲルの農民画を自身の饗宴に用いていたであろうことは、作品に明らかな寓意性が認められないような風景や農民を描いたもの

であるとしても、その前で行われる食事を高度なものに変えるという点で、食堂での「使用」に対する価値があったことの証左である。参加者たちが食すものは一年を通じた農民の堅実な労働の成果であることを意識させ、バベル的混乱のなかにあるアントワープの要人たちに、アントワープという共同体を構成する層のひとつ「農民」を軽視しないよう訴えるような意味付けを推察することもできる。

ヨンゲリンクとノワロがそれぞれ所持し、食事の場に用いたであろうブリューゲルの農民画の大きく異なる点は、その表現である。《農民の婚宴》および《農民の踊り》が人物表現に特化した、伝統的な農民表現であるのに対して、それより前に制作されながらも風景表現に重きを置いている《季節画》は、ブリューゲルの画業という指標で見ても異質なものである。連作としてネーデルラントにめぐる季節とそれによって表情を変える風景や、その中のあらゆる農民の労働を同じ画面のなかに描きつくす手法をブリューゲルが取り入れた背景には、やはりエラスムスの影響があるという可能性を、私は主張したい。

エラスムスの『敬虔な午餐会』において、饗宴の主催者エウセビウスは食事の前に客人たちを連れて自身の邸宅を巡り、案内する。彼の邸宅には立派な庭があり、「すすけた都会」にはない自然と穏やかな時間が流れている。しかし邸宅の中には本物の庭とは別に壁画として描かれた、いわば「絵の庭」もあり、ゲストのティモテウスが、普通の庭だけで満足できなかったのか、とエウセビウスに尋ねると、以下のような対話が始まる。

エウセビウス「一つの庭だけですべての種類草木を採り入れるには十分ではありません。さらに生花と（美しさを）競い合っている花の絵を見ますと、喜びは二倍になります。つまり一方で自然の手ぎわに賛嘆し、他方において画家の才能に驚きます。そして両者において神の恵み深さに驚嘆するのです。（中略）総じて庭はいつも青々としているわけではなく、小さな花々がいつも咲いているわけでもないからです。けれども、この庭は冬至のころでも青々としており、楽しませてくれます。」

ティモテウス「しかし、絵では薫りはしませんね。」

エウセビウス「でも、一方で手入れの必要がありません。」

ティモテウス「ただ目を楽しませるだけではありませんか。」

エウセビウス「そのとおりですが、そのことをいつまでも提供してくれます。」

ティモテウス「絵画も古くなっていきます。」

エウセビウス「古くはなりましても、わたしたちよりも長生きし、年と共に優美さが一般に増し加わりましょうが、この優美さというものはわたしからは奪われてしまいます。」⁵⁹

（中略）

エウセビウス「ご覧なさい。土そのものも青々としているでしょ。舗装の石も優美な

色彩がほどこされていて、小さな花がそこに描かれていて楽しませてくれます。この壁全体に描かれているご覧のこの木立は多種多様な光景をわたしに提供してくれます。まず、あなたが見ている樹木と同じ数だけ、樹木の種類があります。その一つ一つは自然のままのイメージにもとづいて巧みに描写されています。あなたが認められる鳥の数だけ、鳥類の種類があります。(中略)下の方には四足動物の姿があります。または地上で四足動物のように生きている鳥類の姿が描いてあります。ティモテウス「驚くほど多様なものがありますね。暇をもてあそんでいるものは何もありません。何かをしたり話したりしていないものはないのです。」⁶⁰

エウセビウスがエラスムスの理想を体現した存在と仮定するならば、自然豊かな場所で饗宴を開催する者は、通常の庭のほかに、常に青々とした不変性を持ち、あらゆる季節の動植物が網羅された「絵の庭」を持ち、自然の力と、画家の力の両方に驚嘆しながら、その恵みに思いを馳せるべきである、という主張が読み取れる。都会を離れた場所にある理想の邸宅には、饗宴にふさわしい大きな食堂のほかに、あらゆる時季の自然や生命の姿が網羅された「多様性」を、いつ何時も客人との対話のために確保しておく必要性を訴えているのである。

《季節画》はまさしく、この、あらゆる要素がひとところに集う理想を体現するものであり、ヨンゲリンクの別荘において、エラスムスの理想とブリューゲルの作家性が、これまで述べられてこなかった、最も強固かつ、独自の結びつきを発揮している部分であると、私は考える。エウセビウスがいつも眺める絵の庭のように、ひとつの空間にあらゆる季節の要素が網羅された空間、それも雄大な自然風景が描かれた作品の存在が、ヨンゲリンクにはどうしても必要だったのではないだろうか。そして、「あらゆる要素を細密に描きつくす」という作品制作において、ブリューゲルの右に出る画家は恐らく同時代にはいないのである。これは、エラスムスが記した理想を、それに最も相応しい形で視覚化し、展示としての結実を達成しようとする時、ブリューゲル以外にそれが不可能であることを意味している。

結局のところ、ここまで扱ってきた作品たちがどこにあったかは、不明瞭なままである。しかし、世俗的なユーモアと敬虔な信仰心を併せ持つブリューゲルが、《バベルの塔》で伝えている教訓性と《十字架を担うキリスト》によって磨かれる精神性は、明らかにどちらも饗宴に必要な要素であった。そこに、ノワロがそうしたように、農民画によって食事の価値を高める肉体性と、エラスムスの理想をもった自然の「多様性」が発揮される空間の実現という性質を併せ持つ《季節画》も飾られ、互いを補い合いながら、作品の連環を形成する。この連環は、人種や立場、信仰の多様化する街のはずれで、この多様性、裏を返せば混沌となりえてしまう概念について、食事をしながらじっくりと語り、考える時間を与えることに役立ったのではないだろうか。

おわりに

エラスムスは、あらゆる国の人と繋がり、その共通の友である「世界市民」でありたい、と宣言した⁶¹。争いを好まず、語らいによってのみ他人と闘い、その中でつながりを求めようとしたのである。

ゴールドスタインは、ブスレーデンの饗宴を基準として、ノワロとヨンゲリンクを、それに緩やかに倣っただけの性質の異なる中産階級の人文主義者として同一視しているが、ノワロとヨンゲリンクの間にも、さまざまな相違がある。ノワロがブリューゲルの農民画を利用しておこなったような自己演出はヨンゲリンクにも共通するが、鑑賞者の没入を誘い、彼らにしか分からないテーマで、議論を喚起するという性質はヨンゲリンクの別荘にしか見られないものである。その性質を担う筆頭である《バベルの塔》や《十字架を担うキリスト》のような作品は、伝統的な聖書主題でありながら、その表現は16世紀のアントワープ向けに翻案され、『阿呆船』などと関連して、宗教性と世俗性を併せ持つ、独自の寓意を確立している。このことは、アントワープの末路がどのようなものであるか、真の信仰の本質とはいかようなものであるか、語らいによって、国際的貿易都市の「世界市民」としての覚悟をも問うものである。

『敬虔な午餐会』の最後は、エウセビウスが馬に乗って、隣村で病に臥せる人を聖書を用いて精神的に励ました後、また別の村で起こっている諍いを仲裁するために、ティモテウスらに別れを告げる場面で終わる⁶²。これはエラスムスの争いを嫌う態度とともに、饗宴の主催者に対する、共同体に責任を持つことを奨励するメッセージが表れている。ヨンゲリンクたちは、貴族には取って代われないとしても、確かに経済の主役を担っており、アントワープの共同体を正しい道に進める力と、崩壊へと導く力の両方を持っていた。自己中心的な欲望や、親しい人々との間柄だけにとらわれず、共同体の共通善を追求するよう求めるこの教訓は、埋もれた本質を発見させ、傲慢さを戒め、階級の異なる農民とその労働に思いを馳せ、自分の街の多様性の豊かさを確かめさせるヨンゲリンクの食堂に、非常によく合致している。

「すすけた都会」を離れたヨンゲリンクの静かな別荘で行われる饗宴は、時に個人的で、時に議論に満ちて、またある時に内省的で、それらがすべて受容される多様性という名のある種の「寛大さ」を備えたものであったと想像する。16世紀のアントワープの饗宴は、古代の伝統を離れ、より世俗的なものに変化した。一方、宗教的混沌のなかで、精神的な命題から目を背けることなく真剣に向き合おうとするヨンゲリンクの態度が、農民を愛する画家と信じられながらも敬虔なカトリックとしての作家性をもつブリューゲルにしか描けない、複雑な寓意に表れている。巨匠の作品の連環によるメッセージ性が、展示によって、時代を映す鏡のように、ヨンゲリンクの別荘のなかに結実しているのである。

註

- 1 James J. Bloom, "Pictorial Babel: inventing the Flemish visual vernacular," in: *The Transformation of Vernacular Expression in Early Modern Arts*, ed. by Joost Keizer and Todd Richardson, Leiden: Brill Academic Publishers, 2011, p.336.
- 2 Jürgen Müller, "Of Birdnesters and Godsearchers A New Interpretation of Pieter Bruegel the Elder's The Beekeepers," in: *Pieter Bruegel the Elder and Religion*, ed. by Bertram Kaschek, Jürgen Müller, and Jessica Buskirk, Leiden: Brill Academic Publishers, 2018, pp.35-36.
- 3 Barbara A. Kaminska, *Pieter Bruegel the Elder Religious Art for the Urban Community*, Leiden: Brill Academic Publishers, 2019, pp.3-8.
- 4 Bloom, *op. cit.*, pp.321-322.
- 5 Kaminska, *op. cit.*, pp.72-73.
- 6 Kaminska, *op. cit.*, pp.79-80.
- 7 Bloom, *op. cit.*, pp.322-323.
- 8 Kaminska, *op. cit.*, pp.75-76.
- 9 *Ibid.*
- 10 *Ibid.*
- 11 Iain Buchanan, "The Collection of Nicolaes Jongelinc: II The 'Months' by Pieter Bruegel the Elder," in: *The Burlington Magazine*, vol.132, no.1049 (1990), Burlington Magazine Publications Ltd, p.507.
- 12 森洋子『ブリューゲルと季節画の世界』、岩波書店、2022年、288～291頁。
- 13 同上、292～293頁および、Kaminska, *op. cit.*, pp.34-39.
- 14 Kaminska, *op. cit.*, p.35.
- 15 Kaminska, *op. cit.*, pp.4-5.
- 16 *Ibid.*
- 17 デジデリウス・エラスムス『対話集』、金子晴勇訳、知泉書館、2019年、18～94頁、204～229頁、363～371頁。
- 18 Kaminska, *op. cit.*, pp.52-53.
- 19 森、前掲書、289頁。
- 20 同上。
- 21 同上、294頁および、Kaminska, *op. cit.*, p.4.
- 22 森、前掲書、292頁。
- 23 Buchanan, *op. cit.*, p.504. 邦訳は、森洋子『ブリューゲル全作品』、中央公論社、1989年、309頁。
- 24 Claudia Goldstein, *Pieter Bruegel and the Culture of the Early Modern Dinner Party*, London: Routledge, 2013, pp.6-7.
- 25 *Ibid.*, pp19-20.
- 26 高階秀爾『エラスムス 闘う人文主義者』、筑摩書房、2024年、212頁。
- 27 エラスムス、前掲書、21～22頁。
- 28 同上、88～90頁。
- 29 Goldstein, *op. cit.*, p.21.
- 30 *Ibid.*, p.24.

- 31 *Ibid*, p.4.
- 32 *Ibid*, p.20.
- 33 *Ibid*, pp.38-39.
- 34 *Ibid*, p.37.
- 35 *Ibid*, p.37.
- 36 *Ibid*.
- 37 *Ibid*, p.38.
- 38 *Ibid*.
- 39 『芸術新潮』2017年5月号、新潮社、46頁。
- 40 Keith Roberts, *Bruegel: Colour Library*, New York: Phaidon Press, 1998, p.60.
- 41 フラウィウス・ヨセフス『ユダヤ古代誌I』、秦剛平訳、筑摩書房、1999年、56頁。
- 42 Kaminska, *op. cit.*, p.23 ; Roberts, *op.cit.*, p.62.
- 43 Kaminska, *op. cit.*, p.4.
- 44 *Ibid*, pp.4-5.
- 45 例えば以下の文献を参照。Steven A. Mansbach, "Pieter Bruegel's Towers of Babel," in: *Zeitschrift für Kunstgeschichte*, vol.45, No.1 (1982), München: Deutscher Kunstverlag.
- 46 Kaminska, *op. cit.*, pp.53-54.
- 47 森洋子『ブリューゲルの世界』、新潮社、2017年、104～105頁。
- 48 例えば以下の文献では、1568年の《農夫と鳥の巣取り》、《人間嫌い》、《盲人の寓話》、そして《絞首台の上のかさざぎ》といった作品において、農民画や原典に忠実な聖書画に見せかけて、この性質が発揮されていると述べられている。Margaret A. Sullivan, "Peasant and Nestrobber: Bruegel as Witness of His Times," in: *Journal of Historians of Netherlandish Art*, vol.7, no.2 (2015), *Historians of Netherlandish Art*.
- 49 カーレル・ファン・マンデル『「北方画家列伝」注解』、尾崎彰宏、幸福輝、廣川暁生、深谷訓子編訳、中央公論美術出版、2014年、148頁。
- 50 Kaminska, *op. cit.*, pp.24-25.
- 51 ゼバステイアン・プラント『阿呆船(上)』、尾崎盛景訳、現代思潮新社、1968年、64頁。
- 52 Desiderius Erasmus, *A Feast of Many Courses*, trans. by Craig R. Thompson, Toronto: University of Toronto Press, 1997, p.803.
- 53 Roberts, *op.cit.*, p.64.
- 54 Barbara Budnick "Questions of Irony in Pieter Bruegel's Magpie on the Gallows" in: *Georges-Bloch-Jahrbuch des Kunsthistorischen Instituts der Universität Zürich*, vol.7 (2000), Zürich: Universität Zürich, pp.70-72.
- 55 他にも1点につき2つの月を対応させた、また他のブリューゲル作品が実はこの連作に該当するという主張などもあるが、結局のところ曖昧なままである。幸福輝『ブリューゲルとネーデルラント絵画の変革者たち』、東京美術、2017年、82頁および Roberts, *op.cit.*, p.80.
- 56 同上。
- 57 Bloom, *op. cit.*, pp.329-332.
- 58 ただし、そもそも《バベルの塔》におけるニムロデとその権力の誇示、そして計画の失敗も、ヨンゲリンクより立場の高い人物、すなわち上流階級たる貴族の失敗を描いていて、塔の跡地を貴族の模倣によって新たな上流階級となったヨンゲリンクたちが奪取するという野望のような表現という見方ができないわけでもない。

- 59 エラスムス、前掲書、32～33頁。
 60 同上、33頁。
 61 高階、前掲書、181～183頁。
 62 エラスムス、前掲書、92～94頁。

参考文献一覧

欧文

- ・ Walter S. Gibson, *Bruegel*, Oxford: Oxford University Press, 1977.
- ・ Steven A. Mansbach, “Pieter Bruegel’s Towers of Babel,” in: *Zeitschrift für Kunstgeschichte*, vol.45, no.1, München: Deutscher Kunstverlag, 1982.
- ・ David Freedberg, “Allusion and Topicality in the Work of Pieter Bruegel: The Implications of a Forgotten Polemic,” in: *The Prints of Pieter Bruegel the Elder*, ex.cat., ed. by David Freedberg, Tokyo Shimbun, 1989.
- ・ Iain Buchanan, “The Collection of Nicolaes Jongelinck: I ‘Bacchus and the Planets’ by Jacques Jongelinck,” in: *The Burlington Magazine*, vol.132, no.1043, Burlington Magazine Publications Ltd, 1990.
- ・ Iain Buchanan, “The Collection of Nicolaes Jongelinck: II The ‘Months’ by Pieter Bruegel the Elder,” in: *The Burlington Magazine*, vol.132, no.1049, Burlington Magazine Publications Ltd, 1990.
- ・ Desiderius Erasmus, *A Feast of Many Courses*, trans. by Craig R. Thompson, Toronto: University of Toronto Press, 1997.
- ・ Keith Roberts, *Bruegel: Colour Library*, New York: Phaidon Press, 1998.
- ・ Maryan W. Ainsworth, “Religious Painting from about 1420 to 1500: In the Eye of the Beholder,” in: *From Van Eyck to Bruegel Early Netherlandish Painting in The Metropolitan Museum of art*, ed. by Maryan W. Ainsworth and Keith Christiansen, New York: The Metropolitan Museum of art, 1998.
- ・ Barbara Budnick “Questions of Irony in Pieter Bruegel’s Magpie on the Gallows” in: *Georges-Bloch-Jahrbuch des Kunsthistorischen Instituts der Universität Zürich*, vol.7, Zürich: Universität Zürich, 2000.
- ・ Reindert L. Falkenburg, “Pieter Bruegel’s Series of the Seasons: On the Perception of Divine Order,” in: *Liber Amicorum Raphaël De Smedt, Artium historia*, ed. by Joost Vander Auwera, Leuven: Leuven University Press, 2001.
- ・ James J. Bloom, “Pictorial Babel: inventing the Flemish visual vernacular,” in: *The Transformation of Vernacular Expression in Early Modern Arts*, ed. by Joost Keizer and Todd Richardson, Leiden: Brill Academic Publishers, 2011.
- ・ Rachel-Anne Johnson, “A Localized Providence: Pieter Bruegel the Elder’s Hunters in the Snow,” in: *Art as Spiritual Perception: Essays in Honor of E. John Walford*, ed. by James Romaine, Wheaton: Crossway, 2012.
- ・ Claudia Goldstein, *Pieter Bruegel and the Culture of the Early Modern Dinner Party*, London: Routledge, 2013.
- ・ Koenraad Jonckheere, “An allegory of artistic choice in times of trouble: Pieter Bruegel’s Tower of Babel,” in: *Nederlands kunsthistorisch jaarboek*, vol.64, Leiden: Brill Academic Publishers, 2014.
- ・ Margaret A. Sullivan, “Peasant and Nestrobber: Bruegel as Witness of His Times,” in: *Journal of Historians of Netherlandish Art*, vol.7, no.2, Historians of Netherlandish Art, 2015.

- ・ Jürgen Müller, “Of Birdnesters and Godsearchers A New Interpretation of Pieter Bruegel the Elder’s The Beekeepers,” in: *Pieter Bruegel the Elder and Religion*, ed. by Bertram Kaschek, Jürgen Müller, and Jessica Buskirk, Leiden: Brill Academic Publishers, 2018.
- ・ Bertram Kaschek, ““For as the days of Noah were…” Typology in Pieter Bruegel’s Series of the Months,” in: *Visual Typology in Early Modern Europe: Continuity and Expansion*, ed. by Shelley Perlove and Dagmar Eichberger, Turnhout: Brepols, 2018.
- ・ Barbara A. Kaminska, *Pieter Bruegel the Elder Religious Art for the Urban Community*, Leiden: Brill Academic Publishers, 2019.

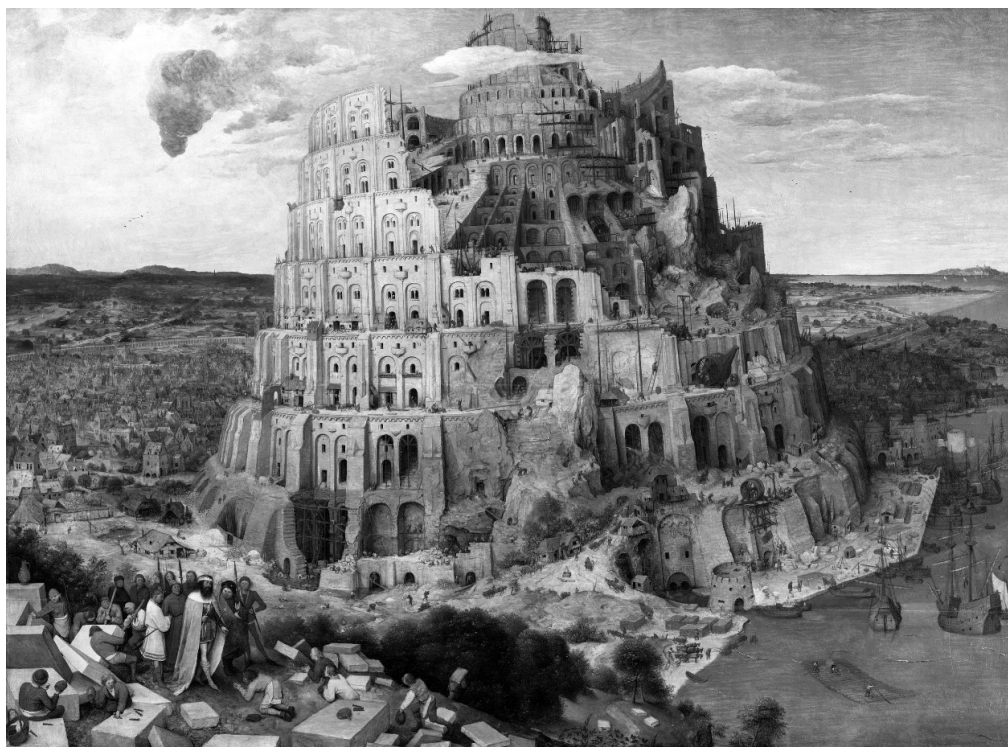
邦文

- ・ ゼバステイアン・ブランツ 『阿呆船』(上下巻)、尾崎盛景訳、現代思潮新社、1968年。
- ・ 中野孝次 『ブリューゲルへの旅』、文春文庫、1980年。
- ・ 森洋子 『ブリューゲル全作品』、中央公論社、1989年。
- ・ フラウィウス・ヨセフス 『ユダヤ古代誌Ⅰ』、秦剛平訳、筑摩書房、1999年。
- ・ カーレル・ファン・マンデル 『「北方画家列伝」注解』、尾崎彰宏、幸福輝、廣川暁生、深谷訓子編訳、中央公論美術出版、2014年。
- ・ 幸福輝 『ブリューゲルとネーデルラント絵画の変革者たち』、東京美術、2017年。
- ・ 『芸術新潮』2017年5月号、新潮社。
- ・ 森洋子 『ブリューゲルの世界』、新潮社、2017年。
- ・ デジデリウス・エラスムス 『対話集』、金子晴勇訳、知泉書館、2019年。
- ・ 森洋子 『ブリューゲルと季節画の世界』、岩波書店、2022年。
- ・ 高階秀爾 『エラスムス 闘う人文主義者』、筑摩書房、2024年。

展覧会図録

- 『ボイマンズ美術館所蔵ブリューゲル「バベルの塔」展 16世紀ネーデルラントの至宝一ボスを超えて—』(東京都美術館、国立国際美術館) カタログ、朝日新聞社、2017年。

図版一覧



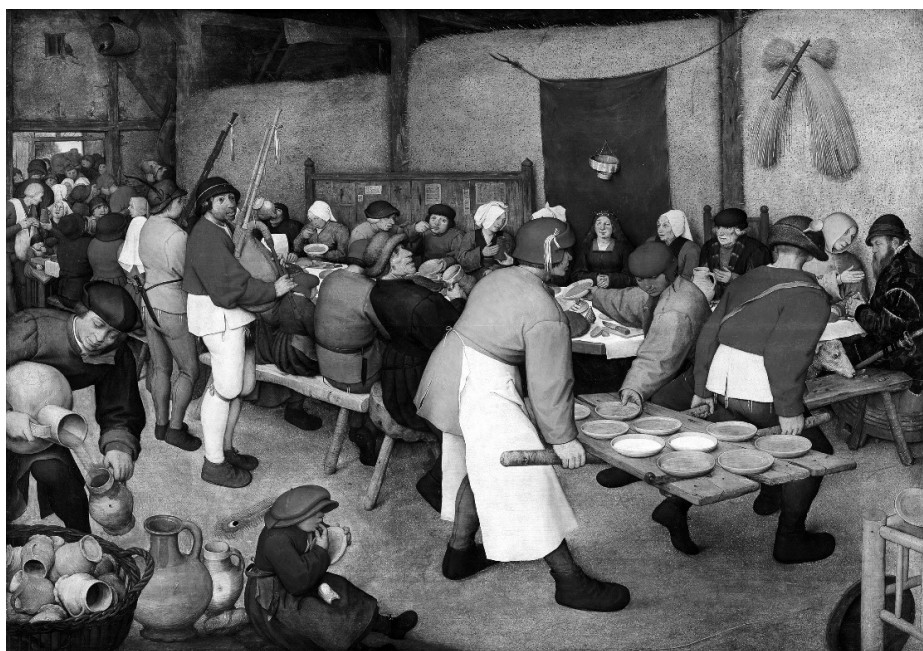
【図1】

ピーテル・ブリューゲル1世《バベルの塔》1563年
油彩、板、114×155cm、ウィーン、美術史美術館蔵



【図2】

ピーテル・ブリューゲル1世《十字架を担うキリスト》1564年
油彩、板、124.3 × 170.6cm、ウィーン、美術史美術館蔵



【図3】

ピーテル・ブリューゲル1世《農民の婚宴》1568年頃
油彩、板、114 × 164cm ウィーン、美術史美術館蔵



【図4】

ピーテル・ブリューゲル1世《農民の踊り》1568年頃
油彩、板、114 × 164cm ウィーン、美術史美術館蔵



【図5】

【図1】部分、前景のニムロデ



【図6】

【図2】部分、連行されるキレネのシモンを止める妻



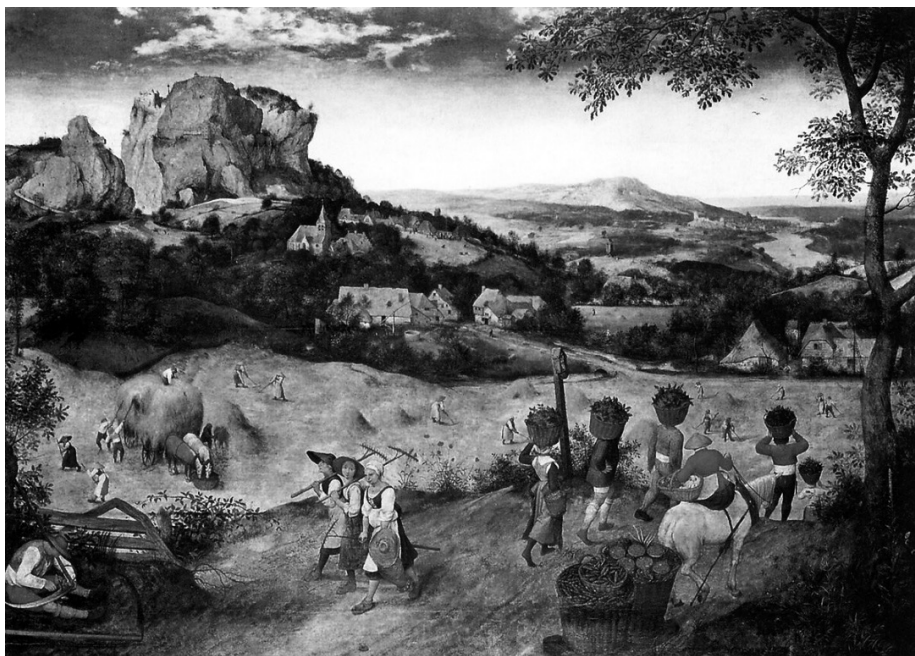
【図7】

【図2】部分、十字架を背負うキリストと、馬車の上で十字架を握り祈る盗賊



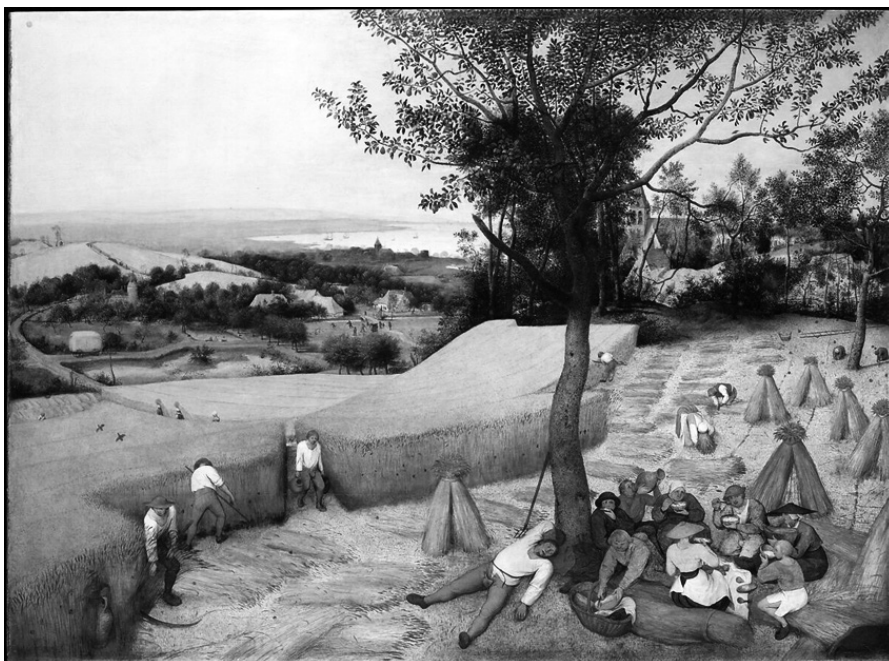
【図8】

ピーテル・ブリューゲル1世《暗い日》(連作《季節画》より) 1565年
油彩、板、118 × 163cm、ウィーン、美術史美術館蔵



【図9】

ピーテル・ブリューゲル1世《干草の収穫》(連作《季節画》より) 1565年
油彩、板、117 × 161cm、ブラハ、ロブコヴィッツ宮殿蔵



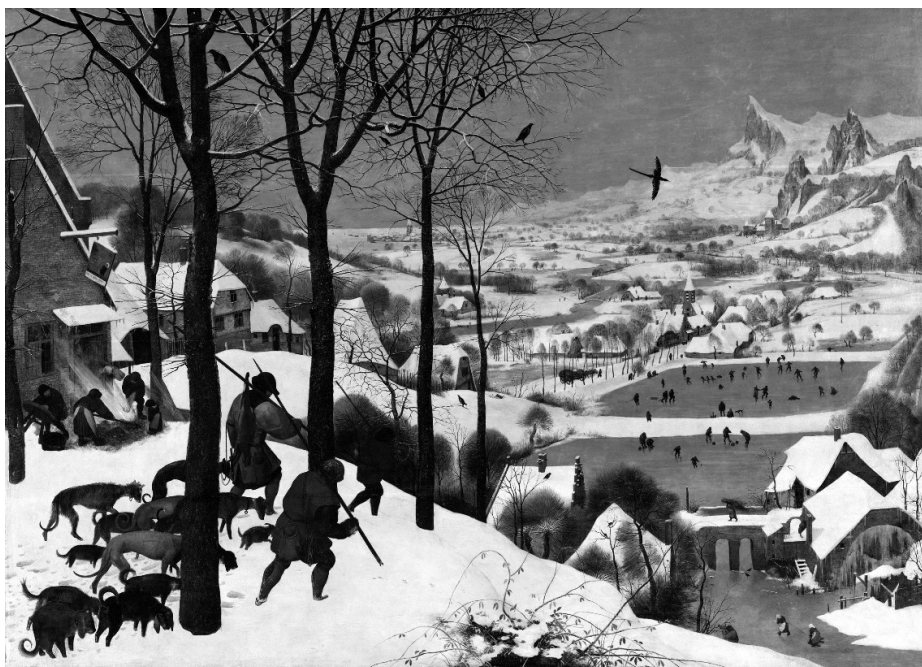
【図10】

ピーテル・ブリューゲル1世《穀物の収穫》（連作《季節画》より）1565年
油彩、板、118 × 160.7cm、ニューヨーク、メトロポリタン美術館蔵



【図11】

ピーテル・ブリューゲル1世《牛群の帰り》（連作《季節画》より）1565年
油彩、板、117 × 159cm、ウィーン、美術史美術館蔵



【図12】

ピーテル・ブリューゲル1世《雪中の狩人》(連作《季節画》より) 1565年
油彩、板、117×162cm、ウィーン、美術史美術館蔵

出典

- 図1・5 <https://www.khm.at/en/artworks/the-tower-of-babel-323>
- 図2・6・7 <https://www.khm.at/en/artworks/the-procession-to-calvary-324-1>
- 図3 <https://www.khm.at/en/artworks/peasant-wedding-around-330-1>
- 図4 <https://www.khm.at/en/artworks/peasant-dance-331>
- 図8 <https://www.khm.at/en/artworks/gloomy-day-early-spring-325-1>
- 図9・10 <https://www.metmuseum.org/art/collection/search/435809>
- 図11 <https://www.khm.at/en/artworks/the-return-of-the-herd-autumn-326>
- 図12 <https://www.khm.at/en/artworks/hunters-in-the-snow-winter-327-1>

※最終閲覧日はいずれも2025年8月28日

AGU Digital Access Project: Digital Humanities Collaboration and Outreach: 2024 Report

DABBS, Thomas W.
SASAKAWA, Wataru

Keywords

Digital Humanities; Rare Books; IIF; Shakespeare; Aoyama Gakuin University

Research Background and Objectives

The AGU Digital Access Project was initiated in 2018 under the auspices of AOYAMA VISION funding and in collaboration with the Folger Shakespeare Library in Washington, D.C., to digitize and share rare editions held at Aoyama Gakuin University. Our objective was to make select early modern religious works—primarily rare Bibles—accessible globally via the Folger’s now-defunct Miranda Digital Asset Platform. These holdings reflect the Christian and educational values foundational to Aoyama Gakuin and represent a vital part of its institutional heritage. In 2024, we consolidated and documented the work done over the past three years in order to hand over the project to the university library and perhaps other faculty who may wish to advance this project in the future.

In 2024 and in prior years we have sought to demonstrate that even smaller institutions can contribute significantly to the global digital humanities landscape by forming partnerships with world-class libraries. In addition to preservation, our aim was to promote scholarly research and public engagement by providing IIF-compliant digital access to these volumes. The project’s wider goal was to create a replicable model for digitizing small collections, integrating them with international research ecosystems, and encouraging further collaboration across the digital humanities community.

Since 2020, our scope has expanded to include educational outreach through the *Speaking of Shakespeare* series, a podcast and YouTube channel designed to highlight research in early modern studies and digital scholarship. Through this initiative, we continue to foster dialogue among scholars, students, and the general public, while linking our digitization efforts to the broader mission of Aoyama Gakuin University.

Research Content Plan and Progress

The project began with the digitization of three major rare editions from Aoyama Gakuin's archives: the *Biblia Latina* (1478), *Biblia Sacra* (1662), and John Milton's *The History of Britain* (1670). These were fully staged on the Folger's Miranda IIIF-compliant platform for roughly two years, enabling high-resolution, page-by-page examination worldwide. This work required collaboration between our team and the Aoyama Gakuin Shiryō Center, where scanning was conducted using high-resolution equipment under the supervision of trained student staff.

After the conclusion of the AOYAMA VISION grant, project continuity was ensured through support from the Institute of the Humanities and the Japan Society for the Promotion of Science (JSPS). During the COVID-19 pandemic, digitization work was temporarily suspended, and our efforts shifted toward data verification, website maintenance, and digital outreach. We used this period to strengthen technical documentation, metadata consistency, and online presentation standards.

In FY2022, funding from the Information Media Center allowed us to resume scanning two rare duodecimo New Testaments printed by Franciscus Gryphius (1539) and Sebastian Gryphius (1564). These editions, rich with illustrations, underscored the value of IIIF imaging for studying minute visual and textual details. Meanwhile, we expanded the *Speaking of Shakespeare* project, integrating podcasts and online lectures as forms of digital humanities engagement.

By FY2023, we completed the digitization and cataloguing of hundreds of images. We also continued the *Speaking of Shakespeare* series with talks from major scholars worldwide.

In FY2024, we catalogued and document all images and gave them to the Aoyama Gakuin Information Media Center and University Library for permanent archival and future public display. Also in 2024, the research institute funded 4 talks in 2024 for this series. Varsha Panjwani, host

of the podcast, *Women and Shakespeare*, Darren Freebury-Jones of The Shakespeare Birthplace Trust, Tanya Pollard of Brooklyn College, City University of New York, and a dual interview with Agnès Lafont of Université Paul-Valéry Montpellier and Lindsay Reid of the University of Galway.

As an outgrowth of this project, Dabbs was invited to give a talk for the faculty and the University of Montpellier on April 2nd of 2024. The talk was entitled “Broadcasting Humanities Research in the Digital Age: Best Practices.” Dabbs also contributed a seminar paper entitled “Generating Shakespeare: AI, Access, and the Early Modern Archive” at the Shakespeare Association of America Conference on April 11th, 2024. He was also a delegate to the invitation-only International Shakespeare Conference in Stratford-upon-Avon on July 23rd, 2024.

Research Outcomes and Future Prospects

In 2024, the AGU Digital Access Project achieved its founding goal of digitizing Aoyama Gakuin’s rare holdings and making them accessible through globally recognized platforms. The *Biblia Latina*, *Biblia Sacra*, and Milton’s *History of Britain* remain available for scholarly and public viewing, now transitioning to the Folgerpedia environment as the Miranda platform is retired. The project also successfully developed internal digitization protocols and trained students in IIF standards, rare book handling, and digital humanities methods. We also continued the *Speaking of Shakespeare* series, this year focusing on early and mid-career scholars.

Initially our partnership with the Folger Shakespeare Library provided invaluable technical insight into digital imaging, metadata creation, and interoperability across repositories. Through the Institute of the Humanities, JSPS, and Information Media Center support, we demonstrated how small institutional archives can achieve international visibility through targeted collaboration and adherence to global standards.

The *Speaking of Shakespeare* series has become a flagship public-facing component of this initiative. As of 2024, it encompasses over 68 recorded sessions with leading and emerging scholars, drawing thousands of viewers and listeners worldwide. These discussions link our digitization work to broader cultural and academic contexts, highlighting how digital media can amplify research impact.

Looking ahead, we anticipate that Aoyama Gakuin’s main library will continue digitization

efforts locally, building on the infrastructure and expertise we established. We foresee integration with evolving AI and data visualization tools, expanding analytical possibilities for scholars and students. Our project underscores how sustainable digital humanities initiatives can emerge from modest origins through collaboration, innovation, and institutional support.

AGU 環境人文学フォーラムの発展

Developing the AGU Environmental Humanities Forum

研究代表者 結城正美

YUKI, Masami

本研究プロジェクトは、文学部附置人文科学研究プロジェクトとして2021年度に始動したAGU環境人文学フォーラムの発展を目的とするものである。

環境問題のそもそもの原因は人間のものの考え方や価値観にある。文化、歴史、言語、ジェンダー、人種をはじめとする多様な問題域において、人文学諸分野は意味や価値の問題に取り組んできた。そうした人文学諸分野の研究者が、人間の活動による地球環境の激変とそれに伴う危機的状況への応答を模索し、相互に触発し合いながら蜘蛛の造網のごとく協働する動きが、環境人文学 (environmental humanities) である。

プロジェクト四年目の2024年度は、日本文学 (佐藤泉)、英文学 (麻生えりか、伊達直之、トーマス・ダブス、松井優子、松木ほのか)、米文学 (西本あづさ)、米文学・エコクリティシズム (清水美貴、結城正美)、ポストコロニアル文学 (橋本智弘)、サウンドスケープ研究 (鳥越けい子)、言語哲学 (エリン・マクレディ)、現代史・ジェンダー研究 (チェルシー・シーダー) といった多分野を横断する対話の一層の深化を試みた。具体的には、主にオンライン研究会を通して、メンバーが個別に進めている研究を環境という視座からとらえ直し、相互の研究の接点を可視化することにより、環境をめぐる問題を多角的に考察する学術的コミュニティ——AGU環境人文学フォーラム——の発展を目指した。オンライン研究会は、メンバーだけでなく学内外に開いたオープンな研究会とした。

環境人文学の国際交流にも継続して注力した。2024年度は、本フォーラムを窓口として本学が参加するノルウェーとアジアの環境人文学国際共同研究 The Asia-Norway Environmental Storytelling Network (ANEST) の最終年度にあたり、とりわけこの共同研究の拠点校であるスタヴァンゲル大学 (ノルウェー) との国際交流で3つの大きな進展があった。一つ目として、スタヴァンゲル大学の教員2名と大学院生十数名を本学に迎え、環境人文学ワークショップ等を通して相互理解を深めた。二つ目として、教育交流の一環としてスタヴァンゲル大学院生を本学客員研究員として迎え、本フォーラムのオンライン研究会での研究発表や日常的な親交を通して、学術的かつ親密な国際交流を実現した。そして三

つ目は、8月にスタヴァンゲル大学で開催された ANEST クロージング学術会議で、本フォーラムから麻生、ダブス、西本、清水、結城が参加して研究発表を行い、スタヴァンゲル大学の教員および大学院生、国立台湾師範大学をはじめとする ANEST パートナー大学の教員および大学院生と交流し、環境人文学の国際化に向けた個人的および組織的なネットワーキングを行った。ちなみに ANEST は、ノルウェーリサーチカウンスルの国際共同研究助成 International Partnership for Excellent Education, Research and Innovation (INTPART) による共同研究で（拠点大学：スタヴァンゲル大学）、ノルウェーの三大学、アジアの六大学の間で研究教育交流を進めてきた。

以下に、オンライン研究会の発表概要および ANEST に関わる活動等の記録を示し、2024 年度の活動報告とする。なお、オンライントークの番号は、2021 年度からの通し番号である。

Online Talk #21 (April 13 2024)

「乏しき時代において文化と自然の共生を問うための人文学的構図（その1）」

大澤善信（関東学院大学名誉教授）

私の学んできた領域は社会学で、人文学の範疇かそれとも社会科学範疇を立てた方がいいのかというマージナルな位置付けである。その社会学の古典であるマックス・ウェーバーが近代を特徴づけるのに用いた「世界の魔術からの解放」という言葉（シラーのもじり）が有名である。ウェーバーは近代人の性格類型を「心情のない専門人」だといい、ニーチェの言葉で「無（ニツ）の人」や「末人」とも呼んだが、「魔術から解放された」知性とは、ハイデガーによれば「技術崇拜」が極まったということであった。「人新世」や人間と人間ならざるものという、極めて 21 世紀的な問題圏であるが、1900 年に亡くなったニーチェが自分の死後 200 年はニヒリズムの時代だと述べたように、むしろ前々世紀末から 20 世紀の前半における人間と動物、文化と自然、ゲゼルシャフトとゲマインシャフト等々の問題構制を私自身は意識してしまう。さて、ちょうどその時代の「乏しき時代の詩人」リルケも、詩人がなすべきは大地の「委託」を叶えることだと述べており、同様の問題圏を潜っているものと思われるので、少々閑説しようと考えている。

ANEST Workshop at AGU (20 April 2024)

INTPART プロジェクト The Asia-Norway Environmental Storytelling Network (ANEST) の拠点校であるスタヴァンゲル大学から、Finn Arne Jørgensen 教授、Melina Antonia Buns 准教授、そして環境史を専攻する大学院生十数名を迎え、本学にて環境人文学ワークショップを開催した。

ワークショップに先立ち、本フォーラムメンバーであるチェルシー・シーダー教授がオーガナイザーを務めるジェンダー研究センター展覧会「共創の場：ジェンダー問題とアジアの

アート・コレクティブ」のオープニングイベントに参加した。この展覧会では、ジェンダーの問題に取り組み、コミュニティの構築を目指す6つのアート・コレクティブの活動が紹介され、多様な芸術表現を通して社会におけるジェンダー課題と向き合う試みについて理解を深める貴重な機会となった。

その後会場を移して行われたワークショップでは、「Crises and Environment History」をテーマに、スタヴァンゲル大学の大学院生がモデレーターを務め、3つのセッションを実施した。各セッションでは参加者が活発に意見を交わし、現代における環境危機について、学際的な観点に加え、日本とノルウェーという異なる地域的・文化的視点から多角的な議論が展開された。本学からはシーダー教授と結城教授がコメンテーターとして参加し、討議をさらに深める洞察に富んだコメントを寄せた。

本ワークショップを通じて、スタヴァンゲル大学と本学との交流は一層強化され、環境人文学における国際的協働の可能性が広がる有意義な機会となった。

Online Talk #22 (11 May 2024)

「耳のために書く——（擬似）風景論」

野田研一（立教大学名誉教授）

文学作品における風景表象は、自然環境を作家や作品がいかに認識し記述しているかを考える際の重要な手がかりのひとつである。とりわけ文学の近代にとって、風景記述は決定的な役割を担ってきた。風景を描くことは近代文学の近代性を指標すると言っても過言ではない。その問題を「言語風景論」という概念を通じて考えてきたが、その場合、欠くことのできない要素が遠近法の問題である。〈風景〉という概念そのものが本質的に遠近法を前提としていることを改めて考察しない限り、「言語風景」を読み解くことはできない。

いっぽう、近代文学は〈風景〉という概念を解体する脱風景論、反風景論をもとりわけ20世紀以降展開してきた。それはいうまでもなく遠近法解体の試みでもある。この遠近法解体の試みを考えるために、本発表では、石牟礼道子『苦海浄土』と大岡昇平『野火』、それぞれの風景を対象として検討したい。副題で示しているように、この2作品の風景の本質は「（擬似）風景」なのではないか。すなわち近代文学の風景を基本的に規定している〈風景〉という概念を解体する試みとして位置づけられるのではないか。こうした問いを提起する予定である。

Book Discussion #4 (8 June 2024)

佐藤泉『死政治の精神史』

佐藤泉（文学部日本文学科教授）・結城正美（文学部英米文学科教授）

本フォーラムメンバーの佐藤泉教授に、著書『死政治の精神史——「聞き書き」と抵抗の

文学』(青土社、2023年)についてお話いただき、コメンテーターの結城教授および参加者と本書についてディスカッションを行った。

「もし今、人文学を再発明するというなら、近代的自我なり自己決定の主体なりがそれでも理性だけで生きているのではなく、まちがいなく身体をもっていること、ゾーエーの生に支えられていることを肯定することが課題となるのではないのでしょうか」という序文の一節からも明らかなように、本書は環境人文学という人文知の再調整において示唆に富む。以下は、佐藤教授による著書紹介である。

2015年にスベトラナ・アレクシェーヴィチがノーベル文学賞を受賞し、日本においても森崎和江や石牟礼道子らによる「聞き書き」の文学が注目された。本書では「聞き書き」の文学の可能性をさらに深く考察することによって、現代の諸問題を解きほぐすための手がかりを探る。

「聞く」という受動的な行為と「書く」という能動的な行為を融合させた「聞き書き」の言葉は、自己と他者との自明な境界を引き直し、さらには自然と他者に対して支配をもくろむ技術合理的主体という主体概念とは異なる人間と自然の思想を提示することにつながる。

「聞き書き」の作者、森崎和江は植民地期の朝鮮に生れ、その風土を糧として育った。彼女の日本語の肉の部分は朝鮮の人と風土に根ざしており、「完全な日本語」という仮象を基準にするなら「欠如」の日本語ということになる。しかし「欠如」を「さわやかな欠如」ととらえる森崎は、たとえば朝鮮人でありながら日本語を使う在日二世といった別の欠如を抱える他者との間の衝突を通した連帯を構想した。

また森崎は、日本語が暗黙のうちに男性の言語体系であることに深い悲しみを抱いていた。彼女は妊娠した時、一人称単数の「私」という語に強い違和感を感じたという。そして誕生・出産という生の始まりの出来事を、母親が「産む」と言うか、そうでないなら赤ん坊が「生まれる」と言うか、いずれにせよ一体不可分の出来事が二つの異なる主体の間で引き裂かれることに納得できない想いを抱いた。つまり女性身体の経験を語る言葉が日本語には決定的に不足しているというのである。

生の始まりを語る言葉が欠けているばかりではない。人は意に反して痛み、老い、死にゆく脆い身体を持っているが、にもかかわらず、日本の文化はその事実に向き合うことができていない。脆弱のままならない身体は自己自身で管理しつくすことができず、他者のケアを必要とするが、自律した個人という形象はそのことを思考の死角に沈めてしまうのだ。さらに現代的な新自由主義的統治の下で、人は「自己責任」の主体へと誘導され、国家にも他人にも寄りかからない「自助」の主体であることを強られる。自ら処理できない身体＝死体は、こうした強い個人という像の限界、残余を指し示しているのである。「生」や「死」のあり方が暗黙のうちに政治化されるという点に、現代という時代の一つの特徴があるが、

森崎らの「聞き書き」の言葉から浮かび上がるのは、その明白な限界だっただろう。

Online Talk #23 (29 June 2024)

“Ocean Thermal Energy, Art, and Science: Notes from the Field”

Aster Hoving (PhD student, University of Stavanger)

At the edge of the sea stands a weathered machine, about the size of a family home. Its red, white, and blue pipes are covered in rust. This Ocean Thermal Energy Conversion (OTEC) facility was constructed by the prefectural government of Okinawa on Kume Island to showcase the possibilities of a kind of energy that can only be generated around the equator, because it requires a stable difference between warm surface water and cold deep-sea water. On Kume Island, electricity is only one part of the story to be told: the cold deep-sea water drawn in through a pipe extending far and deep out into the ocean serves to sustain a complete blue economy. Fish, algae, drinking water, cosmetics—all can be produced safely and sustainably, I am told, from deep-sea water. In this talk, I will share initial impressions and observations from my fieldwork at the OTEC demonstration facility. Furthermore, I will discuss ideas about how to analyze a technical object such as this facility from a critical environmental humanities perspective through an analysis that interrogates the overlaps and contestations between ocean energy, art, and science in Okinawa.

Online Talk #24 (13 July 2024)

「始原の場としての沼地」

伊藤毅 (東京大学名誉教授)

都市建築史の立場から大地を眺めると、「沼地」という場あるいはそれを取り巻く環境が示唆する論点は魅力的である。沼地は陸と水の間形態であり、排水して干拓すれば陸地になるが、水に満たされればふたたび沼に戻る。

近代以降の都市は、沼地という曖昧で不快な環境を忌避し、これを埋め立て、陸地化することに邁進してきた。そして建築は、拠って立つ土地にさしたる疑いも挟まず、大地は永続するものとして造られ続けた。しかし大きな自然は小さな人為環境をいとも簡単に沼地へと戻してしまう。

世界の古い起源をもつ都市を見渡すと、多くの都市は陸と水の出会う両義的な場に建設された。われわれの住む都市の始原としての沼地について、ささやかな話題を提供し、文学的なトポス論との交流を期待したい。

Online Talk #25 (14 September 2024)

「風味表象と環境美学」

三浦哲哉（文学部比較芸術学科教授）

ひと皿の料理は、風味 (flavor) を媒介し、外部の自然環境や文化的蓄積を表象 (represent) する。広く知られていることであり、近年、世界無形文化遺産に認定された「和食」の根本理念でもある。ところで、ここでいう「表象」にはどのような根拠があるのか。「情報を食べている」だけではないと言えるのはどうしてか。どこから先は (恣意的な)「想像」になるのだろうか。「環境」を美的に享受する態度へいかに寄与しうるのであるのか。

本発表では、神経生物学者のゴードン・M・シェファード、精神科医の中井久夫、哲学者のミシェル・セールによる、風味や匂いを主題としたテキストを参照しながら、上述の問いについて考察し、「風味表象」を再考する。

また、私が映画研究者でありながら食と風味を考察の対象としているのは、2011年の原発事故が一つのきっかけである。食をめぐる「科学的認知」と「知覚」と「想像」はときとして混線を起こし、誤った認識をもたらしもする (疑似科学やアンバランスなスピリチュアリズム)。食文化におけるこの三者の適切な協働のありかたはどのようなものかを批判的に考えたい。

Book Discussion #5 (21 December 2024)

レベッカ・ソルニット『オーウェルの薔薇』

人間と環境の関係をめぐって旺盛に執筆活動を展開しているレベッカ・ソルニットの『オーウェルの薔薇』(川端康雄・ハーン小路恭子訳、岩波書店、2022年)を取り上げ、コメンテーターの松井優子教授と麻生えりか教授とともに議論した。

「オーウェルの白い薔薇？」 松井優子 (文学部英米文学科教授)

レベッカ・ソルニットの『オーウェルの薔薇』(原著 2021年刊)によれば、ソルニットがウォリントンのコテージで見つけたジョージ・オーウェルゆかりの二本の薔薇の木は薄ピンクやサーモンピンクの花をつけており、のちにソルニットがその墓前を訪れたときには一本の赤い薔薇が花を咲かせていたという。赤い薔薇はイングランド国花や労働党のシンボルなど多様な意味を持つ。一方、同じくソルニットの著書には、エリック・ブレアの祖先がスコットランド低地地方の出身で、オーウェル自身、最晩年をインナー・ヘブリディーズ諸島のジュラ島で過ごし、代表作『一九八四年』(1949)の執筆もここで始めたことが記されている。そのスコットランドでは、高祖父ブレアが貴族と縁を結んだ18世紀半ばにはジャコバイト蜂起との関連で、そして、オーウェルが執筆活動を展開していた20世紀前半には権限委譲との関係で、白薔薇に特別な意味が賦与されるようになっていた。ここでは高祖父への言及

がある第5章とジュラ島での生活について扱われている第7章を中心に、ソルニットがこの評伝で提起しているオーウェルと土地や抵抗の問題について、スコットランドの視点からとらえなおしてみたい。

「戦争に抗う「時間」と「薔薇」 麻生えりか（文学部英米文学科教授）

ソルニットは『オーウェルの薔薇』において、「戦争や不況が続く悲惨な時代を生きたオーウェルは、自ら戦場に身を投じて戦い続けた社会主義者である」という固定化された「オーウェル的な」作家像とは全く別の、小動物や花や樹木を愛して未来に希望をつなぐオーウェルの姿を私たちに見せてくれる。

本レポートでは、ソルニットが本書で提示するさまざまな魅力的なテーマから「時間」と「薔薇」を選び、それらの対極にあるとされる「戦争」との関係を考えてみたい。人間よりもはるかに長い生命を有する樹木の「サエクルム (saeculum)」は、短いスパンでしかものを考えられない人間たちに、もっと深く長く環境と関わり合うことの喜びと豊かさを教える。また、美やくつろぎ、内的生活の象徴であるともいえる薔薇は役に立たず余分なものに見えるがゆえに、人間にとって欠くべからざるものである。

ソルニットは、「重要な点で [オーウェルは] モダニストではなかった」(118) と述べるが、モダニストもオーウェルと同じく時間と薔薇を重要視しつつ戦争に抗っていたことを、モダニストであるヴァージニア・ウルフの小説『ダロウェイ夫人』(1925) を例に考えてみたい。ソルニットが考える「オーウェル的な」と「ウルフ的な」ものは、従来はかけはなれていると思われてきたが、2人の距離は案外近いといえるかもしれない。

Online Talk #26 (13 January 2025)

木村友祐『猫と考える動物のいのち』著者によるトークと対談

木村友祐（作家）・結城正美（文学部英米文学科教授）

12月5日に刊行された『猫と考える動物のいのち』（ちくまQブックス）は、中高生を対象とする読みやすい本で、半日もあれば読めてしまうだろう。とはいえ、読後もずっと考えてしまうような濃密な内容である。この本には、木村氏がこれまで小説を通して深めてきた思索が詰まっている。

オンライントークでは、まず著者の木村氏に『猫と考える動物のいのち』についてお話しいただき、続いて、結城教授との対談形式で、人間とノンヒューマンの関係や、モア・ザン・ヒューマンをめぐる言語など多様な斬り口から、『猫と考える動物のいのち』について語り合った。なお、当日の録画は、フォーラムのウェブサイト <<https://www.agu-environmental-humanities.com/>> にアップロードし公開した。

Online Talk #27 (1 February 2025)

「アイルランド《風景詩》に見る、「重層化された景色」と「心の眼」: Seamus Heaney と W.B. Yeats の詩作から」

伊達直之 (文学部英米文学科教授)

アイルランドの20世紀詩は、脱植民地から植民地後への政治が日常の生活に浸透した時代に書き継がれた。生活世界と風景の上には、土地所有、産業経済、国境問題の歴史があまねく刻み込まれている。こうした歴史環境の中で、「アイルランドを代表する」とされてきた二人の詩人をとりあげ、詩人たちが自然をどのように作品中に表現していたかに着目し、彼らの自然描写の方法と効果、その意図と独自性を探る糸口を見つけていきたいと考えている。

2024年度の主な活動は以上のとおりである。他に、年度末にメンバー対象のオンラインミーティングを行い、活動を振り返るとともに今後の計画について話し合った。なお、AGU 環境人文学フォーラム開始以降の活動と関連情報は、ウェブサイト <<https://www.agu-environmental-humanities.com/>> で公開している。

伝統芸能における古典のよみがえり —— 継承と創造の可能性を探る ——

The Revival of Classics in Traditional Arts —— Research on Succession and Creation ——

研究代表者 福田美雪

FUKUDA, Miyuki

研究分担者 佐藤かつら

SATO, Katsura

本プロジェクトは、19世紀フランス小説を専門とする福田と、歌舞伎を専門とする佐藤が、現代における「古典作品」の受容状況と、これからの継承のあり方について、ともに研究することを目指して発足した。フランス文学と歌舞伎は分野としては異なるが、古来より継承されてきたさまざまな古典を、翻訳や翻案によって現代にたえず蘇らせることでその命脈を保つという点では共通している。本研究は、21世紀にデジタルコンテンツが氾濫するなかで、人文学研究における古典の役割について再考するきっかけと位置づけられる。

2024年度には、講談師の神田伊織さんをゲストに招聘し、シンポジウム「はじめての講談 これからの古典」（12月4日、於青山学院大学17号館409教室）を対面形式で開催、学内外から約50名の参加者があった。前半は伊織さんによる講談レクチャーから始まり、『源平盛衰記』より「扇の的」、そして『レ・ミゼラブル』より「ジャン・ヴァルジャン」を披露していただいた。後半は、フランス文学科と比較芸術学科より3名の学生・院生（井上雄登さん、三宅杏汰さん、鈴木麻由さん）と、伊織さんを囲んでのフリートークを行い、会場からも活発な質問が出た。このシンポジウムの詳細については別途報告する。

そのほか、当該年度には2つの研究成果があった。福田は、19世紀フランスの豪華挿絵本ブームを象徴する画家ドレを題材に、「ギュスターヴ・ドレの想像力 — 天と地の狭間で」（『青山フランス語フランス文学会論集』2025年12月）を執筆した。佐藤は、歌舞伎芝居の上演ごとに刊行された小冊子を題材に、「声の再生と享受— 鸚鵡石 をめぐって—」（『国語と国文学』2025年6月号所収）を発表した。以下にその概要を簡潔に記す。

（福田美雪記）

研究報告 1 福田美雪

本プロジェクトに先立つ2021年からの2年間、武蔵大学人文学部におけるプロジェクト「シンデレラの末永く幸せな変身」に参加した。古代エジプト、中国、イタリアなど世界各地にルーツを持つ「シンデレラ」譚のバリエーションと今日における継承について、各国文学の専門家が共同研究を行った。福田は、中世フランスに伝播したカトリック色の濃い民話「灰かぶりのマリー」を、ルイ14世時代の文学者シャルル・ペローが、『昔話集』においていかに翻案し、宮廷風の「教訓譚」にアレンジしたかについて発表した。また、ペローの「サンドリヨン」が、19世紀の豪華挿絵本ブームによって、国民的文学として定着した背景についても考察した。その過程で、風刺新聞の挿絵画家として出発し、大型挿絵本『昔話集』のイラストによって、今日に至るまでフランスのおとぎ話の視覚的イメージを決定づけた画家、ギュスターヴ・ドレを再評価する必要性を見出した。だが『シンデレラの末永く幸せな変身』（水声社、2025年3月）に収めた論考は、「サンドリヨン」の挿絵3葉の解説に留まり、19世紀の出版業界で活性化した「古典のよみがえり」における、フランスの枠を超えたドレの貢献については十分に論じることができなかった。そこで本プロジェクトでは、テキストとイラストが協同することで開かれる「継承と創造の可能性」について、改めてドレの主たる挿絵作品と当時の受容状況を題材に検討することにした。

本論文ではまず、19世紀に著しく発展した出版文化を体現する人物として、また文学作品の作者と読者の橋渡しの象徴として、挿絵画家ギュスターヴ・ドレの経歴を整理した。ドレは1832年に、アルザス地方はストラスプールの印刷業者の家庭に生まれた。幼少期から独学で絵を描きはじめ、12歳で発表したリトグラフ（石版画）集が、出版業者シャルル・フィリポンの眼にとまり、パリで創作を始めた。フィリポンの風刺新聞《ジュルナル・プール・リール》など印刷メディアを主戦場としながらも、油彩や彫刻など制作のジャンルを広げる。早くから挿絵本に関心を示し、ラブレールの『ガルガンチュア』やダンテの『神曲』、シェイクスピアの戯曲やミルトンの『失楽園』、さらには旧約・新約聖書など、国や時代を問わず古典の傑作に挿絵を寄せた。

当時の挿絵本はまずテキストありきで、出版者からの依頼を受けた複数の画家が挿絵を寄せるスタイルが主流だった。しかしドレは、単独の名義で販売部数を伸ばせる数少ない売れっ子で、挿絵画家の名がテキストに先行する事態を招いたといっても過言ではない。旺盛な創作意欲、奔放な想像力、異常な筆の速さなど、すべてが規格外の画家で、当時のヨーロッパでもっとも人気を博し、出版の世紀を体現した存在といえる。バルザック、ゴーティエ、ユゴーなど、同時代の文学者の作品にも挿絵を描き、写真家ナダールとも親交が深かった。過労のためか1883年に51歳で没するが、誇張的な線のタッチ、マンガ的な表現技法、映画的な連作スタイルなどが、後の印刷メディアに与えた影響は無視できない。

しかし、アカデミーでの研鑽を経ずに風刺新聞から出発し、商業的な成功を収めたという異色の経歴も、当時の画壇においては諸刃の剣であった。1860年代に挿絵画家として頂点を極めたあとは、油彩画家としての評価を求めてアカデミー主催の官展に再三作品を送るものの、伝統的な宗教画や人物画というジャンルで望む評価を得ることはなかった。ロマン主義の詩人であり美術批評家のテオフィル・ゴティエは、ドレの挿絵に漂う独特の幻想性を認めていた。また、自然主義作家エミール・ゾラは、最初期の美術批評「ギュスターヴ・ドレ」において、『ドン・キホーテ』に代表される奔放な想像力を賞賛した。しかし、ゾラ自身がセザンヌやマネの影響で、ロマン主義との決別を意識したのちは、ドレへの関心は急速に薄れ、テキストが喚起するイメージを「作り直す refaire」ことはできるが、「創造する créer」ことはできないと、むしろ辛辣な評価を下すようになる。

マネと彼を慕う画家たちが「バティニョール派」を形成した1860年代と比べると、印象派グループが誕生して色彩の研究や構図の平面化、抽象化を進める1870年代のパリでは、油彩表現においてはむしろ保守的なドレの立場は揺らいでいた。ドレにもその自覚があり、晩年にはロンドンに複数回滞在し、労働者階級の厳しい現実を観察しながら、白黒の版画表現に回帰して新たなリアリズムを切り開こうとする。しかし病に倒れ、挿絵画家ではなく芸術家として評価されるという夢はかなわずじまいとなった。没後にカタログ・レゾネが出版されてから、2014年にオルセー美術館で大回顧展が開かれるまで、1世紀以上を要している。しかし現代の読者は意識するとせざるにかかわらず、天と地の間を奔放にかけめぐる想像力を駆使し、純粹にテキストとして読まれていた古典を次々と同時代によみがえらせたドレの影響下にいると言えるだろう。

(福田美雪記)

研究報告2 佐藤かつら

本研究においては、「古典」の演目自体を研究対象とするのではなく、その継承のあり方に着目することが目標の一つとされている(2024年度文学部附置人文科学研究所研究プロジェクト申請書「伝統芸能における古典のよみがえり―継承と創造の可能性を探る」のうち「1. 研究背景・研究目的」による)。

佐藤が2024年度に執筆した論文「声の再生と享受―「鸚鵡石」をめぐる―」(『国語と国文学』2025年6月号所収)は、上記の「古典の継承のあり方」に関連するものであると言える。

江戸時代に上演された歌舞伎や人形浄瑠璃、それより古くからある能・狂言などの舞台芸能は、言うまでもなく録画・録音は無く、その場限りの上演で消滅するものである。こうした芸能の実態を現代の我々に伝えてくれるのが、さまざまな形で残された文字資料や絵画資

料である。

歌舞伎を例にとって言えば、上演の情報を知らせる番付類（現代のポスターやパンフレットに当たる）、台帳（脚本）、付帳（^{つけちょう}大道具・小道具や音楽などを指定する帳面）、役者絵などの浮世絵版画、役者評判記（役者の評をまとめた書物）、劇書（芝居に関する書物）、個人の随筆や日記などが、江戸時代の上演の様相を記録しており、継承のあり方を探る手がかりとなる資料である。

こうした資料には出版されたものもあれば、劇場内だけの資料として、あるいは個人の私的な書き物として、写本のまま残される資料もある。佐藤が論文「声の再生と享受—「鸚鵡石」をめぐって—」において分析の対象とした「^{おうむせき}鸚鵡石」という小冊子は、歌舞伎芝居の上演のたびごとに出版された刊行物である。

「鸚鵡石」は体裁としては大本（およそ B5 判）あるいは半紙本（およそ A5 判）で、全部で十頁前後の冊子である。刊行時期によって異なるが、幕末には色刷りの錦絵表紙をもった鸚鵡石が数多く刊行された。

鸚鵡石はある公演における主な役者の役名とせりふとが書き連ねてあるものである。この書物は一般に「^{こわいろ}声色」（声真似）に用いるものとされた。諸国に存在し、人の声を反響する「鸚鵡石」に因んで名づけられている。

声色に用いるとされるが、鸚鵡石には役者の声の特徴や真似方などは書かれておらず、ただ、役者名と役名、せりふのみが掲載されている。鸚鵡石の読者は、どのようにして役者の声色を遣うことができたのだろうか。なぜ、鸚鵡石はこのような体裁になっているのか。

本論文はこうした疑問を出発点として、鸚鵡石の出版物としての性格を観客や読者の視点から考察した。以下、本論文で明らかになった主な点を挙げ、結論を述べる。

声色とは役者の声真似をする芸であるが、担い手としては、声色芸を商売として行う女人の声色遣いと、趣味で声色芸を楽しむ素人が存在した。声色を遣うことは、劇場内にて相当の観劇体験を積むことによって初めて成せるということが、江戸時代の観客について記述した式亭三馬『客者評判記』（文化8〈1811〉年刊）から導き出せる。さらに、せりふを劇場内で自ら取捨選択して暗記するのが女人であり、真似るせりふ本文を鸚鵡石に頼るのが素人である、ということも同書からわかる。時代が下るが、明治・大正頃の声色遣いの芸人の談話からもこのことが裏付けられた。

以上から、鸚鵡石は、まずは素人の声色好きのための本であり、素人を対象としてはいても声の特徴や真似方などは書かれていないことから、読む人が舞台を見ているという前提のもとに作られていると言える。

また、鸚鵡石は声色好きな人のためだけではなく、せりふの内容を知りたい人のための書物でもあった。しかしこの場合も、舞台を見ずにせりふだけ読んでも、特に新作狂言の場合は何のことか読者には内容が理解しにくかったと思われる。

したがって鸚鵡石は、上演という時に即し、劇場という場に即した刊行物であったと言える。これは、現代における歌舞伎の公演時に販売される舞台写真と似たものと言える。現代の舞台写真にも、写真自体には演目名も役者名も役名も入らないが、舞台を見た観客にとってはどういう内容の写真なのか一目で理解できる。鸚鵡石も舞台写真も、ある時間におけるある劇場での公演について、その時に劇場で公演を観た観客の舞台への記憶をとどめ、公演により想起されたさまざまな感情を増幅させたり反復させたりするものであると言える。

一方で、鸚鵡石は時が経てば不要になるものであったかといえそうではない。鸚鵡石はある芝居を観た観客があとから鸚鵡石を読むことで、自らの観劇に関する記憶を思い起こすこともできる書物であった。このことの裏付けとして、本論文では、江戸時代後期の小説『春色梅美婦襦しゅんしやくばいぶね』(天保12・13〈1841・1842〉年刊)のある場面から、鸚鵡石を読んだ姉妹が過去に観た舞台を思い出し感慨にふける様子を指摘した。

体裁の面でさらに言えば、鸚鵡石が持つ多色刷りの錦絵表紙や独特の書体もまた、舞台について読者に想起させるよすがとなっている点についても言及した。

以上により本論文では、鸚鵡石は芝居の上演と共に存在し、その享受に関しては読者の感覚と記憶とに多分に依拠した出版物であったことを指摘した。鸚鵡石は単に声色に用いるものというよりは、「芝居を観た観客が声色を遣い、せりふを知り、芝居を振り返る」ための出版物であったと結論付けた。なお、鸚鵡石は明治中頃には刊行されなくなった。

本論文における成果と本研究とのつながりをさらに考えてみる。「古典」の「継承のあり方」を考察する際、これまで上演されてきた作品を、上演当時の観客がどのように受け止めていたのか、そしてその記憶をどのように繋いでいったのか、またそれは現代の観客とはどのように同じでどのように異なるのか、という問題は注目に価する。「鸚鵡石」という書物はまさに、上演当時において観客の舞台に対する印象を強化し、また、舞台から派生した「声色」という芸能に使用され、さらには上演から時間が経っても観客の舞台の記憶を繋いでいく書物であったと言える。

芸能における古典の継承には、こうした一つ一つの公演の受け止めとその記憶の継承のあり方を分析することは欠かせないと考える。そのために鸚鵡石のような書物について考察することは、本研究においても意義があったと考える。

(佐藤かつら記)

「山吉文庫」の基礎的研究

A Basic Research on “Yamayoshi Bunko”

岩田みゆき

IWATA, Miyuki

〈研究成果の概要〉

「山吉文庫」は、越後国蒲原郡加茂町（現新潟県加茂市）の漢方医森田甫三と蘭医森田千庵父子に関する史料群である。1977年にその大部分が片桐一男氏（本学名誉教授）を介して、千庵の子孫である山吉卓爾氏より本学図書館に寄贈された。本プロジェクトは、この史資料群について、①各地に分散した関連史料の所在の確認・調査及び、本学所蔵「山吉文庫」の位置づけと再評価。②本学所蔵の「山吉文庫」の保存・整備。③森田甫三・千庵父子に関する研究論文・文献資料の調査。④「山吉文庫」の解説を行い、片桐氏以降長く実施されてこなかった本学所蔵「山吉文庫」についての基礎的研究を進めた。

キーワード 山吉文庫・森田千庵・森田甫三・片桐一男

1 研究背景と研究目的

「山吉文庫」は、越後国（現新潟県加茂市）の漢方医森田甫三【1767（明和4）～1828（文政11）年】・蘭学者森田千庵【1798（寛政12）～1857（安政4）年】父子に関する史資料群である。本学所蔵の「山吉文庫」は、1977（昭和52）年に御子孫で旧所蔵者である山吉卓爾氏により本学に寄贈された史資料群である。「山吉」は森田家の本姓であり、千庵没後その跡を継いだ専庵によって先祖の山吉に復したとある（『加茂市史 通史編上巻』令和5年665頁）。

「山吉文庫」の研究は、本学名誉教授片桐一男氏によってはじめて本格的な学術的調査・研究が進められ、散逸した史料の所在調査・史料目録の作成も行われ、その研究成果は、1961（昭和36）年「蘭医森田千庵伝研究」（『法政史学』14）、1977（昭和52）年「山吉文庫について」（『青山史学』5号）、1984（昭和59）年「『本草千種』と「山吉文庫」をめぐる蘭方医たち」（『飯沼愆齋』）などにまとめられている。昭和52年には精力的に研究を進められた片桐一男氏の仲介により、山吉卓爾氏から「山吉文庫」として本学図書館に寄贈さ

れることとなり、現在は本学史学科で預かり、保管・研究を行っている。本学寄贈の経過については片桐氏の「山吉文庫について」（『青山史学』5号）に詳しい。森田甫三・千庵父子については、地元では漢方医・蘭方医として著名であり、片桐氏以降では、1970年代から90年代にかけての長谷川一夫氏の研究が充実している。自治体史では、新潟県史のほか、近年では新潟県加茂市で市史編纂事業の一環として調査が進められ、特に千庵についてはその中で大きく取り上げられている。しかし、片桐氏の研究以降、医学史・洋学史研究で注目されてきたものの、森田父子のような優れた漢方・蘭方の民間医師を育んだ地域的特質や時代背景に関する研究は少なく、彼ら自身の学問研究の内容や行動、交流関係についても、さらに研究を深める余地が多く残されている。

また本プロジェクト申請の背景としてもう一つ付け加えるべき点として、各地に分散所蔵されている「山吉文庫」について、多くの所蔵館が既に史料や目録を刊行物やインターネットなどで公開しているにもかかわらず、本学寄贈分については、片桐氏の論文以降ほとんど研究が進んでいない点である。今後さらに調査を重ね、その史料価値を十分に明らかにするとともに、史料の再整理・保存・管理を行い、広く利用・公開を進める作業が急務となっている。

以上の背景を元に、本研究では、研究史や全国に散逸した森田家の資料群を再調査し、本学所蔵分を正しく位置づけるとともに、越後国の民間医師である森田父子の学問や交流関係をはじめとして、すぐれた医師が育成された地域的特色や時代背景などについても目を向け、新たな切り口で、再評価することを目的とする。

2 研究内容・研究計画・研究経過

本研究は3年計画の予定でスタートした。初年度は、「山吉文庫」の基礎的な研究として、史料の整備、研究史整理を軸に進め、本学所蔵史料の位置づけを行う。併せて史料解説も進めていく。二年目は、さらに史料解説と調査をすすめ、越後国の漢方医・蘭方医である森田父子の学問や交流関係など、その実像を明らかにしていく。最終年は目録・史料集の作成など、研究成果を広く公表してゆく予定である。

2024年度はその初年度にあたり、「山吉文庫」の基礎的な調査・研究を行うことを目標とした。具体的には、①各地に分散した関連史料の所在の確認・調査を改めて行い、本学所蔵の「山吉文庫」の位置づけと評価を行う。②本学所蔵の「山吉文庫」の整備を進める。史料の再整理を行うとともに、すべて写真撮影を行い原史料の保護につとめる。③森田甫三・千庵父子に関する研究論文・文献資料の調査を行う。④「山吉文庫」の解説を進める。中でも、現在進めている森田甫三の「道中日記」を解説し、漢方医として著名な森田甫三の新たな一面を明らかにしていく。以上の4点である。

以上の研究計画にもとづき、本年度は、以下のように実施した。①については、新潟県加茂市立図書館所蔵の山吉文庫の調査を行った。同図書館所蔵資料については、『加茂市史資料編 6 文化財』（令和 2 年）にすべて写真版で紹介されている。また、インターネット上に公開されている新潟大学附属図書館所蔵森田文庫の目録と所蔵史料の確認を行った。調査の内容については、次節 3 (1) において詳述した。各地に分散保存されている資史料群については、次年度以降も継続して行っていく。②については、史料の再整理・目録再作成・入力作業・写真撮影を行い、ほぼ完了した。③については、主要な研究論文・史料集について収集を行い、研究史の整理を行った。詳しくは、次節 3 の研究成果において、堀内誠司氏が(2)「森田千庵・甫三に関する研究史」として報告しているので、参照されたい。④については、森田甫三の「道中日記」や書状を解読中である。引き続き次年度も継続して解読していく。また、この間の研究成果として『人文科学研究論叢』7号（本号）において、堀内誠司氏が研究ノート「越後の漢方医・森田甫三宛書状について一渋川道達書状を中心に一」を発表しているので、併せて参照されたい。

3 研究成果報告

本年度は、本学所蔵の「山吉文庫」の基礎的研究として、上記の①から④の四つの課題をかねて取り組んできた。その取り組みの中から、(1) 本学所蔵「山吉文庫」の概要と特徴、(2) 森田千庵・甫三に関する研究史の 2 点について、担当者ごとに報告する。なお 2025 年度は「山吉文庫」の研究—森田甫三・千庵父子の日記と書状の研究」として、引き続きプロジェクト申請をしており、継続して史料調査・研究にあたっていく。

(1) 本学所蔵「山吉文庫」の概要と特徴 文学部史学科教授 岩田みゆき（研究代表者）

本学所蔵の「山吉文庫」は、古文書類 251 点余（内冊子 51 点、書状類 200 点）、文書以外では、高島秋帆行書（掛け軸）1 点、木製大看板・版木（一粒丸）各 1 枚、短冊 6 枚、印 7 点がある。これらの資料群は、1977 年に本学に寄贈された際に片桐一男氏によって整理され、目録化されており、目録は既に『青山史学』5号に公表されている。ここに掲載された目録もかなり詳細なものであるが、今回のプロジェクトにおいては、それに加えて内容や法量・丁数などを追加し、備考欄を設けることでさらに充実させ、エクセルデータ化することで検索が容易にできるように改良した。また原文書保護のため、すべてデジタルカメラで撮影をし、閲覧利用をしやすくした。この作業は、史学科学生・大学院生によって行った。

ところで、本学寄贈分に関連する資料目録としては、1977 年寄贈時の目録のほか、1961 年本学に寄贈される以前の状況を伝える片桐氏によって作成された「森田千庵関係史料目録」（「蘭医森田千庵伝研究」『法政史学』14 号所収）、1962 年「森田千庵蘭学関係資料

所蔵者別目録」（「蘭医森田千庵とその資料および蔵書」『越佐研究』第18集所収）、1995年片桐氏の研究成果を継承し、長谷川一夫氏によって進められた全国調査によって明らかになった「森田千庵関係史料目録」（「越後の蘭方医森田千庵関係資料について」『洋学史研究』12号所収）などが残されている。長谷川一夫氏作成の「森田千庵関係資料目録」には、加茂市立図書館山吉文庫、新潟大学附属図書館旭分館所蔵森田文庫、養徳文庫、個人所蔵分（市川浩一郎氏・小森長栄氏・日野田潤一氏・森田芳夫氏）、青山学院大学図書館山吉文庫、早稲田大学図書館洋学文庫、財団法人静嘉堂文庫、東北大学附属図書館狩野文庫、西尾市立図書館岩瀬文庫、京都市立西京商業高等学校図書館平野文庫、財団法人武田科学振興財団杏雨書屋、九州大学附属図書館医学部分館、シーボルト記念館所蔵分などの目録も掲載されており、この段階での資料所蔵状況を大方把握することができる。

1961年作成の片桐氏による目録によると、当時の資料所蔵状況は、①新潟大学医学部図書館所蔵資料（未整理につき蒲原宏氏保管中）33点、②小柳鉄次氏所蔵資料（千庵傍系に当る、新潟県加茂市）44点、③山吉卓爾氏所蔵資料（千庵傍系に当る）9点、④国立国会図書館支部静嘉堂文庫（旧大槻文庫本）3点、とある。この目録と、これから16年後の1977年に本学寄贈時に作成された目録、さらに18年後1995年長谷川氏による目録とを比較し、今年度実施した加茂市図書館の史料調査の結果を合わせて、この間の動向を検討してみたところ、以下の点が確認できた。すなわち、

- 1、未整理とされていた新潟大学医学部図書館保管文書の整理と研究が進む中で、人名録、文政事変雑録、戸塚亮斎（静海）から千庵宛書状四通、短冊・書・系図・ヒポクラテス肖像画など、その一部が現在の加茂市立図書館に移管された。また、現在新潟大学付属図書館には書状類がみられず、1961年段階で新潟大学が保管していた藤林普山・岡甫庵関係書簡類などの書状の一部の移管先は明らかではないが、長谷川氏の作成した目録によると、新潟大学・加茂市立図書館ともに山吉卓爾氏からの寄贈とあることから考えると、山吉卓爾氏の意向により、青山学院大学に寄贈された「山吉文庫」の中に含まれた可能性が高いと思われる。実際新潟大学で史料の保管をされていた蒲原宏氏が1956年に「尺牘からみた藤林普山と森田甫三、千庵父子」（『医譚』11巻28号所収）で紹介されている書状は、現在は本学所蔵の「山吉文庫」に含まれていることが確認できた。それ以外の産書・医学書の稿本・写本などの冊子類・円印がそのまま新潟大学医学部図書館に所蔵され、現在は新潟大学附属図書館旭分館森田文庫として公開されている。
- 2、新潟県加茂市小柳鉄次氏所蔵44点は、和漢洋の医学書の千庵自筆稿本や写本が大半を占め、そのほか専庵（千庵の養子）直筆の「蔵書目録記」、木製大看板、印、高島秋帆之行書、書状類が含まれていた。これらは山吉卓爾氏の管理するところとなり、そのすべてが「山吉文庫」として青山学院大学に寄贈された。
- 3、山吉卓爾氏所蔵分9点（山吉家系図・漫遊集覧・見聞雑記・方則二十一剂・漫録・丸

散方并製剤録・救急医法・千庵隨筆などの冊子類)がすべて青山学院大学に寄贈された、ということがわかった。

また、加茂市史編纂にあたられた関正平氏によると、「森田千庵に関する資料は、もともと直系のご子孫の山吉省吾氏(森田千庵の孫、親の専庵の代に山吉氏に改姓)の所蔵であったが、その後次男山吉頼奇氏が引き取り、さらにその子息卓爾氏や長女に引き継がれ保存された。」(『かも市史たより』No.11)とあり、その後の研究経過などを経て卓爾氏とそのご長女のお二人から各研究機関に寄贈されたものであることが記されている。

以上から、本学所蔵の「山吉文庫」は、旧山吉卓爾氏所蔵の9点と旧小柳鉄次氏所蔵文書44点を含んでおり、かつ旧新潟大学付属図書館保管分の内から移管された書状数点も含んでいる可能性を指摘した。また、その後の整理と研究を経て、新出の山吉家文書も含めて、学術的に高い研究成果を取めた片桐一男教授が勤務する青山学院大学に、一括して山吉卓爾氏から「山吉文庫」として寄贈されたものであることがわかる。

次に本学所蔵の「山吉文庫」について、概要と特徴をみておきたい。既述のとおり、本学所蔵「山吉文庫」は、古文書類251点余(内冊子51点、書状類200点)、文書以外では、高島秋帆行書(掛け軸)1点、木製大看板・版木(一粒丸)各1枚、短冊6枚、印7点であるが、数でみると、他の所蔵機関を圧倒しており、森田千庵・甫三父子や、加茂の医療研究の中軸をなす史資料群であるといえる。

まず冊子類をみると、51点の内38点が医療・薬剤などに関係するものであり、蘭方のみでなく洋・漢・和のすべてのジャンルに及ぶ書写・稿本・見聞記録・覚書などがみられ、医師としての幅広い教養や研鑽を知ることができる。作成年代・書写年代が不明なものが多いが、文政期のものが多く、古いものでは宝暦七年丸山玄忠による「活命集 全」、幕末期では安政四年千庵による「奇薬妙方漫録」などがみられる。これらの多くは、早くから注目され調査研究されていたもので、1961年段階の旧小柳鉄次家文書目録・旧山吉卓爾家文書目録にも含まれている。これらは森田家の医療の実態や、医学について知る上で不可欠なものである。残りの冊子類は、甫三や千庵の旅日記、隨筆、雜記覚帳類、人名録、詠草などの歌集、蔵書目録記、山吉家系図など、家や個人に関するものである。森田甫三・千庵を中心とする交流関係、行動、学問内容、興味や関心のあり方などを知る上で貴重である。既に、片桐氏・長谷川氏らによって主要な蘭書や蔵書目録記などが紹介され、新潟県史や加茂市史においても翻刻・紹介されているものもあるが、未検討のものも多く見受けられる。

書状類は200点と圧倒的に多く、これが本学「山吉文庫」の大きな特徴となっている。

書状類も冊子類と同じく大半が年不詳であるが、文政期のものが多く、天保期のものもみられる。書状の中には森田甫三や千庵が差し出したものや、山吉屋関係なども含まれるが、千庵に宛てた書状64点(内1点は甫三と連名)、甫三に宛てた書状53点(内1点は千庵と連名)と両父子に宛てたものが圧倒的に多く、そのほか森田様・森田旦那様・森田老大人・

森田大先生同若先生などと宛名に記されたものも13点みられる。その他千庵弟の圓治や正治に宛てた書状が1点ずつみられる。これらのうち、甫三、千庵の父子の間でやりとりされた書状や、川本幸民、小村英庵、嶋津琢斎、藤井芳亭、藤林普山などから千庵に宛てた書状、及び藤林普山から甫山・千庵父子に宛てた書状などは、既に片桐氏によって詳細に研究されているが（(2)の文献一覧を参照）、未検討の書状も多い。今後さらに検討を進めていきたい。

(2) 森田千庵・甫三に関する研究史 文学研究科博士後期課程 堀内誠司（チーム構成員）

本プロジェクトでは、今年度は②本学所蔵史料の整理・目録作成・写真撮影、③研究論文・文献調査、④史料の解説と研究、を主に担当した。④の成果として、本号（『文学部附置人文科学研究所論叢』第7号）に研究ノート「越後の漢方医・森田甫三宛書状について～渋川道達書状を中心に～」を発表したので、併せて参照されたい。以下では、③の研究成果に従い、蘭方医として知られる森田千庵およびその父・甫三⁽¹⁾についての先行研究を概観する。蘭学および蘭学者、とりわけ蘭方医については、現在に至るまで膨大な研究が蓄積されてきたが、杉田玄白や桂川甫周などに比べれば、越後国の蘭方医である森田千庵と、父の甫三については相対的にみて研究が少ないのが現状である。ある程度著名な千庵はまだしも、甫三については更に少ない。それでも、後述する片桐一男氏・長谷川一夫氏の両名を筆頭に、自治体史などの地域史研究、医学史研究において一定の成果が蓄積されてきた。以下、概ね年代順に成果を整理してゆく。なお、管見の限りで目に付いた文献一覧を、辞典類を含めて末尾に付した。

まずは各種辞典類⁽²⁾から概要をまとめよう。森田千庵（1798～1857）は越後国蒲原郡加茂町に、漢方医森田甫三の三男として生まれた。本姓山吉、名は徳盛、字は守古。千庵のほか逸庵、仙庵の通称を持つ。逸庵と称したのは晩年に至ってのことだったようだ。江戸の宇田川玄真・榕庵父子、のちに京の藤林普山の門人となっている。文政9年（1826）には幕府奥医師だった戸塚静海の勧めで長崎に遊学、シーボルトのもとで医学・蘭学を修め、二年後の文政11年（1828）に父の訃報に接して帰郷し、跡を継いだ。文化面では詩歌に通じており、寺門静軒に漢詩を、加納諸平・長沢伴雄に和歌を学んでいる。静軒に師事したのは、天保13年（1842）に『江戸繫昌記』による奉公禁止処分を受けた静軒⁽³⁾が越後を放浪していた時期であろうか。その他、伊藤圭介や伊藤玄朴、本間玄調といった医学者たちとも積極的に交流し、親交をもった。

研究史上おそらく初めて言及されたのは、呉秀三編『シーボルト先生3』に収録された大橋永三郎氏の原稿であり〔大橋1924〕⁽⁴⁾、呉秀三氏は大橋氏の原稿をもとに『シーボルト先生其生涯及び功績』〔呉秀三1926〕において、千庵について記載しているが、大橋氏の原稿をもとにしたもので、史料に基づく記述ではないとの批判があった⁽⁵⁾。次いで澤式氏

が稿本・写本を若干部紹介し [澤 1935]、蒲原宏氏が藤林普山と森田父子の間で交わされた書簡を多数翻刻した [蒲原 1956] ほか、千庵と戸塚静海の往復書簡を紹介し [蒲原 1960]、研究環境の整備が進んだ。

こうした状況のもと、蘭学・医学史研究として画期となる一連の業績を残したのが、片桐一男氏と長谷川一夫氏⁽⁶⁾である。

片桐氏は、広範な史料収集により基礎的な事績の解明を大幅に進めた。まずは父・甫三について伝記的事項や、甫三が藤林普山⁽⁷⁾と親交を結んでいたこと、西洋医学をも受容してその治療手腕が評判であったことなどを明らかにし、千庵の普山入門が、普山の旧友であった父の人脈を通じてのものであったことを明らかにした点で重要である [片桐 1961]。この片桐論文では、関係書簡も多数翻刻され、従来から知られていた「バタビア局方」(オランダ領東インドの薬物品質基準の公定書。ライデン薬局方よりも進んだ内容となっている)が、同書を文政5年(1822)に入手した千庵が翻訳したことや、当時幕府により禁じられていた舶来の蘭書を書写したことなどが判明した。特に舶来蘭書の書写は、杉田玄白らの病論会や新元会などと同じように、渋谷淡斎(甫仙)・藤井芳亭(加賀藩医)といった医師らと結成した蘭文読訳の会で行われたようで、片桐氏はこの場で学問的な蘭書以外にも蘭学社中のニュースも共有されたことを示唆している [片桐 1961]。この論文では千庵がシーボルトに師事したことの傍証や、藤林普山が越後を訪れたことの証となる書簡なども紹介され、事実解明のレベルが格段に上昇した。書簡によって越後長岡藩医の小村英庵との交流が跡付けられ、越後帰郷後の千庵のネットワークが当地の藩医にまで及んでいたことが明らかになった点も、千庵の位置づけを考えるうえで外せない事績である。

長谷川氏は、千庵の弟にあたる円治⁽⁸⁾にも着目し、「森田兄弟」としての蘭方修得のほか、片桐氏が課題として提示していた実際の診療、地域社会とのかかわりについて論じた。普山の越後來訪が、文政3年(1820)5月6日から9月4日までの短期間であったことを明らかにした [長谷川 1974a] ほか、千庵と円治とが往復書簡を通じて、医学を中心とした学問の研鑽に励んでいた様子を具体的に提示し [長谷川 1974b]、具体的な医療活動についても、従来不明であった円治の医術を治療願や患者への書き送りを通じて明らかにしている [長谷川 1974b、1975]。円治は医術にとどまらず、酒造業にも着手していたようだ。円治は酒造業の展開に際して転居しているが、長谷川氏はこの背景に酒造だけでなく長岡藩から出された蘭学禁止の触が影響していることを示唆している [長谷川 1975]。正治というもう一人の弟もいたようで、彼は柏崎町で開業し、他村の医師に蘭方医学を教えたり、千庵の友人とも交流して治療法や写真術について情報収集を精力的に行っていたという [加藤ほか編 1988]。長谷川氏の主眼は千庵に置かれていたようであるが、むしろ円治の事績が多く解明されたことで、森田家の家業としての医術が地域社会の中で展開し、受容される様相が明瞭に描き出されている。

以上の二氏による業績を基底として、新潟県史および近年の加茂市史編纂事業において森田千庵（および甫三）に注目が集まり、史料の翻刻・掲載、事績や影響についての論考が相次いで発表された。まず『加茂市史上巻』では、天保14年（1843）に加茂の青海神社で行われた献詠歌会に参加した越後の歌人46名のうちに千庵がいることが明らかになり〔加茂市編1975〕、歌人としての活動の一端が示された。『新潟県史資料編11』では千庵が著した『国医考』が翻刻・紹介され、晩年に国学・神道に心酔したという見解が示された〔新潟県編1983〕。『国医考』の成立年代は確定されていないが、本書では弘化年間以降の作と推定された。また加茂市発行の資料編〔加茂市編2008、2020〕では関正平氏により千庵・甫三関係の史料が多く翻刻された。甫三の父・仙庵（千庵の祖父）あての書簡や、藤林普山から甫三への書簡、千庵から戸塚静海あての書簡のほか、年次を欠く人名録や広告類などが翻刻されており、千庵・甫三の様々な人物との交流を知る重要な手掛かりを提供している。関氏はこうした一連の史料を基に森田父子の医療活動について論究しており〔石黒ほか編2005、加茂市史編纂委員会編2023など〕、甫三が没した際の香典帖の記述から、山本玄同（北方村）をはじめとした、越後国内各地の医師らと交流があったことを具体的に跡付けた〔加茂市史編纂委員会編2023など〕ほか、千庵が父から受け継いだ「一粒丸」⁽⁹⁾という薬の販売を行ったことなどを明らかにしている。

以上の諸論考をまとめると、森田甫三・千庵父子は、江戸・京都などの大都市や加茂郡を中心とした越後国内など、広範な地域で幅広い人脈を形成した蘭方医であり、その契機には江戸（甫三・千庵）や長崎（千庵）への遊学があった。現時点で、書簡やその他の周辺史料を通じた事績の解明はかなり進んでいるといえるが、蘭学・医学や和歌以外の甫三・千庵の学問的関心という点では、まだ追究の余地が多く残されているといえる。藩政を含めた政治史への位置づけも一部では行われているものの、多くは洋学史・医学史上での分析が主であり、更なる検討を要しよう。広範な交流から浮上する、従来気づかれてこなかった三都・地方双方での諸動向へのかかわりも、重要な論点となるであろう。

註

- (1) 「甫山」という表記もあるが、本稿では「甫三」に統一する。この点から読みが「ほさん」であることがわかる。甫三は江戸の幕府医官・岡甫庵の門人であった〔平松1999〕。
- (2) 奥沢康正・岡田真也編著『眼科醫家人名辞書』（思文閣出版、2006年）・日蘭学会編『洋学史事典』（雄松堂出版、1984年）・平松勘治『長崎遊学者事典』（淡水社、1999年）の記述に基づく。
- (3) 前田愛『幕末・維新期の文学』法政大学出版局、1972年、124頁。
- (4) この記述については関正平氏の指摘があり、「同（引用者註：大正）十三年五月二十一日付け呉秀三博士宛ての原稿が、呉氏の『シーボルト先生3』に「森田千庵」として収録されたものとしている（関正平「蘭方医森田千庵資料全国に」『かも市史だより』一一、加茂市教育委員会内市史編さん室、2005年3月、6頁）。

- (5) 片桐一男「蘭医森田千庵伝研究」(『法政史学』第14号)87頁に、「呉秀三博士は大著「シーボルト先生其生涯及び功績」大正十五年十月の中でシーボルト第一回渡来中の門人として簡単な伝を載せていられるが、千庵の京都・江戸遊学中の項その他につき誤謬がみられ、資料の紹介もきわめて少ない。それは大橋永三郎氏の誤報によって纏められたもので、実際に資料を手にとられての既述ではなかったがためである。」としている。
- (6) 両氏は関係資料の目録や翻刻も多く発表している [片桐1961・1962・1978、長谷川1991・1995など]。他の目録としては新潟大学附属図書館旭町分館編『森田文庫資料』[1998]などがある。
- (7) 蘭学者。1836～1781年。医書の翻訳で知られる。山本四郎「藤林普山伝研究」[有坂編1974所収]にも詳しい記述がある。山本氏は普山と甫三・千庵の交流にも言及している。
- (8) 文化7年(1810)生まれ、天保14年(1843)に古志郡栃尾町に開業した。それ以前は父を手伝いながら医学修行に励んだと推測されている [長谷川1974a]。
- (9) 下痢や咳、産前産後の諸病に効能があるとの触れ込みであった [加茂市史編集委員会編2023]。

【文献一覧 (五十音順)】

- 有坂隆道編『日本洋学史の研究三』創元社、1974年
- 石黒克裕ほか編『新・にいがた歴史紀行5』新潟日報事業社、2005年
- 奥沢康正・岡田真也編著『眼科醫家人名辞書』思文閣出版、2006年、199頁
- 加茂市史編集委員会編『加茂市史上巻』加茂市、1975年
- 加茂市史編集委員会編『加茂市史資料編二近世』加茂市、2008年
- 加茂市史編集委員会編『加茂市史資料編六文化財』加茂市、2020年
- 加茂市史編集委員会編『加茂市史通史編上巻』加茂市、2023年
- 片桐一男「蘭医森田千庵伝研究」『法政史学』14号、1961年10月、53～90頁
- 片桐一男「蘭医森田千庵とその資料および蔵書」『越佐研究』18集、1962年3月、56～62頁
- 片桐一男「『跋太亞勝亞局方』と森田千庵」『蘭学資料研究会研究報告』111号、1962年6月、189頁～193頁
- 片桐一男「山吉文庫について」『青山史学』5号、1978年3月、123～130頁
- 片桐一男「薩藩移籍と川本幸民の写真撮影成功」『洋学史研究』11号、1994年4月、105～117頁
- 加藤秀俊ほか編『人づくり風土記 全国の伝承・江戸時代一五』農山漁村文化協会、1988年
- 蒲原宏「尺牘からみた藤林普山と森田甫三、千庵父子」『医譚』11巻28号、1956年8月、15～24頁
- 蒲原宏「尺牘からみた森田千庵と戸塚静海」『医譚』復刊21号(通号38号)1960年4月、22～24頁
- 呉秀三『シーボルト先生其生涯及功業』吐鳳社、1926年[初出1896]
- 澤式「北越蘭醫の祖森田千庵」『医文学』11巻2号、1935年2月、96～98頁
- 新潟県編『新潟県史資料編一一近世六』1983年
- 新潟大学附属図書館旭町分館編『森田文庫資料』1998年
- 日蘭学会編『洋学史事典』雄松堂出版、1984年
- 長谷川一夫「越後の蘭方医森田兄弟について(一)」
『日本医史学雑誌』20巻3号、1974年7月、44～50頁 [長谷川1974a]
- 長谷川一夫「越後の蘭方医森田兄弟について(二)」
『日本医史学雑誌』20巻4号、1974年10月、76～82頁 [長谷川1974b]
- 長谷川一夫「越後の蘭方医森田兄弟について(三)」
『日本医史学雑誌』21巻1号、1975年1月、71～77頁 [長谷川1975]

長谷川一夫「越後の蘭方医森田兄弟について（四）」

『日本医史学雑誌』20巻3号、1975年4月、67～71頁

長谷川一夫「藤林普山訳『解屍篇』について—森田千庵署名（印）入り写本より—」

『日本医史学雑誌』37巻2号、1991年4月、55～57頁

長谷川一夫「越後の蘭方医森田千庵関係資料について」

『洋学史研究』12号、1995年4月、59～94頁

平松勘治『長崎遊学者事典』溪水社、1999年、90頁

「データベースを用いた日本現代史研究Ⅱ」について

The Usage of Digital Archives for Doing Historical Research on Contemporary Japan II

小宮 京
KOMIYA, Hitoshi

プロジェクトの目的

本研究プロジェクトの目的は、オンラインデータベースという形での、日本現代史資料の整理と公開の持つ意義や可能性を明らかにすることである。

研究代表者の小宮京は、在外研究での経験、および、新型コロナウイルスの流行という事態に直面し、資料閲覧が大きく制約されるなか、オンラインデータベースの重要性や資料のデジタル公開の重要性を確認した。それを踏まえ、2021年度に人文研プロジェクト「データベースを用いた日本現代史研究」を立ち上げた。その成果は、小宮京「データベースを用いた日本現代史研究」について」（『文学部附置人文科学研究論叢』4号、2023年）を参照されたい。

当該プロジェクト後も、オンラインデータベースの充実や資料のデジタル公開は進んだ。このような状況を踏まえ、本プロジェクトは、2021年度の研究プロジェクトの問題意識を継承し、第二弾として、2024年現在のデータベース等につき、その活用の仕方を探り、理解を深めることを目指した。あわせて、データベースを活用した日本現代史研究の可能性を探りたい。

プロジェクトの実施状況

小宮と市川は各自、国会図書館などでの資料収集を積極的に行い、有識者による講義の準備や論文執筆に活用した。

小宮は、大学院および学部の演習で原口大輔、岸俊光の各氏の講義を実施し、市川もこれ

に参加した。なお、他の有識者による講義等を企画したものの、諸般の事情で実現できなかったことは甚だ残念であった。

成果物について

本プロジェクトによる有識者の講義記録を活字化し、小宮の序文と併せて『史友』57号(2025年3月刊行)に、「〈特集〉データベースを用いた日本現代史研究Ⅱ」として掲載した。この特集は、小宮京「データベースを用いた日本現代史研究Ⅱについて」、原口大輔「横路孝弘オーラルをめぐるいくつかの所感」、岸俊光「〔志垣資料〕に見る戦後内閣情報機構の実像」からなる。

現在、衆議院では、「正副議長経験者に対するオーラル・ヒストリー事業」が進められており、その第一弾として、河野洋平元議長と横路孝弘元議長へのオーラル・ヒストリーがインターネットで公開された。原口氏には、2009年9月～2012年11月まで衆議院議長を務めた横路氏へのオーラル・ヒストリープロジェクトについてお話しいただいた。

岸氏は、内閣調査室職員であった志垣民郎氏の資料を発掘し、戦後の情報機関の研究を大きく進展させた。志垣民郎資料は、丸善雄松堂が運営するジャパンデジタルアーカイブの近現代史料アーカイブ内で有償公開されている。岸氏には、志垣資料の概要や発見経緯などについて講演していただいた。

原口大輔「横路孝弘オーラルをめぐるいくつかの所感」の内容紹介

原口氏は戦前に貴族院議長を務めた徳川家達について研究し、議会官僚や議会制度という観点から貴族院研究を進めてきた。さらに、衆議院事務局の帝国議会期の資料に関する研究会に参加していたことから、横路元議長へのオーラル・ヒストリープロジェクトに参加した。「正副議長経験者に対するオーラル・ヒストリー事業」は、2019年に大西健介衆議院議員が国会で歴代首相に対するオーラル・ヒストリーや衆議院事務総長経験者へのオーラル・ヒストリーに触れて、立法府におけるオーラル・ヒストリーを実施することを提案したことが契機となった。河野洋平元議長に対するオーラル・ヒストリーは、事務局が主体となって実施したが、横路元議長に対するものは研究者を入れるという形で実施した。後者の聞き取りに参加した研究者は、原口氏に加え、赤坂幸一氏、小石川裕介氏である。

横路元議長へのオーラル・ヒストリーは、2020年2月から開始された。新型コロナウイルスの拡大に伴い、3回目からは対面での実施が困難となり、Skypeを用いたオンラインによって実施され、最終回までオンラインでの聞き取りとなった。オンラインによる聞き取りのメリットとしては、聞いている側がネット上で情報等を確認しながらすすめることができ、質疑も柔軟に対応できることである。他方、デメリットとしては、横路元議長へのオーラル・

ヒストリーで赤坂氏も言及しているように、互いの信頼関係をどのように築くことができるか、ということである。直接目を見て話すことができないため、本当にコミュニケーションが成立しているのかという不安に駆られることがある。

オーラルの方法論や理論は歴史学・政治学だけではなく、社会学や文化人類学など様々な分野において、多くの研究が存在する。この横路オーラルはいわゆるエリート・オーラルの一種である。エリートの人たちは「定型の語り」があるといわれている。横路元議長には質問票を事前に送り、横路元議長はオーラルの当日にはルーズリーフと思われる紙に話すことをまとめたメモを準備しており、それに沿って話をしていた。横路元議長自身が元々弁護士という経歴もあり、また長い間政治家をしていたため、自らの来し方を整理して語ることに慣れているというのが率直な感想だった。

オーラルの方法論などでは、一般的にインタビューに関する著作などはインタビュー어가事前に集めて、読み込んでオーラルに臨むべきとされる。一方、それらの文献は、私家版等も含むため、入手しにくいという側面もある。さらに、戦前の主要な政党の機関誌は復刻され大きな図書館に所蔵されているが、戦後の日本政治を研究するための文献の入手は大変だということを実感した。その点、関連する資料を横路元議長から事務局経由で提供されたことは、資料収集の助けになった。また、国会図書館デジタルコレクションが飛躍的に充実したことも、助けとなった。

インタビューに際しては、横路元議長の「定型の語り」をどのように突き崩せるかということ考えた。インタビューが入念な準備をしている場合、聞き手はお説拝聴になりがちであるため、そこでどのように質問をすれば話を引き出すことができるのかということに興味深く感じた。

本オーラル・ヒストリーは、赤坂氏による注釈が非常に充実している。ただし、オーラルを読むにあたって、注釈がどのくらいあるのが望ましいのかということは、様々な意見があると考えられよう。これは読み手を研究者がそうでない人を想定するか、ウェブ上で公開するか商業出版かという点でも異なってくると考えられる。

象徴天皇制についても質問をしたところ、護憲という側面から天皇を評価していた。ただし、議長時代の天皇への内奏の内容については、横路元議長は具体的なことは話さなかった。

また、横路元議長は民主党内における権力闘争についても多くを語らなかった。横路氏の副議長就任や議長就任は民主党内の抗争という側面があったが、横路氏は就任要請を粛々と受け入れたという語りになっていた。議長は戦後のある時期から上がりポストになっている。横路元議長は議長の政治活動について、前任の河野洋平議長から政局的な動きは避けた方がよいとアドバイスがあったことを紹介して、自らも民主党内での活動は避けるようになったと語った。ただし、インタビューが進むうちに、横路氏は副議長時代に若手の民主党政政治家にいろいろとアドバイスした方がよかったと述べた。東日本大震災発生時の対応について、

インタビューでは集中的に聞き取りを実施した。議長職にいるがゆえに何もできないもどかしさがあったかという質問に対し、横路元議長は議長の職務を全うしたという語りで一貫していた。正副議長がどの程度政治に介入するかどうか、どのようなことができるのかといった政治規範や規律は、議長の個性やその時々々の政治バランスによって大きく変わることが示唆される。横路元議長の事例がすべてに当てはまるとは限らない。それゆえ、議長のオーラル・ヒストリーを積み重ねることが重要である。

沖縄返還時の密約問題に関する「西山事件」についても質問した。横路元議長は毎日新聞記者の西山太吉と一度面会したが、西山氏は記事のベースについては明らかにせず、肝心の部分についてはノーコメントとした。

衆議院事務局によるオーラル・ヒストリーのメリットは、事務的なことを事務局が担う体制であるため、研究者の負担が少なくなったことである。インタビューとの調整や録音と文字起こし、修正、事務局が記録を保存するという体制は、研究者個人がこれらを担わなければならないオーラル・ヒストリーのデメリットをかなりの程度解消している。このような事務局の全面的なバックアップがあったからこそ、1回2時間全28回にわたる膨大なオーラル・ヒストリーが可能になった。

他方、デメリットとしては、ライフ・ヒストリー型のオーラル・ヒストリーを読む方も、作る方も膨大なコストがかかるということである。さらに、今回のオーラル・ヒストリー事業は、衆議院事務局という衆議院の組織が実施するということがあり、政治的中立の立場から、原則として対象者の政治家引退後にオーラル・ヒストリーが実施されるため、対象者が限定されてしまう。正副議長退任後から政界引退までに死去する政治家もいる。このオーラル・ヒストリーは、対象者の個人的な回想や意見であり、衆議院または衆議院事務局の公式見解ではない旨のエクスキューズをつけているが、政局に影響を及ぼさないとも限らない。

赤坂幸一氏は、正副議長と親密な関係にあった職員を中心に、リラックスした雰囲気での聞き取りを行うことができ、ある程度において前提事情を共有した者による、核心的かつ専門的な問いを投げかけることができることをメリットとして挙げている。しかし他方で、くだけた雰囲気での語りは、往々にして内密の打ち明け話や、外部者は意味の飲み込めない内輪での語りになる危険性を指摘した。

これは結局使い方の問題になると思われる。オーラルを残すことを優先するのか、作る以上はクオリティーの高いところを目指すのか。二者択一ではないが、オーラルをどう残して、どう使うかという問題である。研究者側からすれば、元議長と事務局職員のみの実施によって内輪の話が出てきても文脈が分からず使いにくいかもしれないが、やはり対象者が存命のうちにより切ることが大事だという意見も、無視はできない。

また、議会アーカイブを巡る日本の現状も関係している。この横路オーラルの関連資料は可能な限り衆議院ホームページからダウンロードすることができる。オーラル実施に伴って、

事務局を介して横路元議長から多くの資料を提供してもらい、事務局にはリスト化もしてもらった。オーラル公開時に、衆議院ホームページで公開可能なものはPDFで公開しようという話を、オーラルの中でも横路元議長に確認しながら進めていた。ただし、提供された資料は、必ずしも公開が前提となっていないものも多い。それを衆議院という機関で、しかもネット上で公開するとなると、公開が難しいと判断せざるを得ない資料もある。

衆議院事務局では、2024年4月から中野寛成元衆議院副議長のオーラルをスタートさせた。元副議長を対象にした事業としては初めてである。原口氏は現在、このオーラル・ヒストリーに参加している。横路元議長は社会党の若きエリートとして名を馳せてきたのに対して、中野元副議長は西尾末広が社会党を脱退して結成した民主社会党(のち民社党)に参加し、新進党、新友愛、そして民主党に所属した。中野オーラルは衆議院事務局と研究者による共同となっている。横路オーラルの時にこうしておけば良かったといった点を活かせるのではないかと思う一方で、横路オーラルと同じように膨大な注釈を付けるということは、同じレベルでやるのは難しいとも考えられる。

岸俊光「志垣資料」に見る戦後内閣情報機構の実像」の内容紹介

岸氏は、毎日新聞で長年記者として活躍し、現在は毎日新聞編集委員と研究者という顔を併せ持っている。毎日新聞は、日本の核政策、非核政策に長い間関わってきた経緯がある。とりわけ、沖縄返還の際に日米間で財政「密約」が存在していることをスクープした一方、毎日新聞の記者が逮捕されるという大きな事件もあった。

アメリカで核「密約」について調査するなかで、志垣民郎氏(以下、敬称略)について記述している本に接し、帰国後志垣の自宅を訪問したことから、志垣との付き合いが始まった。志垣から日本の情報機関についてインタビューした。

日本の情報機関の起源は戦前に遡ることができる。特務機関というような軍の機関が存在した。内閣には情報委員会という組織が最初に存在した。これが内閣情報部に変わり、さらに情報局に変わっていった。このような変遷を経た組織全体を内閣情報機構と総称している。

内閣調査室(内調)の前身の内閣総理大臣官房調査室は、日本が独立する直前に作られた。当時の首相の吉田茂が、独立にあたって発表した談話の中で「平和と民主主義の大道を進めばよい」と言う一方で「我々の前途には暗雲が横たわっている。それは巧みな宣伝戦と浸透謀略を用い、また暴力そのものの武力侵略によって世界征服を企図する、共産主義の脅威であります」と述べている。時の保守政治家は、共産主義の脅威をかなり強く持っていたし、共産主義の脅威という時には、宣伝戦や浸透謀略を非常に意識していた。そうしたものに対処するために、戦後の情報機関を作るのではないかと吉田首相は考えたのである。情報機関設立については、日本側とGHQ側のどちらから生じたのかは諸説ある。

内閣調査室という名称について、最初の案は、情報室だったというが、情報と内閣と付くと、戦前の情報局を想起するため、違う名前にした可能性がある。さらに、調査機関としての性格を持たせたいという思いもあったと考えられる。

内閣総理大臣官房調査室は、総理府内部部局の組織規程の改正によって創設された。新設したのは1952年4月8日であり、新年度が始まってから作られた。そのため、予算の裏付けがないことになり、最初は650万円のお金を持ってきて、補正予算で追加した。専任の職員を置けず、多くは兼職だったと考えられる。例えば、国家地方警察本部との兼職、文部省との兼務のまま連れてくるという形で人集めをした。これは創設期のメンバーがはっきりしない理由の一つとなっている。志垣日記には、1952年5月の連休明けから内閣総理大臣官房調査室に行ったと書いている。志垣によれば、当時の内調には志垣のほかに4人いたという。室長は村井順であった。村井は警察官僚で、戦後の公安警察を作った人物である。吉田首相の秘書官を務めた経験から、吉田は村井を室長に任命したと考えられる。退官後、村井は総合警備保障（ALSOK）を作ったことでも知られる。

新設された内閣総理大臣官房調査室の所掌は、「政府の重要施策に関する情報を収集、調査し、これに対する各行政機関の連絡及び事務の総合、調整に関する事務をつかさどる」と、漠然としたものであった。初期メンバーは試行錯誤を繰り返して内調の活動を形成していった。

その職務として最初に挙げたのは治安機関だった。吉田首相が日本独立にあたって述べたように、共産主義の脅威を保守政治家は強く意識していた。日本は独立したばかりで、西側陣営に入ることもまだはっきりしていなかった。中国は共産化し、ソ連からもさまざまな影響や脅威があった。そのようななかで、日本の共産化を防ぐということが浮上した。志垣の『退官以後』という私家本にも、「私の役人としての主たるテーマは、日本を共産革命の脅威から守るということであった」と書いている。内調の最初の仕事は、1952年5月の、いわゆる「血のメーデー」事件だった。メーデーについて吉田首相に報告したといわれる。初代室長の村井は公安警察の出身であるため、このような事態はお手の物で、そこから本格的な業務に入っていた。

内調の組織は、トップに現在は内閣情報官がおり、新設された当時は室長と呼ばれていた。2番目に次長がいる点はあまり変わっていない。その下に総務部門、国内部門、国際部門、経済部門などがある。こうした体制は3代の室長の時に作られ、そこから大きくは変わっていないといってよい。体制自体は微調整されており、部門は時によって5だったり7だったりする。

作家の松本清張も内調のことを調べており、内調をモデルにした小説を書いたり、内調のノンフィクションを書いたりした。『深層海流』は、内調をテーマにした松本の有名な小説である。松本の『文藝春秋』の連載をもとにした『現代官僚論』も内閣調査室を取り上げて

いる。他は文部、農林、検察、通産、警察といった大きな官庁を取り上げているなかで、内調を取り上げたのは、松本の内調への関心が強かったからだと考えられる。

このような作品を書いた理由は、松本が内閣調査室の流出資料を入手していたからと思われる。流出資料とは、内調の内部にいた人間が何らかの理由で漏らした資料である。『現代官僚論』の内閣調査室論の中にも組織図が載せてあり、清張が書いているのは「一部 国内情報」、「二部 海外情報」、「三部 マスコミ論調」、「四部 資料・通信社関係」、「五部 研究・民主主義研究等」、「六部 情報判断会議」という六部制の実態である。

他にも政治学者の藤原弘達も、1967年の『月刊現代』という講談社の雑誌で内調を取り上げており、ここでも六部制のことにふれている。

志垣によれば、一部が国内、二部が国際、三部が広報、四部は庶務、五部は学者、六部は審議員会議であった。内調の組織は国内部門と国際部門が両輪である。広報は、メディアをウオッチしている。特に、新聞や通信社をウオッチしていた。テレビもウオッチしていた。四部は資料関係、五部の学者担当とは、世の中に影響を与えるようなオピニオンリーダーたちをウオッチしているところである。当時は政府に批判的な学者がほとんどだった。今後の日本の在り方として西側陣営の一員になるとか、安保体制を固めていくとかということに賛成しない世論が多く、学者がそういう世論をリードしたところがある。内調の大きな仕事は、そのような世の中の動きを見て、政府を理解してくれる、あるいは政府に味方してくれるような世論を形成していくことであった。世論を動かすようなインフルエンサーをウオッチするのは当然であり、そのような学者の中で、自分たちの側に立ってくれるような人と関係を結び、そちらに世の中を誘導していきたいというようなこともあっただろうと考えられる。

内調は、学者たちに委託研究をしており、審議員会議は、委託している研究者たちが上げてきた報告を、そのままでもいいか、修正するかといったことを話し合う場であった。実務者の集まりの上にある親会議といった感じだったようである。国際情勢研究会、国民出版協会、世界経済政経調査会、東南アジア研究会、内外情勢調査会、民主主義研究会などに研究を委託していた。内調の仕事はこの外側が重要である。

志垣の資料は、『オンライン版内調資料』として公開された。この資料の特徴は、「志垣民郎資料」という個人資料として出していることである。ただし、多くが公文書であると考えられる。そのような場合、公開の可否を原局に確認する必要がある。原局に存在確認をした場合、多くは「ない」、「知らない」という回答となることが予想され、全ての資料についてそのような手間をかけなければならない。それは実際にはできない。これまでもそのような資料を個人資料として出した例があると聞いていたため、今回も同様の方法を取った。

内調の資料はどこが出したものかを書いていないことが多い。名前が書いてあっても委託団体だけで誰がやったかは書いていない。ただし、「〇〇大学の〇〇教授に委託して作られたものである」などと書いてある短冊を挟んでいる。これを抜いてしまえば書いた人物が分

からない。わざとこのような方法をとっているのだと思われる。外部に出ては困るため、短冊を抜いたら分からないようになっている。それゆえ、短冊が挟まっていたら、絶対に抜かずに、そのままデジタル化することを丸善雄松堂の担当者に頼んだ。

現在はメディア出身の人間として、内調と大手メディアの関係について関心をもっている。世論を相手にするという点で、メディアと情報機関とは近い存在である。内調が一番目の敵にしていたのは朝日新聞だった。朝日は偏った報道をしているという声が目立つようになり、内調の職員もそう感じていたかもしれないが、彼らがつきあっている学者にそうした意見が強かったようで、その影響を受けていた面もあると思われる。

核政策の集大成とも言える研究は「カナマロ会」というグループが手掛けた。カナマロという名称は、メンバーの名前から取っている。「カ」は、垣花秀武という東京工業大学の核化学者、「ナ」は永井陽之助という青山学院大学でも教えた有名な政治学者である。「マ」は、前田寿という朝日新聞出身の軍縮の研究者で、「ロ」は、蠟山道雄という上智大学の国際政治学者である。この4人が委託研究の中心だった。

この研究の存在を、1994年に朝日新聞が一面トップでスクープした。厳しく批判しているとは言えないが、「秘密研究」が見出しになっている。研究が始まった時は、結論がどちらに行くかわからず、確かに秘密だったようである。研究の結果、日本は核武装する方がいいとなる可能性もあった。この研究が最終的に秘密扱いになったかというところではない。1970年3月に研究がまとまった後、内調の発行している『調査月報』という機関誌の第173号に掲載されている。委託研究の紹介という形で掲載され、執筆者は若手の学者だった蠟山道雄で、蠟山の名前はないがイニシャル「M・R」が入っている。さらに蠟山は、朝日新聞社から出版した著書『核兵器と国際政治』に、この報告を若干加筆修正しただけで、そのまま掲載していた。全国紙は大きな組織であるため引き継ぎはなく、1994年に記事を書いた記者は事情を知らなかった可能性がある。朝日新聞はこの研究の報告書を古本屋で手に入れたというのが本当かどうかは定かではない。

蠟山は「日本は国際関係や外交から眺めて損だから」非核で行く方が良いという信念を持っており、晩年までたびたびそう主張していた。朝日の記事は蠟山が協力して書かれたものの可能性もある。いずれにしても内調とマスコミは同じ方を向いていた時もあった。朝日新聞もこの頃、安全保障問題調査会を作り、安保問題を研究していた。マスコミは独自に考え行動すべきであり、もちろん政府に加担しない方が良いが、それぞれ別々に考えたなら同じ方向性になることもあったのである。

プロジェクトの総括

プロジェクトを総括する。

オンラインでの資料公開は日々進んでいる。今回は2021年度の人文研プロジェクト「データベースを用いた日本現代史研究」以降の、衆議院による正副議長オーラル・ヒストリーや、『内調資料』の公開といった、新たな動向や新資料の公開に注目した。改めて、資料の公開に関わった方々からお話をお伺いすることで、その成果と問題点を共有することが可能になった。本プロジェクトの成果はデータベースを活用する上で貴重な貢献となろう。

本研究プロジェクトの成果を踏まえつつ、今後も「データベースを用いた日本現代史研究」を進めたい。

彙報

2025年度 研究プロジェクト (4件)

研究題目「AGU 環境人文学フォーラムの発展」

- 結城 正美 (文学部英米文学科 教授) 研究代表者
麻生 えりか (文学部英米文学科・教授)
佐藤 泉 (文学部日本文学科・教授)
伊達 直之 (文学部英米文学科・教授)
西本 あづさ (文学部英米文学科・教授)
松井 優子 (文学部英米文学科・教授)
橋本 智弘 (文学部英米文学科・准教授)
清水 美貴 (特別研究員 (2021年4月文学研究科英米文学専攻博士後期入学))
松木 ほのか (特別研究員 (2022年4月文学研究科英米文学専攻博士後期入学))

研究題目「伝統芸能における古典のよみがえり—継承と創造の可能性を探る—」

- 福田 美雪 (文学部フランス文学科・教授) 研究代表者
佐藤 かつら (文学部比較芸術学科・教授)
中野 芳彦 (文学部フランス文学科・准教授)

研究題目「『山吉文庫』の研究—森田甫三・千庵父子の日記と書状の研究—」

- 岩田 みゆき (文学部史学科・教授) 研究代表者
堀内 誠司 (特別研究員 (2024年4月文学研究科史学専攻博士後期入学))

研究題目「中世北インドのペルシア語文化とイスラーム学術」

- 二宮 文子 (文学部史学科・教授) 研究代表者
齋藤 健太郎 (特別研究員)

2025年度 活動報告

2025年

11月28日 シンポジウム「〈帰ってきた〉はじめての講談 これからの古典」
(人文科学研究所後援)

青山学院大学青山キャンパス 11号館 1階 1113教室

登壇者：

神田 伊織 (講師)

福田 美雪 (文学部フランス文学科・教授)

佐藤 かつら (文学部比較芸術学科・教授)

中野 芳彦 (文学部フランス文学科・准教授)

第一部：

「赤穂義士伝」レクチャー

第一席「赤穂義士伝 南部坂雪の別れ」

『レ・ミゼラブル』レクチャー

第二席『レ・ミゼラブル』より「ファンチヌ転落」

第二部：

「対談 これからの古典」

2026年

3月 『文学部附置人文科学研究所論叢』第7号刊行

2025年度 文学部附置人文科学研究所運営委員

所長 荒木 善太 (文学部フランス文学科・教授)

副所長 大屋 多詠子 (文学部日本文学科・教授)

久野 陽一 (文学部英米文学科・教授)

後藤 里菜 (文学部史学科・准教授)

池野 絢子 (文学部比較芸術学科・准教授)

吉岡 亮祐 (文学部フランス文学科・助手)

洛中・六角堂本尊考

——親鸞夢告にあらわれた白衣の聖僧をめぐって——

Considering the Principal Image in Rokkakudō Temple, Kyoto : the Image of the Holy Monk
with the White Robe in Shinran's Dream

津田徹英

Tsuda, Tetsuei

はじめに

一、六角堂参籠と親鸞への夢告

浄土真宗の祖・親鸞（一一七三～一二六三）の聖徳太子崇敬の原点を求めてみると、若き日の洛中・六角堂（のちの頂法寺）参籠時の夢告体験に行き着く⁽¹⁾。この親鸞夢告の研究は蓄積層も厚い。ただし、夢告にかかわったとされる六角堂の「救世菩薩」そのものについては、いまだ明らかにすべきことがいくつもあるように考える。本論は六角堂本尊を考察の対象としつつ、親鸞に夢告を行ったとされる白衣の聖僧に及んで、いささか私見を述べてみたい。

(1) 「六角（堂）夢想」と「親鸞夢記」
ここで先行研究に導かれながら親鸞の「六角夢想」について、基本事項を押さえておくこと以下の通りである。『親鸞伝絵』第三段（いわゆる「六角夢想」）には、以下の詞書⁽²⁾とともに、その場面が描かれている（挿図1）。

建仁三年^{癸卯}四月五日夜寅時、聖人夢想告まし〜き、

彼記云、六角堂の救世菩薩、顔容端嚴の聖僧の形を示現して、白衲の袈裟を着服せしめ広大の白蓮華に端座して、善信に告

命してのたまわく、

行者宿報設女犯、我成玉女身被犯、

一生之間能莊嚴、臨終引導生極樂^文、

救世菩薩、善信に言、此是我誓願なり、善信、此、誓願の旨趣を宣説して一切群生に聞^カしむへしと^{云々}、

尔ノ時、善信、夢ノ中にありながら、御堂の正面にして、東方をみれば、峨々たる岳山あり、その高山に教山^{ウチヤマ}万億の有情群集せりとみゆ、そのとき告命のことく此文の心をかの山にあつまれる有情に對して説きかしめをわるとおほえて夢悟畢^{云々}、

(以下略)

ちなみに、前段(第二段)には親鸞が法然の門を叩く「吉水入室」を収める。その詞書の冒頭には、それが「建仁第一の曆、春の比」であったと記す。一方、第三段の「六角夢想」では詞書(前掲)に明示されるように建仁三年(一二〇三)四月五日の明け方(寅時)の出来事として語られている。しかも両段には何ら接点を見出すことができない。しかしながら、次に掲げる親鸞の妻・恵信尼が親鸞の訃報に接して娘・覚信尼に宛てた自筆消息(西本願寺蔵 重要文化財「恵信尼消息」第三通)には、その在りし日々を懐かしみながら、親鸞の「吉水入室」の契機が六角堂參籠時の夢告にあったと述べている。恵信尼消息では、それがいつの出来事であったかということについては明確に述べられてはいないが、名畑崇氏が着目したよう



挿図1 『親鸞伝絵』「六角夢想」(部分) 文化庁(大阪・定専坊旧蔵)

に親鸞の大著『教行信證』巻六の「後序」には簡潔な記述ではあるが「愚禿親鸞、建仁辛酉、棄雑行兮帰本願」と自ら記していたことは重要であろう。^③文中の「建仁辛酉」は建仁元年を意味し、「棄雑行兮帰本願」とは、まさしく『親鸞伝絵』において語られる、親鸞が師の教えに導かれながら絶対他力への確信とその大道へと歩みを進めることとなった法然との出会い(「吉水入室」)、さらには、その契機となった「六角夢想」を含む一連の出来事を指すであろう。先行研究において指摘のあるように、『親鸞伝絵』にあつては両段の時系列が取り違えられており、事實はともに「建仁第一の曆」の出来事であった。^④親鸞の行実を知るうえで、その根本史料が『親鸞伝絵』であるという認識は変わらない。ただし、『親鸞伝絵』は編者・覚如の目を通して語られる事象であり、行実史料として扱う場合、そのことを斟酌したうえで用いる必要がある。

その第三段において語られた掲出の内容に立ち入ってみると、^⑤「六角堂の救世菩薩」以下、「一切群生に聞かしむべし」とまでは「彼記」に依拠したことが明示されている。

この「彼記」とは、親鸞の高弟・真仏(一二〇九〜一二五八)の手になる「親鸞夢記云」の書き出しをもって始まるもの(挿図2)^⑥



と基本的に同一内容である。「彼記」が「親鸞夢記」を指すであろうことは先行研究において支持される⁶⁾ところであり、論者も異論はない。もとより「親鸞夢記」は既に散逸して全容を知るべくもない。しかしながら、真仏の手によって見写されたことから、見写自体は真仏の生前、すなわち正嘉二年（一二五八）三月以前のこととなり、「親鸞夢記」そのものの成立も親鸞の存命中に遡る。そのことを思えば「彼記」（＝親鸞夢記）は、恵信尼消息の伝える六角堂での親鸞夢告の内容を補足・補強するであろう。

(2)「恵信尼消息」第三通

ここで「恵信尼消息」の当該箇所を呈示しておく⁸⁾と以下の通りである。

こそ（＝昨年）の十二月一日の御ふみ、同はつか（＝二十日）あまりに、たしかにみ候ぬ、なによりも殿（＝親鸞）の御わうしやう（＝往生）、中くはしめ（＝初）て申におよはず（及ばず）候、やま（＝比叡山）をい（＝出）て、六かくたう（＝角堂）に百日こもらせ給て、こせ（＝後世）をいのらせ給けるに、九十五日のあか月（＝暁）、しようたくたいしのもん（＝文）をむす（＝結）ひて、しけん（＝示現）にあつからせ給て候ひければ、やかてそのあか月い（＝出）てさせ給て、こせ（＝後世）のたす（＝助）からんするえん（＝縁）にあいまいら

せんと、たつ（＝訪または尋）ねまいらせて、ほうねん上人にあいまいらせて（以下略）。

この消息には恵信尼自らの手になる追而書があり、そこには「このもん（＝文）そ、殿（＝親鸞）のひへ（＝比叡）のやまに、たうそう（＝堂僧）つとめておはしましけるか、やまをいて、六かくたう（＝六角堂）に百日こもらせ給て、こせ（＝後世）の事いのり申させ給ける九十五日のあか月（＝暁）の御しけん（＝示現）のもん（＝文）なり、こらん（＝御覧）候へとて、かきしるしてまいらせ候」としたためられている。この追而書によって「御しけんのもん」が消息に添えられて娘・覚信尼のもとに送り届けられたことが窺われる。「御しけんのもん」そのものは伝わっていないが、「彼記」の記すところの「行者宿報」ではじまる四句の偈文がこれに相当すると解するのが自然であろう¹⁰。

(3) 白衣の聖僧

さて、ここに至って改めて『親鸞絵伝』が伝える「彼記」に立ち戻ってみると、六角堂参籠中の親鸞に夢告をなすべく示現したのは聖僧であったという。その姿かたちを「白衲の袈裟を着服せしめ広大の白蓮華に端座し¹¹」ていたと記す。その描写は『観自在菩薩如意摩尼転輪聖王金輪呪王経』に説かれる「白色^{ニテ}莊嚴^シ、結跏^{シテ}趺^ニ坐^ス白蓮華上^ニ」¹¹を踏まえたものであり、かつ、かの聖僧が親鸞に

示したという四句の偈文は、東密・勸修寺流の覚禅（一一四三）没年未詳）撰述の密教事相書『覚禅鈔』「如意輪」の巻の「本尊変王玉女事」の条に引用をみる如意輪観音の「別本軌」の所説「発^ニ邪見^ノ心^一ヲ、淫欲熾盛^{ニシテ}可^レレトモ墮^ニ落^ス於^ニ世^一ニ、如意輪我成^{リテ}王玉女ト、為^{リテ}其^ノ人^ノ親^キ妻^妾ト共^ニ生^キ愛^シ、一期生^ノ間莊嚴^シ（中略）西方極樂淨土^ヘ令^レ成^サ仏^道ト」にもとづくであろうことは、ともに夢畑崇氏によって指摘されて以来、久しい¹²。示現時の様態とともに夢告の内容について、親鸞その人に自覚があつたかどうかは定かでないが、これら如意輪観音にかかわる経軌の知識を内容及んで親鸞は理解していたように思われるのである。なお、このことが明らかになつて以来、親鸞が『覚禅鈔』そのものを見ていたかのような論調が少なからず見受けられる。しかしそれは誤認と考える。たまたま『覚禅鈔』に当該経軌の文言が収録されたことで今日に伝わり内容が知られたのであつて、親鸞が『覚禅鈔』そのものを見ていた訳ではないであろう。親鸞が披見に及んだのはそこに引用をみる「別本軌」そのものであり、認識の軌道修正を指摘しておきたい。

ここで『覚禅鈔』が言うところの「別本軌」について、いささか私見を述べておくと、『覚禅鈔』当該巻の「本書（具書）」のなかに記載のある『観世音秘密無障礙如意輪陀羅尼藏義経』がこれに相当するであろう¹³。同経は先に述べた『観自在菩薩如意摩尼転輪聖王金輪呪王経』ともども、一切経（大藏経）五千余巻のなかに見出すことはできない¹⁶。ただし、前者は八世紀の正倉院文書に残る写経所記録

のなかに名前を留めており、降って、九世紀末頃に安然によって編まれた『八家秘録（正しくは諸阿闍梨真言部類惣録）』にあつては如意輪法の経軌類のうちに分類されて記載をみる⁽¹⁸⁾。加えて十二世紀の密教諸師はその存在を知っていたようであり、一端が『覚禪鈔』における「別本軌」の名称での複数回の引用であつた⁽¹⁹⁾。若き日の親鸞が当時、それらの経軌を知り得る環境にあつたといふことであれば、それは自ずと堂僧時代の比叡山（延暦寺）内に限定されるであろう。ちなみに、『観世音秘密無障礙如意輪陀羅尼藏義経』は十二世紀の延暦寺に伝来していたようであり、⁽²⁰⁾『観自在菩薩如意摩尼転輪王金輪呪王経』についても『阿婆縛抄』如意輪の巻の数か所において引用がなされるところから、天台宗内に伝えられた如意輪観音関係の聖教のひとつであつたことは確かである。⁽²¹⁾

二、六角堂本尊の尊容をめぐる

さて、親鸞夢告をめぐる基本事項を押さえたうえで、「六角堂の救世菩薩」の実像に迫ってみよう。かの六角堂について平安後期に成立したとされる「六角堂縁起」に拠ってみると、⁽²²⁾その創建は、聖徳太子が四天王寺建立のための材木を求めて、自ら山城国の愛宕の杣に入った際に持参した念持仏の如意輪観音の小像⁽²³⁾の験を得て、梶（杉）の霊木一樹を見出し、これをもって六角堂を建立し、かの如意輪観音の像を安置したことにはじまるという。名畑崇氏の

研究によれば、「六角堂」は、『天台座主記』の記載から、建保六年（一一二八）九月の時点で山門の配下にあつたことが指摘されており、親鸞参籠の頃には天台寺院であつたとみて大過ない⁽²⁴⁾。

天台の事相書『阿婆縛抄』が収める「諸寺略記」のひとつ、「六角堂」の条には、太子建立を伝えるとともに本尊について「二臂、如意輪^{救世観音是也}」と記している⁽²⁵⁾。また、『同』如意輪の巻では、六角堂の本尊について「聖徳太子七生、御本尊也」とも伝えている⁽²⁶⁾。『親鸞伝絵』において「彼記」の引用をもって語られた「六角堂の救世菩薩」とは、太子ゆかりの六角堂の本尊そのものであつたということになる。かつ、『阿婆縛抄』が明示するように、その姿は「二臂、如意輪」観音であつた。しかし、この「二臂、如意輪」観音そのものの姿かたちについてはこれまでいまひとつ明確でなかつたように思われる。ちなみに『阿婆縛抄』如意輪の「第三形像事」には、「件像、持蓮施願印也」とも記している⁽²⁷⁾。しかし六角堂はひとまず鎌倉中期にまで限定してみても、天治二年（一一二五）十二月の堂宇焼失以来、十度に及んで六角堂の罹災が史料上で確認できる⁽²⁸⁾。『阿婆縛抄』が述べるところの六角堂本尊の手印が「持蓮施願印」であつたとすることが、はたして当初の姿を伝えていたかどうかは検討の余地を残すであろう⁽²⁹⁾。

そこで改めて六角堂本尊の尊容について考えてみると、手がかりになるのは、保安元年（一一二〇）造立の京都・広隆寺上宮本院本尊木造聖徳太子立像⁽³⁰⁾の像内に納められた蓮台付き銅製鍍金の心

月輪にある。それは、太子像の内割り部全面に金箔を施して、聖なる空間を作り出し、その胸部付近に横棧を渡して安置されたものであった。その心月輪の表面中央には上方を大きく開いた筒型の宝冠を戴く二臂の半跏思惟形菩薩をケガキ線で刻み、傍らに「救世観音」の刻銘をともなっている（挿図3）。その姿は心覚（一一一七〜八一）撰『別尊雜記』所収の「四天王寺救世観音像聖如意輪云々」という傍書きがともなう二臂の半跏思惟形菩薩（挿図4）との親近性を示すことは見過ごせない。



この心月輪を像内に納置する広隆寺上宮王院像の像内背面の墨書銘記の解説・研究によると、造像を発願した定海は、十四歳で太子に結縁し、修学の間を比叡山に求めるとともに、その後、天台の宗色を強めていた大阪・四天王寺に活動の場を移した僧であったことが明らかに33なっている。そのことを思えば、「四天王寺救世観音像聖如意輪云々」の図像と上宮王院像の像内納置の心月輪中にあらわされた「救世観音」の姿かたちに親近性が認め得ることも頷けるものがある。そして、この像内への納置こそは、太子が救世観音の化身であったという本地と垂迹の関係を示していることについても多言を要しない。その心月輪にあらわされた「救世観音」の図像表現を確認したうえで論者が注目してみたいのは、京都・三千院と蘆山寺に伝えられた救世観音菩薩像にある。



(1) 京都・三千院 救世観音菩薩像

この三千院の尊像（以下、三千院像、挿図5）が救世観音をあらわすことは、納入願文の冒頭に「南無救世観世音菩薩」と宝号を七遍記すことから明らかであり、併せて寛元四年（一二四六）の造立であったことも同願文より判明する。⁽³⁴⁾ その画像表現が、心覚が示した「四天王寺救世観音像^{聖如意輪云々}」の図像に拠っていることも一目瞭然である。三千院像において見過ごせないのは、用材の選定において頭体幹部の前半材のみに杉を用い、その他の部材をすべて檜としていた点にある。⁽³⁵⁾ 三千院像の大きさ（像本体の総高六六・六cm）を思うとき、すべての用材を檜もしくは杉で統一して調達することは可能であったはずである。それをあえて頭体幹部の前半のみに限定して杉材を用い、二臂の「救世観世音菩薩」として造頭をみたことは、単純に「四天王寺救世観音像^{聖如意輪云々}」の再現に留まらない意図がそこに示唆されているであろう。ここで改めて想起すべきは、上述の「六角堂縁起」に述べられるところの、四天王寺造営のための材木調達を目的に太子自ら山城国愛宕の杣に入った折に、はからずも得た杉の霊木をもって六角堂の造営を成し遂げたという逸話そのものにある。この逸話を踏まえると、杉材が太子建立の六角堂はもとよりそこに安置をみた太子ゆかりの「二臂ノ如意輪」観音とされる「救世菩薩」の暗喩（メタファー）となり得たように考えられるのである。すなわち、三千院の二臂「救世観世音菩薩」像の造頭に際して、頭体幹部の前面という要所に限定して杉材を用いたことで、

かえって用材の意識的選択があり得たことを際立たせるとともに、この杉材にこだわる造像意識こそは、それが「二臂」の「救世観世音菩薩」として造頭されたという事実と相まって、三千院像が六角堂安置の本尊像の再現であったことを浮かびあがらせるであろう。

(2) 京都・蘆山寺 救世観音菩薩像（金山天王寺旧本尊）

蘆山寺救世観音菩薩像（以下、蘆山寺像、像高一三四・八cm）（挿図6）は、構造の詳細は明らかにしえないが、寄木造の尊像であり、内刳りを施して玉眼を嵌入する。現状、黒色を呈しているが、本来は漆箔仕上げであったようである。造像は十三世紀に遡るであろう。明治七年（一八七四）二月に官許をもって併合された洛中・金山天王寺（天台宗）の本尊であった。この併合時に蘆山寺に移管された『金山天王寺縁起絵巻』（十六世紀中頃）が伝えるところに拠れば、



守屋合戦の戦勝祈願に際して如意輪観音の堂舎建立を誓願し、用材調達のために太子自ら山城国愛宕の柚に入った折の靈験により建立の適地を知るといふ内容となっている。³⁶⁾それは明らかに『六角堂縁起』のモチーフを取り込んだものであり、物語構造のうちに「六角堂縁起」の投影を認めることができる。

蘆山寺像は、これまでその図像表現を手がかりにして先述の三寺院像ともども「四天王寺救世観音像聖如意輪云々」の模刻像と認知されてきたが、本尊にかかわる縁起のうちに「六角堂縁起」が取り込まれていたこと、加えて、先に眺めた三千院像が同一の図像に拠りながら六角堂本尊のイメージを再現していた可能性があることを思えば、やはり蘆山寺像においても六角堂本尊への意識と投影をそこに認め得るように考えるのである。

ここに至って六角堂に立ち戻るとき、六角堂は平安後期以来、京師洛中における聖徳太子建立の「日本最初ノ伽藍」を喧伝する天台の観音霊場寺院であった。³⁸⁾かつ、「聖徳太子七生ノ御本尊」と伝える「二臂ノ如意輪」である「救世観音」を本尊とし、「六角堂縁起」が語る創建逸話のうちに四天王寺との関わりが示唆されていた。三千院像と蘆山寺像といういずれも山城国において造顕をみた両像について、四天王寺からの直接の図像の流入と採用を一元的に想定するよりは、天台を基盤とする相互のネットワークのなかで図像情報が共有されながら、六角堂本尊の写しとしての意識が少なからず及んでいたように考えるのである。両像の表象のうちにこれまでヴェー

ルに包まれていた六角堂本尊の具体的な姿かたちが浮かび上がるようになるであろう。

ちなみに六角堂の創建について、「六角堂縁起」では太子創建とするものの、その時代にまで遡るかは懐疑的とされている。すなわち、境内地の発掘による出土遺物は平安時代中期を遡らない。³⁹⁾加えて、史料上の「六角堂」の初見は、藤原実資の日記『小右記』寛仁二年（一〇一八）十一月二十二日条に見える「早且修誦六角堂」であり、⁴⁰⁾「六角」という街路名の初見は『親信卿記』天延二年（九七四）九月二十五日条の「度六角小宅」に求められるとする。⁴¹⁾そしてそれらのことを判断材料として六角堂の創建は遡っても九五〇〜九七〇年頃であろうとの推定がなされている。⁴²⁾ここで、その本尊に四天王寺に由来する二臂の「如意輪」と目された救世菩薩像の図像が採用されていたこと、および「六角堂縁起」が述べるところの創建の契機が四天王寺建立のための用材を求めて太子自らによる柚入りであったとすることを重視するならば、その創建と安置本尊の選定には、四天王寺とも密につながりをもった天台僧の介在と京師洛中での勧進が想定され得るのである。⁴³⁾

その六角堂が観音霊場として貴賤の信仰を集めるのは十二世紀のことであった。⁴⁴⁾『寺門高僧記』巻六のなかに収められた応保元年（一一六一）正月より七十五日を要した覚忠の観音巡礼三十三所の記録のなかには、「廿九番、同（津田註）山城）國六角堂都内、九間南向、本尊如意輪三尺金銅、願主聖徳太子或記云金銅三手如意輪」とあり、⁴⁵⁾ここに

本尊の規模が「三尺」で材質は「金銅」であったことが明らかとなる。あわせて本堂の規模が「九間」で「南向」であったと明記されている。それは南向き・平入りの間口九間の母屋の周囲四方に庇の間をともなった寄棟造、もしくは入母屋造の建築空間であったとみることができ⁽⁴⁶⁾。六角堂という堂名に由来する平面と外観を変更してまで堂宇の規模を拡大していたことは、当時、六角堂に参詣・参籠する人々の収容を優先させた寺家の配慮・決断と参詣者であふれる寺院そのものの隆盛の一端を示すものであろう。『阿婆縛抄』において、六角堂が「日本最初ノ伽藍也、聖徳太子七生御本尊也」と記されていたことも、参詣者に向けての喧伝の一端を伝えるものとみなされる⁽⁴⁷⁾。まさしく六角堂は、京師洛中唯一の聖徳太子を本願とする一大観音霊場である天台寺院であったということになる⁽⁴⁸⁾。そして、そのことのうちに当時、叡山の堂僧であった若き日の親鸞の耳目と関心を惹きつけ⁽⁴⁹⁾、六角堂へと参籠に向かわせる誘因があったように考えるのである。

三、六角堂本尊「救世菩薩」と親鸞

先に掲げた恵信尼の当該消息には百日を期して始めた六角堂参籠の九十五日目の暁に「しようとかたいし」が「もん(文)をむすひ(結)て」示現したことを伝えている⁽⁴⁹⁾。それは恵信尼が夫・親鸞から生前に直接そのように聞き及んでいたということであろう。そのことを

「彼記（＝親鸞夢記）」では、六角堂の「救世菩薩」が親鸞の前に聖僧として示現して告命したと記している。この恵信尼消息における言及と「彼記（＝親鸞夢記）」が記すところの両者に整合性を求めてみるならば、親鸞は、かの聖僧を「救世菩薩」を本地とする太子の化現と捉えていた節がある。そのことを理解するために一瞥しておきたいのは、親鸞晩年に集中する太子関係の撰述書のうち、現在知られる最も成立の早い建長七年（一二五五）十一月晦日に完成をみた『皇太子聖徳奉讃』にある。それは七十五首をもって構成されており、冒頭に「日本國歸命聖徳太子、佛法弘興ノ恩フカシ、有情（津田註＝衆生）救済ノ慈悲ヒロシ、奉讃不退ナラシメヨ」という総礼句を置いて、続く導入部には「六角堂縁起」にもとづく和讃九首（第二首から第十首まで）が記されている⁽⁵⁰⁾。建仁元年（一二〇一）の六角堂での夢想以来、建長七年（一二五五）の『皇太子聖徳奉讃』に至るまで、親鸞の述作には表立って太子仰讃が著述にあらわれることはなかった。しかしながら、晩年に及んで推敲が続けられてきた『教行信證』の後序には自らの転機を「愚禿親鸞、建仁辛酉、棄雑行兮帰本願」と記しており、その意味するところを思えば（既述）、太子への思念は永く心の奥底に内在しており、漸くそのことが立ち現れてきたのが『皇太子聖徳奉讃』であったということになる。しかもそこでは六角堂の救世菩薩（救世観音）への思いが真つ先に綴られていた。親鸞にとつて太子ゆかりの寺院ということであれば、意識の向かう先の第一は法隆寺でも四天王寺でもなく、やはりまず

京師洛中の六角堂であったということであろう。親鸞は『皇太子聖德奉讃』において七十五首の和讃の直後に「南无救世観音大菩薩、哀愍覆護我、南无皇太子勝鬘比丘、願佛常攝受(傍点論者)」と記している⁽³²⁾。それは太子仰讃の結句であり、略回向文の様相すら呈する⁽³³⁾。かつ、文言のうちに親鸞は太子を「勝鬘」という法名をもつ出家者(「比丘」として捉えていたことが窺えよう。そのことこそまさしく若き日の親鸞が六角堂において示現に預かったという白衣の聖僧のイメージと照応するものであった。⁽³⁴⁾この理解に立つとき、「しようとかたいし」が「もん(文)をむすひ(結)て」示現したことと、「六角堂の救世菩薩」が「聖僧の形を示現して」「告命し」たことの両者は無理なく結びつくように考えるのである。

註

(1) なお、三重・専修寺に所蔵される「三夢記」(建長二年文書)が述べるところの、それ以前の二回に及んだ親鸞への夢告、すなわち初度は建久二年(一一九一)の聖徳太子からの夢告、二度目は正治二年(一一二〇)の如意輪観音よりの夢告をめぐっては、「三夢記」そのものの信憑性についての議論が長くあり、ここではそのことに触れない。古田武彦『親鸞思想―その史料批判―』第一編第一章「若き親鸞の思想」(富山房、一九七五年、三〇八五頁)、山田雅教「伝親鸞作「三夢記」の

真偽について」『高田学報』七五輯、高田学会、一九八六年。古田武彦「新・親鸞の史料批判―建長二年文書(三夢記)の信憑性に関して―山田論文に答える―」『親鸞思想(古田武彦著作集 親鸞・思想史研究編Ⅱ)』明石書店、二〇〇三年(九九七―一〇二三頁)。山田雅教「再論 伝親鸞作「三夢記」の真偽について」『高田学報』九二輯、高田学会、二〇〇四年。籠弘信「「三夢記」考」『宗教研究』三六六号(八四卷三号)、日本宗教学会、二〇一〇年。

(2) 詞書は西本願寺本の写真版に拠った。なお、原文にある振りがなについてはこれを略した。

(3) 名畑崇「六角堂考―特に如意輪の信仰をめぐる親鸞の六角夢想到及ぶ―」『大谷史学』一〇号、大谷大学史学会、一九六三年。

(4) 赤松俊秀『親鸞(人物叢書)』吉川弘文館、一九六一年(四〇―六九頁)。なお、宮地廓慧『親鸞伝の研究』百華苑、一九六八年(二二―二二、八三―一〇三、一三八―一四三頁)では、当該の恵信尼消息が伝えた法然のもとで学ぶきっかけとなった親鸞の六角堂参籠と、覚如が『親鸞伝絵』に採用した「六角夢想」の出来事を別々のものと捉え、二度の六角堂での夢告を想定している。しかしながら、『猪熊閔白記』建仁元年十一月六日条には三条室町界隈を襲う大火で六角堂焼亡を伝えている(『大日本古記録 猪熊閔白記』三、六三頁)。ここで記録に残る平安後期から鎌倉中期における六角堂の度重なる炎上記録の

うち（後掲註28参照）、再建供養にまで言及のある記録を考慮すると、再建にはいずれも数年を要したようである。とすれば『親鸞伝絵』が伝えた「六角夢想」のあった建仁三年四月五日の時点において、既に堂宇が再建され、参籠が出来る状態にあつたかどうかは慎重にならざるを得ない。

(5) この文書は真仏書写の『経釈文聞書』（三重・専修寺蔵）に収載されていたが、享保十四年（一七二九）に当該部を抜き出し、軸装に仕立てて今に伝わる（平松令三『親鸞（歴史文化ライブラリー37）』吉川弘文館、一九九八年、六七〜七〇頁）。

(6) 名畑崇「親鸞の六角夢想の偈について」『真宗研究』八輯、真宗連合学会、一九六三年（のち、『親鸞（日本名僧論集 第七巻）』吉川弘文館、一九八三年に収載、二二頁）。

(7) 真仏の高弟顕智（二二二六〜一三二〇）自筆の『見聞』に収められた「御入滅之日記事」には「真仏法師 三月八日 御年五十」と記されている（『影印 高田古典』第三巻 顕智上人集中、真宗高田派宗務院、二〇〇一年、三六八頁）。ちなみに、京都・光園院本『親鸞聖人物御門弟等交名』の真仏往生のことが記される箇所の料紙（第三・四紙）は近世の後補であるが、そこには真仏の没年を「正嘉二年三月八日春秋^{歳五十}遷化」と記している。『見聞』のそれと祥月命日と往生時の年齢が合致することから、ひとまずそこに伝えられた「正嘉二年」を没年と認めて支障ないであろう。

(8) 文言は写真版に拠って翻刻し、意味内容を把握しやすいよう

に適宜、文中に括弧を付して対応する漢字を恣意に付したことを断わっておく。

(9) 註8に同じ。

(10) 註4の宮地廓慧前掲書（前掲の各頁）では、二度の六角堂における親鸞夢告を想定したため、「親鸞夢記」が伝える「行者宿報」以下の四句の偈文と「しよとくたいしのもん」をそれぞれ別々のものとみなさざるを得ず、「しよとくたいしのもん」については、親鸞の『上宮太子御記』、あるいは「皇太子聖徳奉讃」（覚信授与本）に引用をみる「廟軀偈（三骨一廟偈）」を想定している。しかし、その想定は、註1の古田武彦前掲書第一編第一章「若き親鸞の思想」において否定されている。

(11) 註6の名畑崇前掲論文（『同』二六頁）が挙げた『圖像抄』には文言の出典が記されていないが（『大正新脩大藏經』圖像3―二八a）、『覚禅鈔』如意輪における同文の引用に際し出典を明記している（『大正新脩大藏經』圖像4―八八a）。

(12) 『大正新脩大藏經』圖像編4―八六六b。

(13) 註6の名畑崇前掲論文（『同』二六―二八頁）。

(14) 今井雅晴『親鸞と浄土真宗』吉川弘文館、二〇〇三年（二四頁）。山田雅教「六角堂夢告私考」『真宗研究』四九号、真宗連合学会、二〇〇五年。

(15) 東台密における事相書において、尊別に項目を立ててこれを本格的に取り上げる場合、「本書」あるいは「具書」という項目を掲げて編者が認知している（披見に及んでない標題だけ認

知しているものも含めて)当該尊の関係経軌類が一覧として列記されることが通例である。文言の引用も、基本、その中からなされる。覚禅が「別本軌」と呼んだものがそのなかのどれを指していたかを考えてみると、まず確認しておかなければならないのは『覚禅鈔』如意輪の「本書」の項に列挙された十八件の関係経軌類についてである。その配列は安然(八四一頃、九一五頃)撰『八家秘録(諸阿闍梨真言部類惣録)』の「如意輪法」の項目の記載に倣いながら適宜、重要度を考慮して順番の入れ替え、あるいは、『八家秘録』に漏れているものを取り込んで記載が成り立っていたようである。それらのうち、現存するものを「別本軌」の文言と照合してゆくと、残るのは、①「観世音秘密無障礙如意輪陀羅尼藏義経 一卷秘録梵闍本」、②「観自在菩薩如意摩尼転輪聖王金輪呪王経 一卷法務抄云無語家録、但諸師引用之」、③「観自在菩薩如意輪瑜伽秘密念誦儀軌 一卷無訳者」、④「聖如意輪観自在菩薩修行儀軌 一卷無訳者」、⑤「観自在菩薩如意輪陀羅尼 一卷不空慈」、⑥「如意輪王摩尼跋陀別行法印 一卷慈秘録無之」、⑦「如意輪菩薩真言注義 一卷慈」、⑧「如意輪要略法 一印安祥」、⑨「如意輪陀羅尼注 一紙不空三藏註 釋林」の九件である。これらのうち、⑤以下は『八家秘録』にある記載をそのまま持ち込んだようであり、覚禅は披見をしていなかったように思われる。③と④については傍らに「已上二本内、大略同」と記されることのように覺禅の実見が窺われよう。そして仮にそれらが引用さ

れた場合、両者が混同されないように注記をつけるはずである。したがってこれらも「別本軌」の候補から除外されるであろう。かくして残った①か②のいずれかが「別本軌」を指していたことになる。ただし②の引用に際しては「金輪呪王経云」を明記している(上巻は一か所、下巻は「形像門」の項において五か所、および、裏書において二か所に言及がある)。とすれば残る①「観世音秘密無障礙如意輪陀羅尼藏義経 一卷秘録梵闍本」が「別本軌」に相当することになるであろう。ちなみに「別本軌」からの引用は『覚禅鈔』如意輪の上巻においては一か所、下巻においては十五か所に及んでいる。「本書」の列記において覚禅は一番目に「経云大本」と呼んだ「如意輪陀羅尼経 一卷」を、二番目に「経云義浄」と呼んだ「観自在菩薩如意輪心陀羅尼経 一卷」を記載して、三番目にこれを位置付け重視していた節があり、「別本軌」と呼んだ所以もそのあたりに求められよう。

(16) 一切経の基幹をなした『開元釈教録』(唐・開元十八年(七三〇)智昇編)、あるいは、勅撰の『貞元新定釈教目錄』(唐・貞元十六年(八〇〇)円照編)には両経の登載は認め難い。

(17) 『観世音秘密無障礙如意輪陀羅尼藏義経』の名は、天平九年の書写(大日本古文书)編年文書二四卷五七頁)を初出として、天平十八年(『同』二四卷三三八頁)、天平二〇年(『同』二四卷五三七頁)、天平勝宝三年(『同』一二卷一四六頁)、天平神護三年(『同』一七卷四七頁)に及んで五件の記載が確認できる。

- (18) 『大正新脩大藏經』55—1—1—2—3 b。
- (19) 註15参照。
- (20) 嘉保二年(一〇九五)の『勘定前唐院見在書目録』(叡山文庫保管)に記載のある「観世音菩薩秘密藏無障礙如意心輪廣大円満大陀羅尼經一卷」がこれに相当するように考える。
- (21) 『阿婆縛抄』如意輪の巻では「観自在菩薩如意摩尼転輪聖王經(もしくは如意摩尼転輪聖王經)」の名称をもって四か所で見用をみる(『大正新脩大藏經』図像9—1—1—5 c—1—1—6 b)。ちなみに、『覚禪鈔』如意輪(下巻)の「本書」の項における「観自在菩薩如意摩尼転輪聖王金輪呪王經一卷」の記載に続いて割注には「法務抄云、無諸家録、但諸師引用之」とあり(『大正新脩大藏經』図像4—1—8—4 c)。「法務」すなわち東密勸修寺流の興然(一一二一—一二〇四)の言説として、院政期にあつては東密に限らず真言諸師の間では比較的よく知られた経軌であつたことが示されている。事実、興然の『四卷』第三(『大正新脩大藏經』78—1—1—2 a)や、同時代の台密の静然の『行林』第三九(『同』76—1—2—5 a)にも引用が認められる。
- (22) 柏原史子「『六角堂縁起』注釈」(小林真由美・北條勝貴・増尾伸一郎編『寺院縁起の古層』法蔵館、二〇一五年、一九三—一九八頁)に拠る。
- (23) 「六角堂縁起」に拠れば、この「如意輪観音、淡路国巖屋海、小韓櫃^ニ入^テ乍^ラ差^シ鑊、被打寄也、而聖徳太子取開^ト見^レ之^ル処、即
- (24) 如意輪観音也」と記す。
- (25) 註3の名畑崇前掲論文。
- (26) 『大正新脩大藏經』図像9—1—7—5—2 b—c。
- (27) 『阿婆縛抄』如意輪の「第三形像事」の項には「六角堂日本最初伽藍也、聖徳太子七生御本尊也、尤可仰崇」と記している(『大正新脩大藏經』図像9—1—1—6 a)。また、「第一可修此法事」には「私案云、聖徳太子者(中略)観音後身也、以如意輪尊為七生之本尊^{六角堂観音是}」の記載がある(『同』図像9—1—1—4 b)。
- (28) 『大正新脩大藏經』図像9—1—1—6 a。
- (29) 『平安京六角堂の発掘調査(平安京跡研究調査報告 第二輯)』古代學協會、一九七七年(七二—七三頁)に拠つて、十度に及んだ六角堂の罹災年次を示してみると以下の通りである。① 天治二年(一一二五) 十二月五日、② 康治二年(一一四三) 十二月八日、③ 建久四年(一一九三) 十二月七日、④ 建仁元年(一二〇一) 十一月六日、⑤ 建永二年(一二〇七) 四月五日、⑥ 建保元年(一二一三) 十月十五日、⑦ 同三年(一二一五) 十二月二十二日、⑧ 寛元四年(一二四六) 六月六日、⑨ 建長元年(一二四九) 三月二十三日、⑩ 文永五年(一二六八) 一月十四日。
- (29) ちなみに、六角堂(頂法寺)秘仏本尊の現、前立ち尊三軀はいずれも六臂の如意輪観音像であつた(特別展図録『聖地を

- たずねて―西国三十三所の信仰と至宝―』京都国立博物館、二〇二〇年、図版95、96)。
- (30) 伊東史朗編『調査報告 広隆寺上宮王院聖徳太子像』京都大学学術出版会、一九九七年。
- (31) 『大正新脩大藏經』図像3―二二七。
- (32) 註30の伊東四朗前掲書参照。
- (33) 藤井由紀子「聖徳太子霊場の形成―法隆寺・四天王寺と権門寺院」『変貌する聖徳太子』吉田一彦編、平凡社、二〇一二年、一六九―一七〇頁。
- (34) 根立研介「救世観音菩薩像 京都 三千院」『日本彫刻史基礎資料集成』鎌倉時代造像銘記篇六 解説、中央公論美術出版、二〇〇八年、六〇―六三頁。
- (35) 註34の根立研介前掲解説。
- (36) 『金山天王寺縁起絵巻』については以下の研究に拠った。川勝政太郎「金山天王寺雑記」『史迹と美術』九八号(二〇輯ノ一)、史迹美術同致会、一九三九年。渡辺信和「大覚寺蔵本『金山天王寺縁起』影印及び翻刻と書誌」『同朋学園仏教文化研究所紀要』一二号、同朋大学、一九九〇年(のち同『聖徳太子説話の研究―伝と絵伝と―』新典社、二〇一二年に収載)。榊原悟「二つの『金山天王寺縁起絵』」『聖徳太子信仰の美術 四天王寺開創一四〇〇年記念出版』大阪市立美術館監修、東方出版、一九九六年。土谷真紀「京都・蘆山寺蔵『金山天王寺縁起絵巻』の画風をめぐる」『お茶の水女子大学人文科学研究』十六巻、二〇二〇年。
- (37) 註36の前掲『聖徳太子信仰の美術』(三二九頁中段)。
- (38) 註26参照。なお、平安時代における観音霊場としての六角堂の様相については註28の前掲報告書第五章第二節「文献よりみた六角堂(臈谷 寿 執筆)」(六七―七二頁)、註22の柏原史子前掲「六角堂縁起」注釈の「三考証「六角堂縁起」の成立と平安時代の信仰―聖徳太子信仰との関係―」(同「一九九―二一八頁)を参照されたい。
- (39) 註28の前掲報告書四三頁第12図―2。
- (40) 『史料大成二』小右記二(二一九頁下段)。
- (41) 『大日本史料』第一編之十五・天延二年雜載 諸家(二一〇頁)。
- (42) 註28の前掲報告書第五章第二節「文献よりみた六角堂(臈谷 寿執筆)」(六三頁)。
- (43) 本文中で保安元年(一一二〇)造立の広隆寺上宮王院像が、四天王寺を活動の場とした天台僧・定海による発願・造立であったことに及んだが、これに先行して、そのような僧侶の京師洛中での活動と関与が想定されるであろう。
- (44) 註38参照。
- (45) 『続群書類従』第十八輯上(釋家部 卷第八百十一)。
- (46) 註28の前掲報告書第五章「考察(佐々木英夫執筆)」(五五―五六頁)。なお、佐々木氏の考察では「九間」堂を六角堂の

覆堂と解されたが、多くの貴賤参詣・参籠に対応すべく、康治の焼失を機に「九間」堂に改築され、六角堂の規格は壇上の厨子に継承されたと考えることもできるであろう。

(47) 註26参照。

(48) 本文中で言及した覚忠による応保元年(一一六一)正月の三十三所観音巡礼の記録のなかで、太子を本願とする洛中寺院は六角堂のみである(註45参照)。

(49) 後述の親鸞撰『皇太子称徳奉讃』において六角堂に言及する際、「日本國ニハコノ御テラ、仏法最初ノトコロナリ」(第九首)と記しており、親鸞もそのような認識に立っていた節がある。

(50) この「しよとくたいしのものむすひて」の解釈(主語を誰と考えるか)には、これまで以下の三種が存在したようである。すなわち、①「聖徳太子」が「文を結びて」(註4の赤松俊秀前掲『親鸞(人物叢書)』四四頁)。②親鸞が「聖徳太子の文を結びて」(石田瑞磨『親鸞とその妻の手紙』春秋社、一九六八年、二二三頁)、③六角堂の救世菩薩が「聖徳太子の文を結びて」(細川行信「聖徳皇のめぐみ」『親鸞教学』一号、大谷大学真宗学会、一九六二年、藤島達朗「聖徳太子と親鸞聖人」『日本仏教学会年報』二九号、同学会、一九六四年など)の三通りである。要は古語における格助詞の「の」を、主格の「の」と捉えるか、連体修飾格の「の」と捉えるか、いずれが適切かということである。後者を採用した場合、新たに主語を設定しなければならぬという問題が生じる。このことをかんが

みて本論では素直に当該文の「の」を主格「の」の用法と理解して①を採用した。なお、「もんをむすひて」とあることについて梅原真隆『恵信尼文書の考究』(永田文昌堂、一九六〇年、二七頁)や註3の古田武彦前掲書(五六頁)では「結び文」と解釈しているが、必ずしもそのように解釈する必要がないことについては、旧稿(津田徹英「中世真宗における聖徳太子画像の受容と展開——三朝体現の垂迹太子への視座」『聖なるものの形と場 (International Symposium 18: FIGURES AND PLACES OF THE SACRED)』国際日本文化研究センター、二〇〇一年、一一五頁註13)において指摘した通りであり、そのことは『松子伝』太子四十八歳条に「太子御存生日之時、太子自_ラ御廟_ノ西_ノ石_ニ結_ヒ偈_ヲ注(しる)レ_ス之_ヲ」とある用例から明らかである。この「しよとくたいしのものむすひて」の解釈について、論者と同じ理解に立つ研究に註14の山田雅教前掲論文がある。

(51) 『大正新脩大藏経』83—六六九c—六七〇a。『影印 高田古典』第一巻 真仏上人集、真宗高田派宗務院、一九九六年(一一二〇頁)。なお、『皇太子聖徳奉讃』に言及のある六角堂の「縁起」は内容から判断して、「六角堂縁起」(註22参照)とは別物であったようである。

(52) 『大正新脩大藏経』83—六七二b。

(53) なお、その直後には『四天王寺御朱印縁起』の末文「皇太子

佛子勝鬘、是縁起文納置金堂内籃、不可披見手跡猥、乙卯歲正月八日」を引用して括筆としている（『大正新脩大藏經』83―六七二b、註51の前掲『影印高田古典』八九頁）。

(54) そうとみると、親鸞および真宗門徒によって信奉された太子像が正中で髪を左右に振り分けた垂髪（たれかみ）の童子をもつてあらわされていたことに及ぶ必要があるが、このことについては稿を改めて考えてみたい。

【挿図 出典一覧】

挿図1 筆者熟覽時に撮影

挿図2 『影印高田古典』第一巻、真佛上人集、真宗高田派教学院、一九九六年

挿図3 『調査報告 広隆寺上宮王院聖徳太子像』京都大学学術出版会、一九九七年

挿図4 『御聖忌記念特別展 聖徳太子日出づる処の天子』大阪市立美術館・サントリー美術館、二〇二一～二〇二二年

挿図5 『聖徳太子展』東京都美術館・大阪市立美術館・名古屋市博物館、二〇〇一年

挿図6 『聖徳太子信仰の美術 四天王寺開創一四〇〇年記念出版』東方出版、一九九六年

越後の漢方医・森田甫三宛書状について

—— 洪川道達書状を中心に ——

The Research Note about New Letters to Morita Hosan Centering on from
Dōtatsu Shibukawa

堀内誠司

HORUCHI, Seiji

はじめに

本稿は、青山学院大学図書館蔵「山吉文庫」^①に含まれる、近世後期に越後国蒲原郡加茂町を拠点として活動した漢方医・森田甫三宛の書状を紹介するものである。以下では、まず森田甫三についてその概略を述べたのち、本稿で特に取り上げる書状の差出である洪川道達について現在判明している事柄を整理する。次に道達から甫三に宛てた書状四点および道達の死去を伝える書状一点を紹介し、甫三と道達の交友関係の一端を垣間見たい。

一・森田甫三と洪川道達について

森田家については、蘭方医であった森田千庵が最もよく知られているが、甫三はその父にあたり、山吉文庫に書簡を中心として多くの史料が残されている。

森田甫三（一七六七—一八二八）については、片桐一男氏^②によって一定の事績が明らかにされている。甫三は諱を立、字を君柔、幼名を玄順といい、のち甫三に改名した。号としては、楽山堂や静斎などが知られる。十八歳の時に江戸へのほり、六年間御本丸医師・岡甫庵のもとで学んだ。その後は帰郷して同じく漢方医だった父の医業を継ぎ、その治療手腕は大変評判だったという。特に本草学に

造詣が深く、病理・薬剤の研鑽に努めたと評価されている。

さて、その甫三と文通をしていた洪川道達については、管見の限り目立って取り上げられることはあまりなかった。それでも、特に森田甫三・千庵父子について述べた諸論考中において断片的に触れられている。

例えば片桐一男氏は、文政六年（一八二三）十二月三日付の千庵から甫三に宛てた書状を紹介する中で、千庵の『人名録』³⁾に記されている「医師洪川道達、小川町榊原遠江守様御内」「男甫仙、本所五ツ榊原様下屋敷ニテ」という記述を紹介している。また、同じく文政六年に千庵が江戸に留学した際の親交相手の一人としても、改めて道達の名が挙げられている。⁴⁾

また、森川政一氏は、主に近代初期を中心とした上越地域の医学史を述べるなかで「弘化年代（二八四五―一八四八）における榊原藩の御家中分限帳に見られる藩医」として「陸奥国白川郡釜子陣屋詰」「十人扶持 医師 洪川道達」を挙げているが、後述の没年を考慮すると年代に矛盾がある。

このように、洪川道達については森田父子と関係のある人物として触れられているものの、位置づけや具体的な情報については「千庵の『人名録』」に名がある榊原家医師」に留まっております、更なる追究の余地が残されている。

道達について、甫三に差し出された書状を除いてその実態を伺える史料は僅かであるが、天保十年（一八三九）七月から記録が始まっ

た、越後国蒲原郡大郷村の洪川家の記録『官遊私記』⁶⁾に道達の名を見ることが出来る。記録が始まって間もない同年八月十七日条には、以下のような記述がある。

一 八月十七日 朝吉辰、親類書并請判見届として、目附遠藤庄兵衛、喜多川三左衛門宅迄来ル、両書共印判相済同人へ渡之、但親類惣代同姓道達名代罷出ル、庄兵衛義別御用^ニ而外廻リ、三郎助即刻永田町惣長屋へ請状相済忝由回勤引取、
親類書

一、本國開賀
生國後
洪川三郎助
年三十五

一、祖父母
何国何所郷土
死か生か

一、父母

一、兄弟

一、妻子

一、親類
榊原式部大輔御手医師
洪川道達

一、従父違
富士見御宝蔵番
喜多川三左衛門

右之義忌近親類無御座候、

年号月日
洪川三郎助^(助) 両判

大橋円助殿
牧野 貢殿
牧野龍弥殿

これによると、渋川家の「新類書」と「請判」を「見届」けるため、目付の遠藤庄兵衛が喜多川三左衛門の宅まで来たこと。渋川三郎助は「親類書」「請判」両方に押印をして庄兵衛へ渡した⁽⁷⁾こと。但し道達の名代が「親類惣代」として三左衛門宅に参上した⁽⁸⁾こと。庄兵衛は別用で外回りに出たので、大郷村庄屋の渋川三郎助はすぐに永田町総長屋に「請状」を提出し、挨拶回りをして引き取った⁽⁹⁾こと、などが記されている。

喜多川三左衛門は『文政武鑑』によれば「富士見御宝蔵番之頭」配下の「御番衆」式番に属しており、文政四年の時点では牛込高田に住んでいた⁽⁷⁾。すなわち江戸にいる人物である。渋川三郎助は天保八年時点で大郷村名主であることが確認でき⁽⁸⁾、道達は三郎助が松平正名の用人・大橋円助ほか三人へ親類書を提出する時の親類惣代となっていた⁽⁹⁾ことがわかる。

ここでの道達は「榊原式部大輔」すなわち榊原政令の「御手医師」つまり侍医として記されている。榊原政令の式部大輔任官は文化九年（一八一二）、次の遠江守任官は文化十二年なので、⁽¹⁾ここで引用されている「親類書」は、天保十年（一八三九）当時のリアルタイムで作成されたものではなく、文化九年から十二年の四年間に作成

され、幕府に提出されたものの引用と考えられる。

文化期後半の道達は、蒲原郡大郷村庄屋渋川家の親類であり、榊原政令の侍医として捉えられよう。なお、享保期長崎でオランダ流外科を学び、越後に「阿蘭陀流外科」を最初にもたらしたとされる渋川宗寿は、道達と同じ渋川家の出身である⁽¹³⁾。

二・森田甫三宛渋川道達書状と渋川道達死去の報

以下では、四点の森田甫三宛渋川道達書状と、一点の渋川道達死去について伝える書状を紹介し、内容を分析してみたい。

(1) 山吉文庫Z05の渋川道達書状⁽¹⁾

〔封筒裏〕「渋川道達 ①東都神田小川町榊原遠江守様御内医家也、」

〔封筒〕
―越後加茂町二面 江戸小川丁榊原屋敷

森田甫三様 渋川道達

玉案下貴報」

貴翰被下忝拜見仕候、如仰新年之御吉兆、四海同様目出度奉賀候、先以御深家仕候様罷成御揃、愈御安寧被成御迎瑞傾喜之至り、奉賀上候、此表茅屋一統無滞加寿仕候、⁽²⁾然者去年中御出府之節早速御尋被下候處、為指風情も不申上、久々⁽³⁾御拝顔候得共、不本意千萬にて残多奉存候、然処御丁寧之御挨拶、却⁽⁴⁾痛入奉存候、夫⁽⁵⁾右為御挨拶存寄之御器・塩小鴨式ツ御投贈被成下御芳情不淺

難有拝納仕候、^③此度卯之八出府^三付、御地之事共具^三承知、大慶仕候、^④乍憚右御礼御閣中様及叱^江様宜敷被仰述可被下奉頼上候、此^表表家族共入書申上候様呉^申申候、右貴報^并御禮申上度、如此御座候、萬紙奉後音^与申上給候、

恐惶謹言

渋川道達

三月九日
稚周(花押)

この史料から読み取れる内容を順に追っていきこう。この書状では差出によって渋川の名が稚周であることが判明するが、まず傍線部^①では、道達は神田小川町に屋敷を構えていた榊原政令の「御内医家」とされている。先述の「御手医師」という記述を裏づける記述といえよう。政令の遠江守任官は先述の通り文化十二年だが、文政十年には政令が家督を子の政養へ譲って隠居し、江戸本所へ移っている。^⑤そのため、道達を「神田小川町榊原遠江守様御内医家」と称することができるのは、文化十二年から文政十年の間となる。

傍線部^②では、甫三が江戸に来て滞在していた折、甫三は道達を訪ね、対面したことが述べられている。甫三から道達へは、御器・塩小鴨二つが贈られた。ここからは、甫三が江戸留学を終えて帰郷したのちも、定期的に江戸を訪れていたことが推測され、甫三の江戸に対する関心の持続や、両者の交流が定期的な対面を伴っていたことを伺わせる。

また、傍線部^③では、「卯之八」が江戸に来て、道達が「卯之八」へ「御地」すなわち越後の状況を聞いていたことが述べられている。この「卯之八」は豊屋卯八と考えられ、越後と江戸を一定の間隔で往復していた。^⑥道達は書状の中で特に肩書や身元などを詳しく記さずに「卯之八」と呼んでいることから、卯八と道達の対面がこの書状に記された際の一度きりであったとは考えづらく、また具体的な情報の内容が記されていない点から、何か特定の事件について尋ねたというよりは、地元の状況全般を卯八から聞かされたものと推察される。道達は地元の情報を定期的に江戸へ来る甫三や卯八から収集していたのであろう。そして以上の記述からは、甫三―卯八―道達の三者に相互の面識があったことも浮上してくる。

傍線部^④では、道達が森田家と家族ぐるみの付き合いを持っていることがわかる。「叱^様様」については、本書が文化十二年以降のもので、千庵は文化四年に上洛して藤林普山のもとへ留学しており、^⑦道達の没年は、片桐一男氏が紹介された、文政七年二月二十六日付の千庵から甫三への書状^⑧によって、文政七年二月十七日であることが知られるため、これらの情報を総合すると、「叱^様様」とは文化七年生まれの森田千庵の弟・円治^⑨であると考えられる。

以上から、この書状は文化十二年から文政六年の間に記されたものであるといえよう。

(2) 山吉文庫 No. 47 渋川道達書状

別紙旧冬ハ御地も雪不足ニ而初春分長閑ニ相成リ候様被仰下候得共、此表は兎角天氣不順ニ而氣候不宜に、今南風北風相混候仕合、乍去花は遠く、問落花候梅花杯は旧冬之内分遂ニ開、隅田川邊桜は先月下旬が盛り之様ニ承知仕候、乍去小生は噂而已承り候、①当年は六月迄旦那在府中故、病用之外遊山之類他出仕兼候、古語ニも為五斗米と申事御賢察可被下候、②去秋中今「匕役」相成リ別而心痛仕候、存事も難尽紙上漸ニは寛々と申上残し、委曲は青柳分御承知可被下候、草々謹言、

道達

三月九日

甫三様

机下

此品余り失礼ニ御座候得共、有合申候故備貴覽候、御筥納被下候ハ々大慶仕候、以上、

この書状も三月九日付のものである。傍線部①では、「旦那」すなわち主人の榊原政令が六月まで在府であることが知らされる。政令の参勤時期は六月なので、まさしく参勤交代で政令が国元に帰る時期を伝えている。そして「病用之外遊山之類他出仕兼候」すなわち藩主が江戸にいるうちは他出ができない、裏を返せば藩主が国元へ帰ってしまったら他出が可能なることを示しており、道達が藩主

へ随行して国元と江戸を往復するのではなく、常に在府で、藩主が江戸にいるときにのみ侍医として診察などを行っていたことがわかる。

この書状の年次は不詳だが、傍線部②からはこの書状が出された前年の秋に「匕役」すなわち藩主の侍医になったことが明かされるため、道達が政令の侍医になったのは文化期後半のことであると考えられよう。「青柳」の身元は不明だが、文脈からして榊原家に住んでいる者であろうか。

(3) 山吉文庫 No. 48 渋川道達書状

一、乍序為御知申上候、小柳恣弥早春当屋敷辻身仕候、是は内々承り候處、莫大之借金年々相嵩ミ不得止右之仕合同共、氣之毒千万残念ニ奉存候、①御存之通り親常右衛門年来之勤功相積、右様ニ被申付候所、一旦之不了簡より相起り扱々申上候次第も無御座候、昔分御馴染故、一寸為御知申上候、以上、

道達

三月九日

甫三様

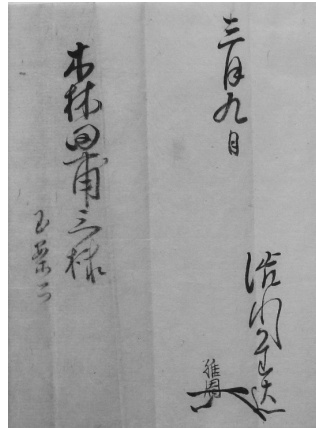
この書状では、榊原家屋敷に仕えていた「小柳恣弥」という人物が、借金を原因として解雇されたことを伝えている。「小柳恣弥」について、その経歴や出自を明らかにするには至らなかったが、榊原家

の江戸屋敷で働いていた人間であることは間違いない。傍線部①にある恣弥の親・小柳常右衛門という人物は、息子の恣弥の進退が問題となる場面で「年来之勤功」に言及されているため、常右衛門は恣弥と共に榊原家に仕えた人物であることが伺え、恣弥が江戸にいたことから、恣弥と同様に藩邸の用人などであった可能性もある。甫三宛の書状中において、特に断りなくこれらの事柄が報告される点から、甫三と道達との個人的な関係のみならず、越後高田藩江戸藩邸内にまで甫三の人的ネットワークが及んでいた状況が推測される。

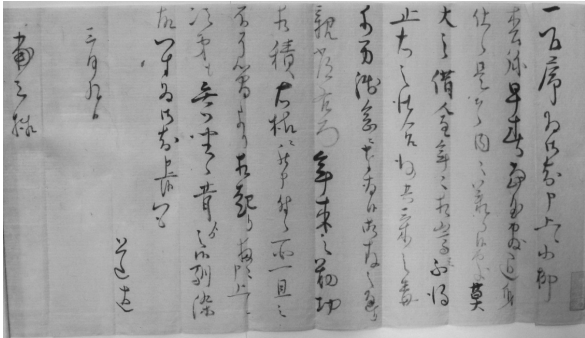
ここまで内容を確認してきた三点の書状は、差出と宛名が同一である点、日付がすべて三月九日である点、そして継紙の材質が同一であり、紙色からも料紙の連続性が認められる(図1)点から、すべて同時に書かれたものとみられる。

【図1】

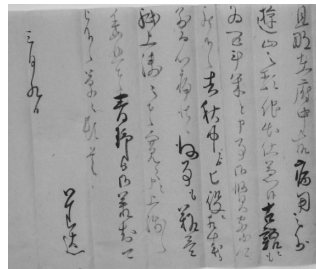
〈No.46 (部分)〉



〈No.48〉



〈No.47 (部分)〉



(4) 山吉文庫 No.49 渋川道達書状

「越後嘉茂^二而^一

森田甫三様 渋川道達

机下」

花翰拝読仕候奉存候、遂日^而残暑難退御座候處、愈其御地御家内様御盛福被成御座候由、大慶千万寿候、草屋無異事罷在申候間、御案慮可被下候、^①然者御母公様御儀、如何之御病氣嘸々御心遣は察入候、御養躰之趣、委曲承知仕候、鴨池へ参り、不残談合候、此乳岩ナル腫物は難治者ニ御座候由ヲ被申聞候、併御服薬專一奉存候、膏葉儀はケ様ニ御拵御用可被成候、

ヲランタヨリ参り居り候散葉少々差出候間、アマレイレ・キユルキウマ両薬調合仕由指出申候間、黄柏末少々御求被為、右三味御合被成、カンフラエ御調合、ケ様被致御用可被成候、十六味流気飲^{〔付箋〕}此黒マンノフ 此内彼ノカンフラ御行可被致候、此黒ハシリ^{手想く御調合後成御用被致候。}減檳榔子・肉桂・紫蘇、加浮萍草・連朮・金銀花・白芷・阜角刺、名散岩・止疼、飲覚ニ御用可被成候、大之御腫物ハ左程御氣分ニは相替儀無之奉御座候、併婦人之大病ニ御座候間、無御油断御養生專一ニ奉存候、右御親父様へよろしく被仰^ニ被下度奉頼上候、

岡先生も当正月中市谷火之番町御相對替被遊候、先方ヲ山上熊太郎様申御代官ニ御座候、同之外と為御知申上候、未相届ケ不申候

哉、承知仕度奉存候、

一、不佞儀も当春より日増繁昌仕大慶奉存候、然は香取甫秋庵跡不佞代脈ニ罷出者当座ノ事ニ御座候、急度人も御座候ハ、相続之處、願出一筆奉存候、^②榊原様御屋敷は不佞儀も御山入仕候、老人^{一名ハ鮮女也ムツカシキヒト}は三河町ニ別宅被致、只今相替儀無御座候、只今之代脈ハ損而已有之、よろしき事は一向無御座候、

^③当春中、内藤豊前守様・内藤大和守様、右之御屋敷御目見、其上御出入難有仕合奉存候、又々七月ニ至^タり、藤堂和泉守様へ御出入被仰付、是又難有仕合奉存候、申上度事は縷々不絶候、益前取込乍失礼後音万々可申上候、此度は親類^并ニ何方へも出問不遂候間、御沙汰無之候やう奉頼候、尚期後音之時候、頓首、

渋川道達

七月十四日

森田甫三様

尚々大郷仙右衛門両人先月八日^ニ此地へ着仕、十九日迄滞留仕、夫今日光道へ見物仕候^而帰宅仕由申聞候、只今時分は帰村も半ニ奉存候、猶又何方へも出、句結^{ウツ}不出候間、不佞御沙汰御無用被存被下度奉頼上候也、

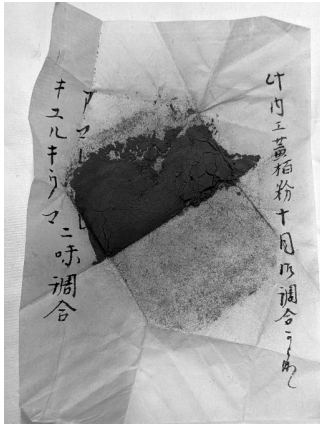
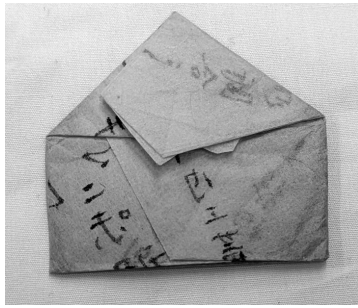
傍線部^①では、甫三の母が病気になったことが語られているが、「御養躰之趣、委曲承知仕候、鴨池へ参り、不残談合候」とあるこ

とから、甫三は道達へ母親の診察を依頼したとみられ、道達は診察依頼を受諾し、南蒲原郡にある鴨池村へ赴いている。ここから本書状が差し出された当時、甫三の母が存命であり、かつ鴨池村に居住していることが判明するが、道達は友人の依頼に応じて遠隔地への出張診療も行っていたようだ。

甫三の母が罹っていた病気とは「乳岩」つまり乳癌であり、治療は服薬と塗り薬によって行ったことがわかる。書状ではこのうち「散薬」すなわち粉薬の製法を助言しているが、「ヲランタヨリ」以下を見る限りでは、オランダからもたらされた蘭方薬と在来の漢方薬を組み合わせたものであったらしい。

本書状には、図2のような実物の粉薬が同封されている点でも注目される。これがおそらく、書状中で述べられていた「散薬」ではないだろうか。

【図2】



また、傍線部②では榊原家の侍医を辞した旨が記されているほか、傍線部③ではその年の春に越後村上藩主・内藤豊前守信敦⁽²²⁾と高遠藩主・内藤大和守頼以⁽²³⁾の屋敷にも出入りするようになったことが述べられており、続けて書状を出す直前とみられる七月には津藩主・藤堂和泉守高允⁽²⁴⁾の屋敷にも出入りするよう命じられた、と記している。No.48の書状が出された時とは異なり、榊原家専属の医師職から離れ、複数の大名家に入出入りする医師として活動を始めたこととみられる。

(5) No.68 吉田茂三郎書状

^(端裏貼紙)「洪川道達死去通知書簡」

「尚々^(端書)乍御世話此書状御序⁽²⁾旁御届被下様奉願上候、以上、」

一 筆致啓上候、然者洪川道達儀、去九月頃分病氣ニ御座候処、養生不相叶、当二月十七日致死去候、此段為御知申呉候様、甫仙

分被相頼候、依之如此御座候、恐惶謹言、

吉田茂三郎

二月廿六日

森田甫三様

① 端書申上候道達死去致候へ者、其御方諸親類ニも相及兼候間、乍御世話御調幸便之序、一筆御書記被遭被下候様ニ御頼申呉候様、是又甫仙相頼申候、依之御頼旁、早々、以上、

この書状は道達の周辺にいたとみられる吉田茂三郎という人物から甫三へ、道達の子・甫仙から頼まれたとして、道達の死去を伝える書状である。そのため本書状の年次は、前述した道達没年の文政七年となる。傍線部①によると、甫仙の頼みとして、甫三から地元の関係者たちにも道達死去を伝えるよう依頼しており、道達の家族が越後において、森田甫三と親交を持っていたことが示されている。

おわりに

ここまで、ごく概略的にはあるが、森田甫三と渋川道達の交流にかかわる書状五点を紹介してきた。渋川道達は榊原家の侍医として活動し、のちに他の諸大名へ出入りした在江戸の医師であり、甫三は彼から江戸についての情報を得ていた。のみならず甫三は時折江戸にのぼり、贈答などによる交流を積極的に行っていたようである。また、甫三は高田藩江戸藩邸内の人物とも交流を持っていたことが伺われ、甫三が江戸留学を終えて帰郷したのちも、かなり濃密に江戸の人々と交流を持ち、随時情報を得ていたと考えられる。特に書状²⁰⁾からは、甫三が江戸の道達に助言や診療を依頼するなど、地域内で完結させるのではなく、広域的人脈を生かした医療実践を行っていたことも判明した。甫三の活動実態は従来必ずしも明らかでない部分が大きかったが、本稿で紹介した数点の書状のみでも、渋川道達を中心的な窓口として、江戸と密接なつながりを

持って動態的に活動していた様子が看取された。

今後は、従来注目されてきた千庵のみならず、甫三についても在地の医療活動と江戸との交流の両面から一層追究してゆくことが求められよう。本稿で紹介できなかった書状の分析を含め、検討を続けたい。

註

(1) 本史料群は山吉卓爾氏より本学へ寄贈されたもので、受け入れ時には片桐一男氏により目録が作成されている(片桐一男「山吉文庫について」『青山史学』五、一九七八年三月、一二三―一三〇頁)。森田千庵とその父・甫三の関係史料が大部分を占める。現在は文学部史学科で保管している。なお、長崎市シーボルト記念館、加茂市立図書館にも『山吉文庫』の一部が収蔵されている。

(2) 以下、甫三の基礎的な情報については、片桐一男「蘭医森田千庵伝研究」『法政史学』一四、一九六一年十月、五三―九〇頁に拠る。

(3) 渋川道達の名が記載されている『人名録』は、現在加茂市立図書館所蔵の山吉文庫にある「Kleine Book 人名録 京都・東都 完」である。加茂市史編集委員会編『加茂市史資料編』二、加茂市、二〇〇八年、六八二頁に翻刻されている。同編『加茂

- 市史資料編』六、同、二〇二〇年、一九五頁も参照されたい。
- (4) 前掲註二を参照。また、これらの内容についてはのちに長谷川一夫氏も言及している（「越後の蘭方医森田兄弟について（一）」『日本医史学雑誌』二〇一三、一九七四年七月、四四—五〇頁、および「越後の蘭方医森田千庵関係資料について」『洋学史研究』一二、一九九五年四月、五九—九四頁、特に九〇頁註四七参照）。ただし、道達と森田父子の關係に主眼を置いた論考ではないため、『人名録』に道達の名があることを確認するに留めている。
- (5) 森川政一『明治・大正上越医界史』北越出版、一九九〇年。森川氏は記述の根拠として「新潟薬科大学紀要『越後の医療』中村辛一論文」を挙げるが、管見の限り同名の論文を見つけないことはできなかった。また、類似の題名で該当すると思しき中村辛一「越後医療史（その2）」（『新潟薬科大学研究報告』二、一九八二年七月、六三頁）にも道達の名はない。更に、中村氏が参照している高田市史編集委員会編『高田市史』一、高田市、一九五八年、三九八頁以下「第六章 藩政時代の生活 第九節 医療」にも道達の記載はない。森川氏が挙げた「渋川道達」は本稿で取り上げた道達の子孫の可能性もあるが、不詳。
- (6) 白根市史編さん委員会編『白根市史』二、白根市、一九八五年、一四頁
- (7) 石井良助監修『文政武鑑』四、柏書房、一九九一年、四一六頁
- (8) 『白根市史』二、一一六五頁
- (9) 『文政武鑑』四、四四一頁。なお、遠藤庄兵衛も文政八年段階で正名の取次として名がみえる。松平正名は、安永三年（一七七四）、西丸小姓組番武士・松平正明の子として生まれ、文化七年西丸小姓頭取、翌年西丸新番頭取格兼御側御用取次見習、文化十五年西丸御側御用取次、文政三年本丸勤め、弘化二年（一八四五）隠居、弘化四年死去とある（橋本佐保「松平正名」『徳川幕臣人名辞典』東京堂出版、二〇一〇年、六三八頁）。
- (10) 史料中、引用部に続く箇所には渋川三郎助の届け出についての記事がある。
- (11) 『高田市史』一、二〇三—二〇四頁
- (12) 近世期の渋川家については小村式・大郷村誌編纂委員会共編『大郷村誌』（大郷村誌編纂委員会、一九五六年）第一・二章に詳しい。また、文化人としての三郎助については同書四六〇—四六一頁を参照。
- (13) 『大郷村誌』四七—四八頁、四五八頁
- (14) 傍線・番号引用者。以下の引用史料も同じ。
- (15) 『高田市史』一、二〇四頁
- (16) 前掲註二片桐論文、六七頁

- (17) 前掲註四 長谷川「越後の蘭方医森田兄弟について(一)」
四五頁。藤林塾生時代の千庵について、その様子を普山から甫
三へ伝えていたことが知られている(『加茂市史資料編』二、
六七三―六七六頁)。
- (18) 書状中に「一、渋川道達老義も先日申上候病眼今肝臓の閉塞
相発し、其分黄疸を發し当二月十七日之夜四ツ時死去被致候、
悴甫仙子義も氣の毒に奉存候へ共、是とても無致方事に御座候」
とある(前掲註二片桐論文、六七頁)。
- (19) この点から、道達が甫三とのみではなく千庵とも交流を持っ
ていたことがわかる。
- (20) 前掲註四 長谷川「越後の蘭方医森田兄弟について(一)」
四五頁
- (21) 石井良助監修『文化武鑑』七、柏書房、一九八二年、二五九
頁
- (22) 「内藤信敦」『日本人名大辞典』Japan Knowledge
- (23) 「内藤頼以」『日本人名大辞典』Japan Knowledge
- (24) 「藤堂高兌」『日本人名大辞典』Japan Knowledge

執筆者（掲載順）

福田 美 雪	教 授	文学部フランス文学科
笹 川 渉	教 授	文学部英米文学科
秋 道 瑠 香		文学研究科比較芸術学専攻博士後期課程二年
堀 内 秀 平		文学研究科比較芸術学専攻博士後期課程一年
DABBS, Thomas W.	名 誉 教 授	文学部
結 城 正 美	教 授	文学部英米文学科
佐 藤 かつら	教 授	文学部比較芸術学科
岩 田 みゆき	教 授	文学部史学科
小 宮 京	教 授	文学部史学科
津 田 徹 英	教 授	文学部比較芸術学科
堀 内 誠 司		文学研究科史学専攻博士後期課程二年

青山学院大学文学部附置人文科学研究所論叢 第7号

2026年2月9日 印刷

2026年3月1日 発行

〒150-8366 東京都渋谷区渋谷4-4-25

編集兼
発行者

青山学院大学文学部附置人文科学研究所

代表者 荒木善太

〒162-0801
印刷所

東京都新宿区山吹町81番地
株式会社創志
